(19)日本国特許庁(JP)

(12)特許公報(B2)

(11)特許番号
特許第7180050号
(P7180050)

(45)発行日　令和4年11月30日(2022.11.30)

(24)登録日　令和4年11月21日(2022.11.21)

(51)国際特許分類		FI		
G06Q 40/00 (2012.01)		G06Q	40/00	420
G06Q 10/06 (2012.01)		G06Q	10/06	328
G06F 3/048(2022.01)		G06F	3/048	

請求項の数　5　（全61頁）

(21)出願番号　特願2021-567694(P2021-567694)
(86)(22)出願日　令和2年12月25日(2020.12.25)
(86)国際出願番号　PCT/JP2020/048847
(87)国際公開番号　WO2021/132603
(87)国際公開日　令和3年7月1日(2021.7.1)
審査請求日　令和3年12月24日(2021.12.24)
(31)優先権主張番号　特願2019-239608(P2019-239608)
(32)優先日　令和1年12月27日(2019.12.27)
(33)優先権主張国・地域又は機関
日本国(JP)
早期審査対象出願

(73)特許権者　512174136
株式会社覚王山総研
愛知県名古屋市中区丸の内３－１９－１
４
(74)代理人　100166039
弁理士　富田 款
(72)発明者　林 千尋
愛知県名古屋市中区丸の内３－１９－１
４ 株式会社覚王山総研内
審査官　貝塚 涼

最終頁に続く

(54)【発明の名称】　情報処理装置、情報処理方法およびプログラム

(57)【特許請求の範囲】

【請求項１】

財務諸表から得られる値、又は財務諸表から得られる値を用いる所定の演算結果を項目として、当該項目を用いる複数の計算式を演算することでキャッシュの増減額を求める会計演算として、

営業キャッシュフローを求めるために予め定められた売上高を含む複数の第１種項目を入力パラメータとして用いる前記計算式に従って、当該営業キャッシュフローが演算され、

投資キャッシュフローを求めるために予め定められた複数の第２種項目を入力パラメータとして用いる前記計算式に従って、当該投資キャッシュフローが演算され、

前記営業キャッシュフローと前記投資キャッシュフローとが第３種項目とされて、これら２つの前記第３種項目を加算する前記計算式に従って、フリーキャッシュフローが演算され、

財務キャッシュフローを求めるために予め定められた複数の第４種項目を入力パラメータとして用いる前記計算式に従って、当該財務キャッシュフローが演算され、

前記フリーキャッシュフローと前記財務キャッシュフローとが第５種項目とされて、これら２つの前記第５種項目を加算する前記計算式に従って、前記キャッシュの増減額が演算される、

という演算順番での第１演算が実行された際に、

前記複数の第１種項目、前記営業キャッシュフロー、前記複数の第２種項目、前記投資キャッシュフロー、前記フリーキャッシュフロー、前記複数の第４種項目、前記財務キャ

ッシュフロー、及び前記キャッシュの増減額のうち、最初に表示させる項目、演算の途中経過を示す１以上の項目、及び最後に表示させる項目の夫々を、
前記演算順番に基づいて設定された表示順番に従って、所定の表示デバイスに順次アニメーション表示させる制御を実行する、
表示制御手段
を備える情報処理装置。
【請求項２】
前記表示制御手段は、
さらに、前記第１演算の後に、前記第１演算の前記演算順番に対して逆に遡る順番で、目標となる前記キャッシュの増減額から目標達成に必要な前記売上高を演算する第２演算が実行された際に、
前記キャッシュの増減額、前記財務キャッシュフロー、前記複数の第４種項目、前記フリーキャッシュフロー、前記投資キャッシュフロー、前記複数の第２種項目、前記営業キャッシュフロー、前記複数の第１種項目のうち、最初に表示させる項目、前記逆に遡る順番の演算の途中経過を示す１以上の項目、及び最後に表示させる項目の夫々を、
前記逆に遡る順番に基づいて設定された表示順番に従って、前記所定の表示デバイスに順次アニメーション表示させる制御をさらに実行する、
請求項１に記載の情報処理装置。
【請求項３】
前記表示制御手段は、
前記複数の計算式のうち所定計算式の説明、若しくは当該所定計算式の演算結果の説明、又は、当該演算結果に基づくアドバイスを、
前記所定の表示デバイスにさらに表示する
請求項１又は２に記載の情報処理装置。
【請求項４】
情報処理装置が実行する情報処理方法において、
財務諸表から得られる値、又は財務諸表から得られる値を用いる所定の演算結果を項目として、当該項目を用いる複数の計算式を演算することでキャッシュの増減額を求める会計演算として、
営業キャッシュフローを求めるために予め定められた売上高を含む複数の第１種項目を入力パラメータとして用いる前記計算式に従って、当該営業キャッシュフローが演算され、
投資キャッシュフローを求めるために予め定められた複数の第２種項目を入力パラメータとして用いる前記計算式に従って、当該投資キャッシュフローが演算され、
前記営業キャッシュフローと前記投資キャッシュフローとが第３種項目とされて、これら２つの前記第３種項目を加算する前記計算式に従って、フリーキャッシュフローが演算され、
財務キャッシュフローを求めるために予め定められた複数の第４種項目を入力パラメータとして用いる前記計算式に従って、当該財務キャッシュフローが演算され、
前記フリーキャッシュフローと前記財務キャッシュフローとが第５種項目とされて、これら２つの前記第５種項目を加算する前記計算式に従って、前記キャッシュの増減額が演算される、
という演算順番での第１演算が実行された際に、
前記複数の第１種項目、前記営業キャッシュフロー、前記複数の第２種項目、前記投資キャッシュフロー、前記フリーキャッシュフロー、前記複数の第４種項目、前記財務キャッシュフロー、及び前記キャッシュの増減額のうち、最初に表示させる項目、演算の途中経過を示す１以上の項目、及び最後に表示させる項目の夫々を、
前記演算順番に基づいて設定された表示順番に従って、所定の表示デバイスに順次アニメーション表示させる制御を実行する、
表示制御ステップ、
を含む情報処理方法。

【請求項５】
コンピュータに、
財務諸表から得られる値、又は財務諸表から得られる値を用いる所定の演算結果を項目として、当該項目を用いる複数の計算式を演算することでキャッシュの増減額を求める会計演算として、
営業キャッシュフローを求めるために予め定められた売上高を含む複数の第１種項目を入力パラメータとして用いる前記計算式に従って、当該営業キャッシュフローが演算され、
投資キャッシュフローを求めるために予め定められた複数の第２種項目を入力パラメータとして用いる前記計算式に従って、当該投資キャッシュフローが演算され、
前記営業キャッシュフローと前記投資キャッシュフローとが第３種項目とされて、これら２つの前記第３種項目を加算する前記計算式に従って、フリーキャッシュフローが演算され、
財務キャッシュフローを求めるために予め定められた複数の第４種項目を入力パラメータとして用いる前記計算式に従って、当該財務キャッシュフローが演算され、
前記フリーキャッシュフローと前記財務キャッシュフローとが第５種項目とされて、これら２つの前記第５種項目を加算する前記計算式に従って、前記キャッシュの増減額が演算される、
という演算順番での第１演算が実行された際に、
前記複数の第１種項目、前記営業キャッシュフロー、前記複数の第２種項目、前記投資キャッシュフロー、前記フリーキャッシュフロー、前記複数の第４種項目、前記財務キャッシュフロー、及び前記キャッシュの増減額のうち、最初に表示させる項目、演算の途中経過を示す１以上の項目、及び最後に表示させる項目の夫々を、
前記演算順番に基づいて設定された表示順番に従って、所定の表示デバイスに順次アニメーション表示させる制御を実行する、
表示制御ステップ、
を含む制御処理を実行させるプログラム。
【発明の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
本発明は、情報処理装置に関する。
【背景技術】
【０００２】
会社の経理部や会社外部からサポートしている会計事務所等では、表計算ソフトウェア等をインストールしたコンピュータ（以下これを「表計算装置」と呼ぶ）により月次試算表や会計関連図表、経営管理資料等を作成している。
【０００３】
従来の表計算装置には、会計ソフトデータ、税務計算ソフトデータ、銀行データ、カード会社データ、通販会社データ、タイムカードデータ、レジデータ、会社作成データ等の会計データを取得する機能やデータの種別に応じて、どういったグラフ（円グラフ、折れ線グラフ、棒グラフ等）が適するかを判定してグラフ化する機能等が実装されている。
【先行技術文献】
【特許文献】
【０００４】
【文献】特表２００３－５３０６０８号公報
【発明の概要】
【発明が解決しようとする課題】
【０００５】
しかしながら、従来の表計算装置の上記機能により生成される図表は、最初からすべての表示項目が静的・固定的に表示されており、具体的個別の数値が入ることによって、どのような結果が導き出されるのか、さらにはどういう過程でその結果に至ったのかを理解

できるように表示の工夫をしたものはない。
　さらには、月次試算表や会計関連図表、経営管理資料等を作成する前提となるべき、経営の根幹をなす戦略策定プロセス、戦術を具体化する事業計画書策定プロセスについては、経営現場で活用できる具体的、かつ実務的なシステム構築や資料の作成がほとんど行われていない。
　即ち、中堅・中小企業にとって、実際の経営現場で戦略的な経営を行おうとしても、その具体的な考え方、行動の出し方が、全く分からないのが現状である。経営を戦略的に展開する上で、戦略、戦術の策定、さらにはそれらに基づく経営実務行動の打ち出し方を明確にする解説書やシステムはなかった。
【０００６】
　本発明は、このような状況に鑑みてなされたものであり、月次試算表や会計関連図表、経営管理資料等を見易く表示するのみでなく、経営の根幹となる戦略策定プロセス、戦術を具体化する事業計画書策定プロセスについても、戦略的な経営展開を行うための一連の流れに関する思考を整理して数値と結果の因果関係にストーリ性を加味し、思考の流れを理解しやすいようにグラフや図表の表示を工夫することで、戦略的な経営展開に活用できるようにすることを目的とする。
【課題を解決するための手段】
【０００７】
　上記目的を達成するため、本発明の一態様の情報処理装置は、
　複数の数値群の夫々の因果関係に基づく順番で前記数値群を提示する提示手段、
　を備える。
　本発明の一態様の上記情報処理装置に対応する情報処理方法及びプログラムも、本発明の一態様の情報処理方法及びプログラムとして提供される。
【発明の効果】
【０００８】
　本発明によれば、思考の流れを整理して、数値と結果の因果関係にストーリ性を加味して表現するように図表やグラフを表示し経営戦略に活用できるようにすることができる。
【図面の簡単な説明】
【０００９】
【図１】本発明の情報処理装置に係るサーバを含む一つの実施の形態の経営戦略展開支援システムを示す図である。
【図２】図１の経営戦略展開支援システムのサーバのハードウェア構成を示す図である。
【図３】図２の経営戦略展開支援システムのサーバの機能的構成の一例を示す機能ブロック図である。
【図４】図２の経営戦略展開支援システムのサーバの動作を示すフローチャートである。
【図５】会計事務所コメント画面を示す図である。
【図６】税額シミュレーション画面を示す図である。
【図７】年計グラフのアニメーション表示画面を示す図である。
【図８】給与手当の費用推移グラフの画面を示す図である。
【図９】画面名に月次損益計算書と記載された月次損益推移表（販管費）の画面を示す図である。
【図１０】月次損益推移表（販管費）の画面の、クリックした項目「貸借料」の行が着色された様子を示す図である。
【図１１】ＳＴＲＡＣ表をアニメーション表示させるスタート直後の画面を示す図である。
【図１２】累計ボタンで、アニメーション表示させたＳＴＲＡＣ表の最終画面を示す図である。
【図１３】キャッシュフロー計算書のスタート直後の画面を示す図である。
【図１４】ＧＯボタンにより、アニメーションを開始したキャッシュフロー計算書の画面を示す図である。
【図１５】自動展開機能で、又は「ＮＥＸＴ（＞）」ボタンの操作で横スクロールしたキ

ャッシュフロー計算書の画面を示す図である。
【図１６】自動展開機能で、又は「ＮＥＸＴ（＞）」ボタンのさらなる操作で横スクロールしたキャッシュフロー計算書の最終画面を示す図である。
【図１７】ＧＯボタンにより、アニメーションを開始したキャッシュフロー貸借対照表の画面を示す図である。
【図１８】自動展開機能で、又は「ＮＥＸＴ（＞）」ボタンの操作で、横スクロールしたキャッシュフロー貸借対照表の最終画面を示す図である。
【図１９】印刷機能のメニュー画面を示す図である。
【図２０】月次報告進捗一覧表の画面を示す図である。
【図２１】経営戦略展開支援システムの機能画面を示す図である。
【図２２】銀行格付けランキング機能の第１画面（金融機関が特に重視する財務指標とは？）を示す図である。
【図２３】キャッシュＢＥＦＯＲＥ機能のアニメーション表示画面「ＧＯ」ボタンによる、又は「早送り（＞＞）」ボタンの自動展開機能による「アニメーション中」」を示す図である。
【図２４】キャッシュＢＥＦＯＲＥ機能のアニメーション表示画面「「ＮＥＸＴ（＞）」ボタンによる、又は「早送り（＞＞）」ボタンの自動展開機能による「横スクロール中」」を示す図である。
【図２５】キャッシュＢＥＦＯＲＥ機能のアニメーション表示画面「横スクロール終了」を示す図である。
【図２６】キャッシュＡＦＴＥＲ機能の第１画面「目標値入力」を示す図である。
【図２７】キャッシュＡＦＴＥＲ機能の第２画面「「ＰＲＥ（＜）」ボタンによる、又は「早送り（＜＜）」ボタンの自動展開機能による「横逆スクロール中」」を示す図である。
【図２８】キャッシュＡＦＴＥＲ機能の第２画面「横逆スクロール終了」を示す図である。
【図２９】事業計画書策定シミュレーション機能の第２画面（詳細機能の選択画面）を示す図である。
【図３０】売上シミュレーション機能のシミュレーション画面（現在までの実績シミュレーション画面）を示す図である。
【図３１】売上シミュレーション機能のシミュレーション画面（目標売上高達成のための目標シミュレーション画面）を示す図である。
【図３２】利益額シミュレーション機能のシミュレーション画面（目標利益額達成のための目標シミュレーション画面）を示す図である。
【図３３】ＳＴＡＲＴボタンで、アニメーションを開始したキャッシュ残高推移表の画面を示す図である。
【図３４】アニメーション表示させたキャッシュ残高推移表の画面「アニメーション終了」を示す図である。
【図３５】月次決算書予算実績差異分析機能に関する共通機能選択画面（メインメニュー画面）を示す図である。
【図３６】月次決算書予算実績差異分析機能に関するオプション機能選択画面（サブメニュー画面）を示す図である。
【図３７】キー指標（選択した売上高営業利益率）のアニメーション画面「アニメーションを開始する前の状態」を示す図である。
【図３８】キー指標（選択した売上高営業利益率）のアニメーション画面「アニメーションを終了した状態」を示す図である。
【図３９】商品別営業所別色分布分析表（アニメーション表示を開始した状態）を示す図である。
【図４０】商品別営業所別色分布分析表（アニメーション表示を終了した状態）を示す図である。
【図４１】人時売上高グラフの画面を示す図である。
【発明を実施するための形態】

【００１０】
以下、本発明の実施の形態を説明する。
この実施の形態の経営戦略展開支援システムは、経営に活用することを十分意識した、ビジネスに役立つ経営管理資料等を作成することを意図しており、経営者が通常、どう考えるかを理解し、思考の流れを整理して、数値と結果の因果関係にストーリ性を加味して表現し、見やすくわかりやすい、経営に活かせるグラフや図表等の作成を可能にするシステムである。
【００１１】
まず、図１乃至図３を参照して経営戦略展開支援システムの構成について説明する。
図１は、本発明に係る一つの実施の形態のサーバ、事務所端末、企業端末を含む経営戦略展開支援システムの構成例を示す図である。図２は、図１の経営戦略展開支援システムのうちサーバのハードウェア構成を示すブロック図である。図３は、図１及び図２の経営戦略展開支援システムのうちサーバの機能的構成の一例を示す機能ブロック図である。
【００１２】
図１に示す経営戦略展開支援システムは、サーバ１と、ユーザ端末２－ａ、２－ｂ、２－ｎ等がインターネット等のネットワークＮを介して接続され、相互に通信するように構成されている。即ち、この実施形態の経営戦略展開支援システムは、クラウド型の情報処理システムと言える。
【００１３】
ユーザ端末２－ａは、例えば主会計事務所等に配置されている。ユーザ端末２－ｂは、例えば提携会計事務所等に配置されている。ユーザ端末２－ｎは、例えば企業等に配置されている。
【００１４】
主会計事務所や提携会計事務所のユーザ端末２－ａ、２－ｂには、夫々の会計事務所が受け持つ企業の夫々の会計データや財務データ、労務データ等を含む様々なデータがクライアントデータＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄとして記憶されている。
企業のユーザ端末２－ｎには、自社の会計データや財務データ、労務データ等を含む様々なデータＥ（以下「自社データＥ」という）が記憶されている。
【００１５】
図１に示すように、クラウド型のシステムの場合、サーバ１にシステム本体が備えられており、例えば主会計事務所のデータをサーバ１に預ける場合、主会計事務所のユーザ端末２－ａからサーバ１へログインし、ユーザ端末２－ａに保持されているクライアントデータＡ又はＢをサーバ１（システム本体）に格納してログアウトする。
また、主会計事務所からサーバ１で生成した資料を閲覧する際は、ユーザ端末２－ａからサーバ１へログインし、クライアントデータＡ又はＢに基づき生成した資料にアクセスすることで、その資料を閲覧することができる。
主会計事務所でクライアントデータＡ又はＢに基づき生成した資料を使用する際は、ユーザ端末２－ａからサーバ１へログインし、生成した資料にアクセスし、アウトプット操作（ダウンロード操作）をすることで、サーバ１（システム本体）から生成した資料をアウトプット（ダウンロード）することができる。
他の連携会計事務所のクライアントデータＣ又はＤや企業の自社データＥについても同様である。
【００１６】
なお、以下、ユーザ端末２－ａ乃至２－ｎの夫々を個々に区別する必要がない場合、これらをまとめて「ユーザ端末２」と呼ぶ。
本経営戦略展開支援システムは、会社等の企業に関する各種数値と結果を取得し、数値と結果の因果関係にストーリ性を加味して、思考の流れに応じて順次結果を表示していく仕組みを構築するものである。
本経営戦略展開支援システムでは、数値（＝因子）を評価、判断して、表示のフロー（ストーリ＝因果関係）と表示形態（結果）を選択し、わかりやすい流れで、見やすいグラ

フや図表等を表示することができる。
【００１７】
　また、本経営戦略展開支援システムでは、ストーリに沿って、順次見やすいグラフ・図表等を表示させることによって、右脳を刺激し、新しいアイデアや発想を生みやすく、日本の企業、特に中堅・中小企業のＡＩ、ＩＴの次世代に向けた躍進の一助となりうる。無駄になっている多くの会議の場を活性化し、労働生産性アップに寄与することができる。
　さらには、本経営戦略展開支援システムでは、上記の過程に係るデータの収集、変換、集計、グラフ化のほとんどを自動化しており、経営管理資料作成業務を大幅に効率化できる。
　本経営戦略展開支援システムでは、国が推進するＲＰＡ（Ｒｏｂｏｔｉｃ　Ｐｒｏｃｅｓｓ　Ａｕｔｏｍａｔｉｏｎ：業務自動化による生産性向上の取り組み)による働き方改革やデジタル化の流れに沿った、次世代への準備をおこなうことができる。
【００１８】
　図２は、図１の経営戦略展開支援システムのうちサーバのハードウェア構成を示すブロック図である。
【００１９】
　サーバ１は、ＣＰＵ（Ｃｅｎｔｒａｌ　Ｐｒｏｃｅｓｓｉｎｇ　Ｕｎｉｔ）１１と、ＲＯＭ（Ｒｅａｄ　Ｏｎｌｙ　Ｍｅｍｏｒｙ）１２と、ＲＡＭ（Ｒａｎｄｏｍ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｍｅｍｏｒｙ）１３と、バス１４と、入出力インターフェース１５と、出力部１６と、入力部１７と、記憶部１８と、通信部１９と、ドライブ２０と、を備えている。
【００２０】
　ＣＰＵ１１は、ＲＯＭ１２に記録されているプログラム、又は、記憶部１８からＲＡＭ１３にロードされたプログラムに従って各種の処理を実行する。
　ＲＡＭ１３には、ＣＰＵ１１が各種の処理を実行する上において必要なデータ等も適宜記憶される。
【００２１】
　ＣＰＵ１１、ＲＯＭ１２及びＲＡＭ１３は、バス１４を介して相互に接続されている。このバス１４にはまた、入出力インターフェース１５も接続されている。入出力インターフェース１５には、出力部１６、入力部１７、記憶部１８、通信部１９及びドライブ２０が接続されている。
【００２２】
　出力部１６は、ディスプレイやスピーカ等で構成され、各種情報を画像や音声として出力する。入力部１７は、キーボードやマウス等で構成され、各種情報を入力する。
【００２３】
　記憶部１８は、ハードディスクやＤＲＡＭ（Ｄｙｎａｍｉｃ　Ｒａｎｄｏｍ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｍｅｍｏｒｙ）等で構成され、各種データを記憶する。
　通信部１９は、インターネットを含むネットワークＮを介して他の装置（図１の例ではユーザ端末２等）との間で通信を行う。
【００２４】
　ドライブ２０には、磁気ディスク、光ディスク、光磁気ディスク、或いは半導体メモリ等よりなる、リムーバブルメディア２１が適宜装着される。ドライブ２０によってリムーバブルメディア２１から読み出されたプログラムは、必要に応じて記憶部１８にインストールされる。
　また、リムーバブルメディア２１は、記憶部１８に記憶されている各種データも、記憶部１８と同様に記憶することができる。
【００２５】
　なお、図１の経営戦略展開支援システムのうちユーザ端末２は、図２に示すサーバ１のハードウェア構成と基本的に同様の構成を有している。
【００２６】
　以下、図３を参照して図１の経営戦略展開支援システムのうちサーバ１の機能的構成の

一例について説明する。図３は、図２のサーバの機能的構成の一例を示す機能ブロック図である。

【００２７】

図２に示したサーバ１の記憶部１８の一領域には、図３に示すように、データベース３０（以下「ＤＢ３０」と称す）が保持（記憶）されている。

ＤＢ３０には、ユーザ端末２－ａ、２－ｂ、…２－ｎから取得されたデータとしては、例えば会計ソフトウェアのデータ（会計データ）、税務計算ソフトウェアのデータ（税務データ）、銀行システムのデータ（預金データ）、カード会社のカードデータ、通販会社のデータ、労務管理ソフトウェアのタイムカードデータ（就労時間等のデータ）、ＰＯＳシステム等のレジデータ、企業で管理される自社データ（企業の経営状況を示す財務データ、製造データ、営業データ、勤務管理データ等を含む）のうち一つ以上のデータが記憶されている。

【００２８】

サーバ１のＣＰＵ１１（図２参照）においては、処理を実行する際に、データ取得部４１、キー指標提示部４２、数値群提示部４３、印刷制御部４４、通知制御部４５、連絡部４６等が機能する。

【００２９】

データ取得部４１は、ユーザ端末２からデータを取得し、ＤＢ３０にユーザ毎に記憶する。この経営戦略展開支援システムの利用ユーザ（クライアント）が企業の場合、企業における業務処理のデータとして、例えば会計データ等の会計処理に関するデータ（数値群）を得る。

具体的に、データ取得部４１は、ユーザ端末２より例えば小売業等の企業の売上高のデータを含む会計データ、その企業の財務データ等を含む複数の数値群を取得しＤＢ３０に記憶する。

また、データ取得部４１は、企業のユーザ端末２より販売業務で物品を販売して得られた売上高のデータを含む会計データと、企業の従業員の勤務に関するデータ（例えば勤務時間が記録されたタイムカードデータ等）とを取得しＤＢ３０に記憶する。

【００３０】

キー指標提示部４２は、キー指標の処理に関する様々な画面を表示し、画面に設けられた様々なボタンが操作されることにより、ＤＢ３０からデータを読み出し、読み出したデータを基に、業務に応じたキー指標を提示する。

具体的には、販売業務を行う企業におけるキー指標を表示する場合、キー指標提示部４２は、ＤＢ３０から販売業務に携わる従業員のタイムカードデータ（就労時間）と販売業務で物品を販売したレジデータ（売上高）とを日単位、週単位、月単位等の何れかの単位で読み出し、これらのデータを用いて従業員１人の単位時間あたりの売上高を、キー指標として提示する（例えば図４１の人時売上高グラフの画面４１０の折れ線グラフ４１４やその値等を参照）。

即ち、キー指標提示部４２は、ＤＢ３０の売上高のデータと従業員のタイムカードデータに基づいて販売業務に応じたキー指標（例えば人時売上高）をユーザ端末２に提示する。

【００３１】

キー指標提示部４２は、キー指標計算部５１及び表示制御部５２を有する。

キー指標計算部５１は、例えば従業員１人の単位時間あたりの売上高に関して、所定期間に業務全体として得られる売上高を所定期間の全従業員の就労時間で割って求める。

具体的には、キー指標計算部５１は、例えば１日に業務全体として得られる売上高を１日の全従業員の就労時間で割って人時売上高を求め、その日のキー指標の値とし、これを１か月分求めたものを出力する。

【００３２】

表示制御部５２は、例えばキー指標計算部５１により計算された人時売上高等のキー指標を、時系列の順又は計算（処理）の流れの順にアニメーション表示する。具体的には、例えば図４１に示す人時売上高グラフの画面４１０の折れ線グラフ４１４等が表示される。

【００３３】
人時売上高グラフの画面４１０では、所定期間に業務全体として得られる売上高（折れ線グラフ４１２等）と、業務に従事する全従業員の就労時間（棒グラフ４１３等）のうち少なくとも一方を、従業員１人の単位時間あたりの売上高を示す情報、例えば人時売上高の折れ線グラフ４１４等に対応させて表示する。
即ち、表示制御部５２は、所定期間に業務全体として得られる売上高と、業務に従事する全従業員の就労時間のうち少なくとも一方を、従業員１人の単位時間あたりの売上高を示す情報、例えば人時売上高等に対応させて表示する。
【００３４】
数値群提示部４３は、複数の数値群の夫々の因果関係に基づく順番で数値群を提示する。
具体的には、数値群提示部４３は、数値群の処理に関する様々な画面を表示し、画面に設けられた様々なボタンが操作されることにより、ＤＢ３０からデータを読み出し、読み出したデータを基に求めた数値群を提示する。
【００３５】
具体的には、数値群提示部４３は、企業における業務処理のデータとしてＤＢ３０に記憶された会計処理に関するデータ（会計データ）のうち、所定の画面に表示するデータとして必要なデータ（数値群）を読み出して、必要に応じて計算した上で表示制御部６９へ出力し、因果関係の順又は因果関係に起因する期間の順に表示制御部６９にアニメーション表示させる。表示形態の一例は、例えばグラフや表等であるが、これだけに限定されない。
因果関係の順とは、例えば図１１，図１２の画面１２０に示すように、初めに売上高のグラフ１２３ａ、続いて、変動費のグラフ１２４ａ、売上高から変動費を差引いた粗利益のグラフ１２５ａ、固定費のグラフ１２７ａ、最後に、粗利益から固定費を差し引いて得られる利益のグラフ１２８ａを表示するというように、業績処理の計算の順序や業績が得られる経過の順序、勘定項目の順等を言う。
また、因果関係に起因する期間の順とは、例えば企業の決算期が６月から５月であれば６月、７月、８月という順を示す。なお、これらの順序は一例であり、これ以外にも因果関係に基づく順番で表示するものは考えられるため、上記の例に限定されるものではない。
【００３６】
数値群提示部４３は、予算実績計算部６１、過去キャッシュ計算部６２、今期キャッシュ計算部６３、事業計画生成部６４、日毎データ集計部６５、税額計算部６６、推移計算部６７、内訳計算部６８、表示制御部６９を有する。
【００３７】
予算実績計算部６１は、業務における所定期間毎（月毎等）の予算と実績との差異又は２期分の実績どうしの差異（今期と前期の差異等）を計算した結果として数値群を得る。予算実績計算部６１と表示制御部６９により月次決算書予算実績差異分析機能の一つが実現される。
【００３８】
過去キャッシュ計算部６２は、過去２期分（前期と前々期等）の会計データに基づいて、過去の所定期間（１年分）のキャッシュ増減額を通期分（１年間分）計算して数値群とする。過去キャッシュ計算部６２と表示制御部６９によりキャッシュＢＥＦＯＲＥ機能が実現される。
【００３９】
過去キャッシュ計算部６２は、前期等の会計データに基づいて、前期等の所定時期（各月末等）の貸借対照表科目残高を集計して数値群とする。過去キャッシュ計算部６２と表示制御部６９により月次決算書予算実績差異分析機能の中の過去のキャッシュフロー貸借対照表が生成される。
【００４０】
今期キャッシュ計算部６３は、過去の勘定項目毎のキャッシュ増減額に基づいて、指定された今期の目標キャッシュ獲得額を達成するための勘定項目毎の必要キャッシュ額を計

算して数値群とする。今期キャッシュ計算部６３と表示制御部６９によりキャッシュＡＦＴＥＲ機能が実現される。

【００４１】

今期キャッシュ計算部６３は、２期分（今期と前期等）の会計データに基づいて、今期の所定期間（１年分）のキャッシュ増減額を通期分（１か月分等）計算して数値群とする。今期キャッシュ計算部６３と表示制御部６９により月次決算書予算実績差異分析機能の中のキャッシュフロー計算書が生成される。

【００４２】

今期キャッシュ計算部６３は、今期の会計データに基づいて、今期の所定時期（各月末等）の貸借対照表科目残高を集計して数値群とする。今期キャッシュ計算部６３と表示制御部６９により月次決算書予算実績差異分析機能の中のキャッシュフロー貸借対照表が生成される。

【００４３】

事業計画生成部６４は、キャッシュＡＦＴＥＲ機能により登録された所定期間（１年間）で達成すべき事業目標額に基づいて、所定期間（１年間）を単位期間（１か月毎）に区画し、既に経過した経過期間と未経過期間に分けた事業計画の詳細データを生成する。事業目標額には、事業計画書のデータの例えば目標売上高、目標キャッシュ額等が含まれる。

１年間の事業計画書のデータの目標売上高、目標キャッシュ額等を月毎に分けて経過期間に関しては実績値を集計し、未経過期間に関してはシミュレーションを繰り返すことによって、１年間を通して、目標売上高、目標キャッシュ額等を達成することができるように、期中随時、事業計画を見直すことができる。事業計画生成部６４と表示制御部６９により事業計画書策定シミュレーション機能が実現される。

【００４４】

日毎データ集計部６５は、企業が活動する中で、単位期間で変動する要因を含む、例えば現金預金残高、売掛金残高、借入金残高、水道光熱費発生額等の数値群を単位期間毎に集計する。日毎データ集計部６５と表示制御部６９により月次決算書予算実績差異分析機能の中のキャッシュ残高推移表が生成される。

【００４５】

税額計算部６６は、概要税金シミュレーション画面１０８（図６参照）をユーザ端末２－ｎに表示し、概要税金シミュレーション機能を実行する。

具体的には、税額計算部６６は、税額シミュレーションに必要な利益額、課税所得額等の会計データ、税務データをＤＢ３０から読み出し、年間の予測税額を計算して数値群とし、表示制御部６９へ出力する。

【００４６】

推移計算部６７は、全社年計グラフ画面１０９（図７参照）をユーザ端末２－ｎに表示して全社年計グラフアニメーション表示機能を実行する。

具体的には、推移計算部６７は、年計額の計算に必要な前々期・前期・今期の売上高や利益額の月次推移額等の会計データをＤＢ３０から読み出し、年計額を算出して数値群とし、表示制御部６９に出力する。

【００４７】

また、推移計算部６７は、費用推移グラフの画面１１２（図８参照）をユーザ端末２－ｎに表示して費用推移グラフアニメーション表示機能を実行する。

具体的には、推移計算部６７は、費用推移の計算に必要な前期、今期の費用項目の月次推移額等の会計データをＤＢ３０から読み出し、前期の数値、今期の数値、差異額を算出して数値群とし、表示制御部６９に出力する。

【００４８】

推移計算部６７は、月次推移表（販管費）の画面１１６（図９参照）をユーザ端末２－ｎに表示して月次推移表（販管費）のアニメーション表示機能を実行する。

具体的には、推移計算部６７は、月次の販管費の計算に必要な前期・今期の販管費項目の月次推移額等の会計データをＤＢ３０から読み出し、月次の販管費を算出して数値群と

し、表示制御部６９に出力する。
【００４９】
内訳計算部６８は、ＳＴＲＡＣ表画面１２０（図１１参照）をユーザ端末２－ｎに表示してＳＴＲＡＣ表アニメーション表示機能を実行する。
具体的には、内訳計算部６８は、ＳＴＲＡＣ表作成に必要な今期の収益や変動費、固定費等の会計データをＤＢ３０から読み出し、ＳＴＲＡＣ表のデータを作成して数値群とし、表示制御部６９に出力する。
【００５０】
表示制御部６９は、上記予算実績計算部６１、過去キャッシュ計算部６２、今期キャッシュ計算部６３、事業計画生成部６４、日毎データ集計部６５、税額計算部６６、推移計算部６７、内訳計算部６８により生成される数値群をアニメーション表示する。
具体的には、表示制御部６９は、予算実績計算部６１により得られた数値群を、例えば月毎等の期間の順（表示開始月が６月であれば、６月、７月、８月…等のように）にグラフ又は表の形態でアニメーション表示する。
ここで、アニメーション表示とは、複数の数値や画像の位置、絵柄等を少しずつずらしながら一定のテンポで連続的に表示する動作をいう。
【００５１】
表示制御部６９は、過去の勘定項目毎のキャッシュ増減額又は今期の目標キャッシュ獲得額のうち指定された数値群(例えばキャッシュ増減額)を、例えば売上高、変動費、固定費等の勘定項目の順にアニメーション表示する。
【００５２】
表示制御部６９は、過去キャッシュ計算部６２又は今期キャッシュ計算部６３により生成される数値群を、例えばキャッシュの項目順（儲けの累積、固定資金、売上仕入資金、流動資金…等のように）にグラフ又は表の形態でアニメーション表示する。
表示制御部６９は、事業計画生成部６４により生成される事業計画の詳細データを、勘定項目の順（売上高合計、店舗売上高、外販売上高…等のように）と期間の順（月毎等）の少なくとも一方の順にアニメーション表示する。
【００５３】
表示制御部６９は、日毎データ集計部６５により単位期間毎（例えば日毎等）に集計された数値群を単位期間の順（例えば表示開始日が６月１日であれば、６月１日、６月２日、６月３日…等の順）に所定期間分（例えば３６５日や表示終了日迄）アニメーション表示する。
【００５４】
表示制御部６９は、税額計算部６６により生成される数値群を、例えば税額算出根拠の流れに従った項目順（現状収益、繰越欠損、課税所得…等のように）にアニメーション表示する。
【００５５】
表示制御部６９は、推移計算部６７により生成される数値群を、例えば年計グラフの月の順に配置してアニメーション表示したり、費用推移グラフの月の順に配置してアニメーション表示したり、月次推移表（販管費）の月毎の各項目の順にアニメーション表示する。
【００５６】
表示制御部６９は、内訳計算部６８により生成される数値群を、例えばキャッシュの項目順（売上高、変動費、固定費…等のように）にグラフ又は表の形態でアニメーション表示する。
【００５７】
表示制御部５２、６９は、キー指標や数値群をアニメーション表示する画面において、選択された表示のフロー（ストーリ＝因果関係）に従い、「ＧＯ」ボタンや「ＮＥＸＴ（＞）」ボタンのクリック動作によって、一つずつ表示を進展させる。
これにより、数値やグラフ等に見る者の注意を引き付けることが可能になる。また、一回ずつ「ＧＯ」ボタンや「ＮＥＸＴ（＞）」ボタンをクリックする代わりに、「ＳＴＡＲ

Ｔ」ボタンや「早送り（＞＞）」ボタン等により自動で表示を進展させる機能（自動展開機能）があり、自動表示させる際に、あえて各表示にタイムラグ（可変）を設け、順次一つずつ表示させることでストーリ性を強調している。

【００５８】

表示制御部５２、６９は、数値やグラフ等の進展に従い、表示画面の大きさに応じて、区切れよく右スクロール（あるいは下スクロール等）させることによって、注意が右へ右へと（あるいは下へ下へ等）時間の経過を伴いながら移動することになり、ストーリ性を強調している。

表示制御部５２、６９は、必要な箇所で、適時マウス操作やクリック操作をすることによって（又は数値に対する条件に応じて自動で）、内訳明細の別ウインドゥ（あるいは別シート等に移動）をポップアップ表示したり、解説やコメントの吹き出し説明のメッセージが記載された枠等を表示する。つまり表示制御部５２、６９は、数値の内訳内容を確認したいという通常の意識の流れに沿った表示機能を備えている。

【００５９】

表示制御部５２、６９は、アニメーション表示の画面の所定の箇所を適時クリック操作することによって（又は数値に対する条件に応じて自動で）、あるいは数値やグラフ等の進展に従い、様々に表示を変化させたり、新たな表示を出現させたり、手書き文字を上書き表示したり、付箋をつけたり、別システムの別ウインドゥに移動できたりする。異常値が表示された項目につきアラームを発生（表示、あるいは音声）させる機能がある。異常値の範囲については、十分なデータが揃えば、ＡＩによる判断も可能である。

文字や数値のロゴ・色等の表示形式を変更、拡大、回転させたり、アバターやバーチャルリアリティによる仮想空間での解説等を出現させたり、解説動画や音声を表示させたりする。これらは、すべて数値と結果の間のストーリ性を強調するものであり、より一層流れの理解を深めることに有効である。

【００６０】

表示制御部５２、６９は、必要な箇所で、適宜クリックすることによって（又は数値に対する条件に応じて自動で）、シミュレーションを行う別ウインドゥをポップアップ表示させる。

事業年度の期中でも常時、シミュレーションと計画の更新が可能である。

なお、数値に対する条件に応じて自動で表示を変化させることに関しては、十分なデータの蓄積ができれば、ＡＩを活用した条件判断も可能である。

【００６１】

印刷制御部４４は、各画面のプリントボタン［Ｐｒｉｎｔ］が操作されることで、プリント用のダイアログボックスである印刷メニュー画面１９０（図１９参照）を表示する。

印刷メニュー画面１９０のボタンやパラメータの指示操作に応じて元の画面の情報を印刷することができる。

【００６２】

通知制御部４５は、毎月の月次資料をユーザ端末２に提供する場合に、月次資料の完成を予め設定された所定のタイミングで通知する。この機能を自動お知らせ機能と称す。

通知制御部４５は、自動送信機能を備えており、（１）所定日時、（２）所定時間経過後、（３）先方からの送信要求時、（４）データ更新時のうちの何れかのタイミングを設定することで、そのタイミングでお知らせを送信する。

【００６３】

連絡部４６は、会計事務所コメント画面１００（図５参照）を表示する。会計事務所コメント画面１００は、利用者登録した企業ユーザと主会計事務所や他の提携事務所との連絡窓口として機能する画面である。

連絡部４６は、インターネット（または電話回線）を通した双方向のライブ映像、音声通信やチャットによるメッセージ通信の機能をサポートし、ユーザとの間で映像、音声、文字メッセージ等により連絡を取り合うことができる。

具体的には、経営コンサルティング、会計、税務、労務、法務や保険等に関するユーザ

企業からの問合せに対応することができる。また、ホームページやＳＮＳを介した、外部の不特定多数者からの問合せに対応することもできる。

【００６４】

まず、図４のフローチャートを参照して実施形態の経営戦略展開支援システムの概要動作を説明する。図４は、経営戦略展開支援システムにおけるサーバの動作を示すフローチャートである。

【００６５】

実施形態の経営戦略展開支援システムの場合、ステップＳ１１において、データ取得部４１は、ユーザ端末２より例えば小売業等の企業の売上高のデータを含む会計データ、その企業の勤怠データ等を含む複数の数値群を取得しＤＢ３０に記憶する。

ステップＳ１２において、数値群提示部４３は、ＤＢ３０の複数の数値群の夫々の因果関係に基づく順番で数値群を提示する。具体的には、数値群提示部４３は、所定の演算を伴うストーリ（計算手順や算出根拠等）があり、そのストーリ（計算手順や算出根拠）に従って演算された数値群を表示させてゆく。

【００６６】

このように複数の数値群の夫々の因果関係に基づく順番で数値群を提示することにより、企業ユーザは、算出根拠をより一層明確に理解しながら数値群を確認することが可能になるので、例えば企業の事業計画に適用した場合、予算と実績の差異が明確になり、事業計画の期中であっても今後の事業計画の変更を検討できるので、適切な時期に事業計画の修正等が行えるようになる。

また、例えば企業の資金繰りデータに適用した場合、会社の現状のキャッシュフローの状況が理解し易くなり、有効な資金繰り戦略を具体的な数字に基づいて策定することができる。

【００６７】

以下、図５、図２１、図３５を参照して実施形態の経営戦略展開支援システムの概要動作を説明する。

図２１は経営戦略展開支援システムの機能画面を示す図である。図２１の機能画面には、例えばＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ等の４つの機能夫々のメニュー、すなわち、（Ａ：現状確認「銀行格付け」は？銀行格付けランキング表示機能）のメニュー、（Ｂ：大局的な「事業戦略」策定ツールであるキャッシュＢＥＦＯＲＥ＆ＡＦＴＥＲ機能）のメニュー、（Ｃ：細かい「事業計画書」策定シミュレーション機能）のメニュー、（Ｄ：毎月の月次決算書予算実績差異分析機能）のメニュー等が設けられており、夫々のメニューのＳＴＡＲＴボタンをクリック操作することで夫々の機能を動作させることができる。

【００６８】

（Ａ：現状確認「銀行格付け」は？銀行格付けランキング）からは、会社に対する金融機関の評価を確認する銀行格付けランキング機能ページ図２２に遷移できる。

（Ｂ：大局的な「事業戦略」策定ツール キャッシュＢＥＦＯＲＥ＆ＡＦＴＥＲ）からは、キャッシュＢＥＦＯＲＥ機能の画面の図２３、及びキャッシュＡＦＴＥＲ機能の画面の図２６に遷移できる。

（Ｃ：細かい「事業計画書」策定シミュレーション）からは、事業計画書策定シミュレーション機能の第２画面（詳細機能の選択画面）図２９に遷移できる。

（Ｄ：毎月の月次決算書予算実績差異分析）からは、月次決算書予算実績差異分析機能に関する共通機能選択画面（メインメニュー画面）図３５、さらにはそこから会計事務所コメント画面の図５、概要税金シミュレーション機能画面の図６、その他の機能画面に遷移できる。

また、キー指標表示機能のオプション機能選択画面（サブメニュー画面）図３６、さらにはそこから売上高営業利益率グラフの図３７、商品別営業所別色分布分析表の図３８、その他のグラフに遷移できる。

【００６９】

図５は、会計事務所コメント画面を示す図である。図３５は、月次決算書予算実績差異

分析機能に関する共通機能選択画面（メインメニュー画面）を示す図である。図３６は、図３５の共通機能選択画面から遷移して表示されるオプション機能選択画面（サブメニュー画面）を示す図である。

【００７０】

実施形態の経営戦略展開支援システムでは、企業ユーザや提携会計事務所の公認会計士等は、サービス提供者である主会計事務所が運営するサーバ１に利用者として登録される。

そして、例えば企業ユーザは、ユーザ端末２－ｎのブラウザ画面において所定のアドレスを入力すると、サーバ１がユーザに向けて公開するログインページ（図示せず）が表示される。このログインページにユーザＩＤとパスワードを入力しログインすることで、図３５に示す共通機能選択画面３５０がユーザ端末２－ｎに表示される。

図３５の共通機能選択画面３５０には、会計事務所コメント、概要税金シミュレーション、キー指標、全社、語録、予算実績差異分析、人件費推移表、変動費・固定費推移表、月次推移表（販管費）、月次推移表（製造原価）、費用推移、ＳＴＲＡＣ表、キャッシュ残高推移表、キャッシュフロー計算書、キャッシュ貸借対照表等のアイコンからなる機能一覧が設けられており、いずれかのアイコンをクリック操作することで、夫々のアイコンにリンクされた機能を動作させることができる。

【００７１】

図３５の共通機能選択画面３５０の例えば会計事務所コメントのアイコンをクリック操作すると、連絡部４６が起動して、図５に示す会計事務所コメント画面１００を表示する。

会計事務所コメント画面１００には、「＜お問合せ＞“ピッ、パ”コールセンター」の各専門分野・各専門家ボタン群１０１、「ライブカメラ」ボタン、「こんにちは」ボタン、「画像消去」ボタン等を含むライブ映像通信部１０２、ライブ映像表示欄１０３、「チャット」ボタン、「こんにちは」ボタン、「チャット消去」ボタン等を含むチャット通信欄１０４、進捗状況一覧１０５、連絡及び確認事項表１０６、コメント欄１０７等が設けられている。

【００７２】

ここで、ユーザが「＜お問合せ＞“ピッ、パ”コールセンター」の各専門分野・各専門家ボタン群の中の一つのボタンを選択し（画面では「会計マネージャー〇〇〇〇」を選択している）、例えばライブ映像通信部１０２の「こんにちは」ボタンをクリック操作することによって、会計事務所スタッフ、あるいは外部提携している各専門家とのライブ映像通信が可能になり、双方向のライブ映像・音声通信により専門家とユーザとで会話により連絡をとることができる。

あるいは設定により任意の場所、工場や支社、本社経理部、経営企画室等とのライブ映像通信も可能である。

また、金融機関、決済期間、証券会社や、証明書申請等に係るような行政機関、補助金申請等に係る政府機関等との連携により、問合せや申請等のライブ映像通信を行ってもよい。

【００７３】

ライブ映像は、他のページに移行した際にも、縮小した上で、常時、最前面表示され、先方に専門家の顔を見せながら、画面の説明を行うことができる。

会話をやめる場合は、ライブ映像通信部１０２の「画像消去」ボタンをクリック操作することで、ライブ映像と音声通信を中止することができる。

【００７４】

なお、ライブカメラによるインターネット回線（または電話回線）を通した双方向のライブ映像・音声通信機能を別画面に設置し、表示内容を一般公開してよい内容に限定することによって、外部からの不特定多数者の問合せに対応することもできる。

【００７５】

外部からの不特定多数者の問合せについては、スマートフォン等から主会計事務所のホームページやＳＮＳのページにアクセスし、アクセスしたページの会計事務所コメント画面１００へのアドレスリンクをクリック操作することで、この図５の会計事務所コメント

画面１００の表示内容を限定した画面が先方に表示されるようになる。
【００７６】
連絡の開始操作としては、ライブ映像通信部１０２の「こんにちは」ボタンをクリック操作する。
このクリック操作をトリガにして、接続要求が主会計事務所のユーザ端末２－ａに送信されるので、ユーザ端末２－ａでは、「ピンポン音」等の呼び出し音が発生し、「問合せです」等のコメントがユーザ端末２－ａの画面に表示されるので、主会計事務所のスタッフが通信開始のボタンを操作することで、ユーザとの通信や外部不特定多数者からの問合せへの対応通信が開始される。
また、このクリック操作をトリガにして、接続要求を外部の提携会計事務所の公認会計士等の端末に送信させることもできる。端末では、「ピンポン音」等の呼び出し音が発生し、「問合せです」等のコメントが端末の画面に表示されるので、外部の提携会計事務所の公認会計士等が通信開始のボタンを操作することで、ユーザとの通信や外部不特定多数者からの問合せへの対応通信が開始される。
【００７７】
ライブカメラの代わりに、「チャット」の「こんにちは」ボタンを押すことによって「チャット」画面が立ち上がり、「チャット」による問い合わせ対応を行うことができる。進捗状況一覧１０５には、月次資料の作業進捗が表示される。連絡及び確認事項表１０６には、質問および修正内容や確認事項、修正仕訳等が表示される。
【００７８】
コメント欄１０７には、会計や税務、経営等に係る情報が表示される。このコメント欄１０７の情報は、このページを閲覧したユーザに提供される。コメント欄１０７のコメントは、予め準備して保存している各種コメントを随時提示することもできる。その他、ニュース提供機能、会計事務所や金融機関等からのお知らせ機能、オンラインビデオセミナーの開催、各種データのアップロードやダウンロード機能、ホワイトボード機能、イーコマース機能を備える。
【００７９】
チャット通信欄１０４、連絡及び確認事項表１０６、コメント欄１０７の内容は、通信履歴として別途サーバ１のＤＢ３０に保存される。保存した通信履歴は、過去の履歴の読み出し操作を行うことで、月次報告進捗一覧表画面（図２０参照）に読み出して過去の履歴を閲覧することができる。
【００８０】
（概要税金シミュレーション機能）
図６を参照して概要税金シミュレーション機能を説明する。
図６は、税額シミュレーション画面を示す図である。
企業ユーザが共通機能選択画面３５０の例えば概要税金シミュレーション画面のアイコンをクリック操作すると、税額計算部６６が起動し、図６に示す概要税金シミュレーション画面１０８をユーザ端末２－ｎに表示する。
【００８１】
サーバ１のＤＢ３０には、予め企業の法人税等、及び消費税等について、前期・今期の会計データ、及び随時（年次や月次、週次、日次）税務申告ソフト等からエクスポートした今期と前期、前々期に係る税務データ等が記憶されている。
【００８２】
税額計算部６６は、税額シミュレーションに必要なデータをＤＢ３０から読み出し、年間の予測税額等を計算し、表示制御部６９へ出力する。
表示制御部６９は、税額算出根拠の流れに従った表示順序がプログラムされており、税額計算部６６から入力された年間の予測税額等を、税額算出根拠の流れに従って概要税金シミュレーション画面１０８の項目に数値を順次挿入しつつアニメーション表示する。この概要税金シミュレーション画面１０８では、前期の年間税額等を認識した上で、当期の年間予想税額等を確認することができる。

【００８３】
以下、税額のアニメーション表示について説明する。
アニメーション表示の際、法人税等の昨年度について、昨年度収益の数値からスタートし、税額計算上控除できる繰越欠損の数値を控除して課税所得を算出する。
【００８４】
次に、課税所得に設定税率を掛けて算出した年間予想法人税等を算出し、中間での既納付額、期末予想納付額、年間予想法人税等の順番で順次表示する。
【００８５】
この概要税金シミュレーション機能により、順次、一つずつ項目と数値を表示することによって、会社が生み出した現状収益額について、何をいくら控除できて課税所得がいくらになり、中間時点でいくら納付済なので、期末にいくら納税が必要になる、という税務上の法人税等算出根拠を理解し易くなる。
【００８６】
「消費税等」の昨年度について、会計データ、税務データから読み出した中間での既納付額の数値を表示し、仮払消費税等と仮受消費税等から算出した期末予想納付額（簡易課税の場合には、課税売上高や仕入控除税額等から算出）と年間予想消費税等の数値を順次表示する。
【００８７】
この概要税金シミュレーション機能により、順次、一つずつ項目と数値を表示することによって、会社の現状について、消費税等を中間時点でいくら納付済なので、期末にいくら納税が必要になる、という税務上の消費税等算出根拠を理解し易くなる。
【００８８】
昨年度の税額を確認した上で、それらと比較する意図の流れで、本年度の税額を表示する。
法人税等の本年度、消費税等の本年度についても同様に、税額算出根拠の流れに従って項目と数値を順次アニメーション表示する。
【００８９】
先に昨年度数値を表示した後、今年度数値を表示しているため、各表示項目について、昨年度数値と比較することによって、より一層本年度数値の大小の妥当性が納得し易くなる。
【００９０】
なお、税額算出根拠の流れをより詳細に表示することも可能である。税務申告書の作成手順に従い、各種別表の数値を加減算等して税額を算出し、各別表項目毎に順次アニメーション表示することにより、算出根拠をより一層明確に理解しながら税額を確認することが可能になる。法人税、消費税、所得税、相続税、贈与税、住民税等についても、同様である。過年度の決算書、税務申告書等を飛び出して表示することも可能である。
【００９１】
（全社年計グラフアニメーション表示機能）
図７を参照して全社年計グラフアニメーション表示機能を説明する。
図７は、年計グラフのアニメーション表示画面を示す図である。
企業ユーザが共通機能選択画面３５０の例えば全社年計グラフのアイコンをクリック操作すると、推移計算部６７により、図７に示す全社年計グラフ画面１０９がユーザ端末２－ｎに表示される。
【００９２】
推移計算部６７は、ＤＢ３０の前々期・前期・今期の会計データから、年計額の計算に必要なデータを読み出して年計額を算出し表示制御部６９に出力する。
表示制御部６９は、入力された年計額を、年計グラフの月の順に配置して、折れ線グラフが横軸方向に伸びるようにアニメーション表示する。
【００９３】
なお、以下では、シミュレーションという用語を使うが、シミュレーションとは、デー

タを修正した上でアニメーション表示を行うことを言う。
　アニメーション表示の元となるシミュレーションデータについては、図２９の事業計画書シミュレーション画面２９０内の利益額シミュレーション機能のスタートボタン２９８をクリック操作して、図３２の利益額シミュレーション画面３２０で利益額シミュレーションを行った際に計算したデータを「登録」ボタン３２６をクリック操作して保存しておいた計画数値から必要なデータを読み出してシミュレーションの値を算出し、順次アニメーション表示するものとする。
【００９４】
　なお、この全社年計グラフ画面１０９では、折れ線グラフのアニメーション表示が進み、画面右端に到達するタイミングで通常はページが切り替るが、ここでは、折れ線グラフ全体が画面内にちょうど収まるように縮小（調整）されて全画面表示になる。
　全社年計グラフ画面に切り替わると同時に、全画面表示になり、アニメーション表示が始まる。最初にシミュレーションの年計売上高のグラフが順次１か月ずつ時系列に従って進展していって最終月まで表示する。
【００９５】
　各月の年計の数値については、推移計算部６７が、前月の年計の数値に、今期該当月の売上高の数値を加算し、前期該当月の売上高の数値を減算して算出する。年計の数値とは、直近過去１２カ月間の合計額を言う。
　即ち、前月の数値を基に１か月ごと加減算を行って当月の数値を算出する過程を、アニメーション機能によりグラフが順次進展することにより、一層明確に理解することができる。
【００９６】
　続いて、シミュレーションのグラフと比較参照しながら傾向を認識する意図で、実績の年計売上高のグラフが順次１か月ずつ時系列に従って進展していって経過月まで表示される。
　会社経営が順調で売上高が伸びている局面では、年計グラフは、右上がりに進展し、逆に不調で売上高が減りつつある局面では、年計グラフは、右下がりに進展する。
【００９７】
　この全社年計グラフアニメーション表示機能によれば、年計の数値を１か月毎に表示させることによって、毎月右上がりに進展するのか、右下がりに進展するのかを視覚的に簡単に確認でき、傾向を印象的に認識することができる。
　さらには、先に表示されているシミュレーショングラフとのグラフの重なり具合を、毎月毎月ひと月ずつ目で追うことができるので、時間の経過に従って、順次、計画と実績の乖離を理解することができる。
【００９８】
　次に、シミュレーションの年計経常利益のグラフと実績の年計経常利益を順次表示する。さらに、売上高の「前年同月と比較して」の欄の数値と、経常利益の「前年同月と比較して」の欄の数値を表示する。
【００９９】
　シミュレーショングラフと実績グラフを比較することは、ＰＤＣＡサイクルの中の「Ｃｈｅｃｋ(評価)」機能の役割を果たすことになる。
【０１００】
　なお、図７の全社年計グラフ画面１０９の右上の「事業計画書シミュレーションへ」のボタン１１０をクリック操作することにより、図２９に示す事業計画書シミュレーション画面２９０へ遷移するので、この画面２９０からシミュレーションを実行し、データの見直しを行い、更新したシミュレーショングラフを図７の全社年計グラフ画面１０９で確認することができる。
【０１０１】
　この全社年計グラフ画面１０９では、常時シミュレーションを見直し、結果をグラフで確認できることから、スピーディーで有効な「Ａｃｔｉｏｎ(改善行動)」を導き出すこと

が可能になる。
【０１０２】
（費用推移グラフアニメーション表示機能）
図８を参照して費用推移グラフアニメーション表示機能を説明する。
図８は、給与手当の推移グラフを示す図である。
企業ユーザが共通機能選択画面３５０の例えば費用推移グラフのアイコンをクリック操作すると、推移計算部６７により、図８に示す費用推移グラフの画面１１２がユーザ端末２－ｎに表示される。
【０１０３】
推移計算部６７は、ＤＢ３０の前期、今期の会計データから、費用推移の計算に必要なデータを読み出して、前期数値、今期数値、差異額を算出し表示制御部６９に出力する。
表示制御部６９は、入力された前期数値、今期数値、差異額を、費用推移グラフの月の順に配置して、折れ線グラフが横軸方向に伸びるようにアニメーション表示する。
【０１０４】
アニメーション表示の元となるシミュレーションデータについては、図２９の事業計画書シミュレーション画面２９０内の利益額シミュレーション機能のスタートボタン２９８をクリック操作して、図３２の利益額シミュレーション画面３２０で利益額シミュレーションを行った際に計算したデータを登録ボタン３２６をクリック操作して保存しておいた、計画数値から必要なデータを読み出してシミュレーションの値を算出し、順次アニメーション表示するものとする。
【０１０５】
以下、処理の流れを説明する。
この場合、図８の画面１１２に表示されているプルダウンリスト１１３から、表示対象の販管費勘定科目を選択する。なお画面では給与手当が選択されている。プルダウンリスト１１３には、各クライアント個別の設定シートで選択し記録されている販管費勘定科目を読み出して表示している。
画面１１２に表示されている単位変更ボタン１１４は、単位を指定するためのボタンであり、選択した単位で数値、グラフが表示される。なお画面では千円単位が選択されている。
単位については、為替レートデータ（所与データ、またはインターネットから取得したアットタイムデータ）に基づき、ドル建て表示やユーロ建て表示等にも変換することができる。あわせて、勘定科目、その他表示を英文表記に変換することができ、数値と勘定科目、その他表示をすべて英文表記に変換することによって、英文財務諸表や英文会計資料を作成することができる。逆に英文財務諸表等を日本文財務諸表等へ変換表示することもできる。
図８の画面１１２に表示されているＳＴＡＲＴボタン１１５がクリック操作されると、アニメーション表示を開始し、まず、予算の数値が順次１か月ずつ時系列に従って表示されて行く。続いて、前期の数値が順次１か月ずつ時系列に従って表示されて行く。
【０１０６】
次に、実績の数値が順次１か月ずつ時系列に従って経過月まで表示されて行き、予算差異と前年差異が順次表示される。
予算と前期の数値を確認した上で、それらと比較する意図の流れで、本年度実績の数値を表示している。
【０１０７】
画面１１２では、有利差異は青色の背景色、不利差異は赤色の背景色で表示される。
不利差異が発生する際には、予め設定してあるコメント（「売上高人件費率を確認してください」や「人件費の変動費化の余地はありますか？」等）を画面１１２に表示することができる。
【０１０８】
この費用推移グラフアニメーション表示機能によれば、予算、前期、実績の順番で、又

は前期、予算、実績等の順番で１か月毎の数値を表示させ、差異を表示させることによって、有利差異（青色背景色）が多い中で突然不利差異（赤色背景色）の月が発生したり、期中で不利差異が有利差異に反転したりといった傾向を視覚的に印象的に認識することができる。

【０１０９】

グラフについて、最初に予算のグラフが順次１か月ずつ時系列に従って進展していって最終月まで表示する。

【０１１０】

続いて、前期のグラフが順次１か月ずつ時系列に従って進展していって最終月まで表示する。予算、前期のグラフと比較参照しながら傾向を認識する意図で、実績のグラフが順次１か月ずつ時系列に従って進展していって経過月まで表示する。

【０１１１】

図８の費用推移グラフの画面１１２では、アニメーション表示機能により、グラフの進展の形を目で追うことによって、順次前月までのグラフと比較しながら当月のグラフを確認でき、会社で発生するコスト（給与手当）が時間の経過とともにどういう傾向で増減してきたかを明確に認識することが可能になる。

また、売上高等の推移グラフを並行して表示すれば、コスト増減の原因分析がやりやすくなる。

【０１１２】

さらに、画面１１２に先に表示されている予算、前期のグラフとのグラフの重なり具合を、毎月毎月、ひと月ずつ目で追うことができ、時間の経過に従って、順次、計画と実績の乖離と、前期と今期の差異の発生傾向を理解することができる。

【０１１３】

予算のグラフを下回って推移していた実績のグラフが、ある月から突然予算のグラフを上回りはじめて進展している、といった傾向を、ひと月ずつ目で追うことができ、時間経過に伴った推移傾向の情報を時間経過と共に得ることができる。

【０１１４】

このように費用推移グラフアニメーション表示機能によれば、表示の順番が整理されてグラフが意図的に順次表示されるので、固定的に表示されるグラフからでは得づらい変化や推移等の情報を目で追って得ることができる。

即ち、前月の数値と順次比較しながら当月の数値を確認することができる。またグラフの進展の形を目で追うことによって、より一層印象的に傾向を把握することが可能になる。

【０１１５】

なお、予算と実績の差異を明確に認識することは、ＰＤＣＡサイクルの中の「Ｃｈｅｃｋ(評価)」機能の役割を果たしている。

図８の画面１１２の右上の「事業計画書シミュレーションへ」のボタン１１１をクリック操作することにより、図２９に示す事業計画書シミュレーションの画面２９０へ遷移するので、この画面２９０からシミュレーションを実行し、データの見直しを行い、更新したシミュレーショングラフを図８の給与手当の推移グラフ画面１１２確認することができる。

このように常時シミュレーションの見直しが可能であることから、スピーディーで有効な「Ａｃｔｉｏｎ（改善行動）」を導き出すことが可能になる。

【０１１６】

（月次推移表（販管費）アニメーション表示機能）

図９、図１０を参照して月次推移表（販管費）のアニメーション表示機能を説明する。図９は、画面名に月次損益計算書と記載された月次推移表（販管費）の画面を示す図である。図１０は、月次推移表（販管費）の画面の、クリックした項目「貸借料」の行が着色された様子を示す図である。

企業ユーザが共通機能選択画面３５０の例えば月次推移表（販管費）のアイコンをクリック操作すると、推移計算部６７により、図９に示す月次推移表（販管費）の画面１１６

がユーザ端末２－ｎに表示される。
【０１１７】
推移計算部６７は、ＤＢ３０の前期・今期の会計データから、月次の販管費の計算に必要な勘定科目ごとの月次推移データを読み出して月次の販管費を算出し表示制御部６９に出力する。
表示制御部６９は、入力された月次の販管費を、月次推移表（販管費）の月毎の各項目の欄に表示し、表示対象月（画面では９月度）については数値が縦方向に順次勘定科目順に挿入されるようにアニメーション表示する。
【０１１８】
この際、推移計算部６７は、各ユーザ個別の設定シートで選択記憶されている表示対象勘定科目２３項目データを読み出して表示する。
アニメーション表示は、図９の月次推移表（販管費）の画面１１６が表示されると同時に始まり、表示対象月（画面では９月度）の売上高合計、当期商品仕入高、商品売上原価、製品売上原価、売上原価の順に順次数値が表示される。売上総損益金額の欄は、売上高合計から売上原価を差し引いた数値が表示される。
【０１１９】
以降、順次、販管費の表示対象勘定科目２３項目と、その他、販売管理費計、営業損益金額、営業外収益合計、営業外費用合計、経常損益金額、特別利益合計、特別損失合計、当期純損益金額等の数値が表示される。
【０１２０】
項目の数値を順次アニメーション表示することによって、収益から費用を控除して営業利益を算出し、さらには営業外項目、特別項目を加減算して算出するという損益構造の流れに沿った数値の理解が容易になる。
【０１２１】
この月次推移表（販管費）の画面１１６では、図表を閲覧する上で、注目したい勘定科目の表示行の色を変える（色を付ける）ことによって、数値の推移を確認し易くなる。
この場合、図１０に示すように、月次推移表（販管費）の画面１１６の注目したい勘定科目の行（画面では「賃借料」の行１１７）の任意の箇所をクリック操作すると、該当勘定科目の表示行が着色されて強調表示される。
なお、この例では、注目したい勘定科目の表示行について色を変えたが、設定情報を変更することで、クリック操作した「列」やその他任意の範囲の欄の色を変えることができる。
【０１２２】
（ＳＴＲＡＣ表アニメーション表示機能）
図１１、図１２を参照してＳＴＲＡＣ表アニメーション表示機能を説明する。
図１１は、ＳＴＲＡＣ表をアニメーション表示させるスタート直後の画面を示す図である。図１２は、累計ボタンで、アニメーション表示させたＳＴＲＡＣ表の最終画面を示す図である。
【０１２３】
企業ユーザが共通機能選択画面３５０の例えばＳＴＲＡＣ表のアイコンをクリック操作すると、内訳計算部６８により、図１１に示すＳＴＲＡＣ表画面１２０がユーザ端末２－ｎに表示される。
図１１のＳＴＲＡＣ表画面１２０には、「売上高は」の欄１２３、「御社の変動費は」の欄１２４、「売上高から変動費を差引いたのが粗利益です」の欄１２５、「粗利益率」の欄１２６、「御社の固定費は」の欄１２７、「営業利益（＋支払利息）本業による利益です」の欄１２８等が設けられている。また、夫々の欄の下には棒グラフの表示エリアが設けられている。
【０１２４】
内訳計算部６８は、ＤＢ３０の今期の会計データから、ＳＴＲＡＣ表作成に必要なデータを読み出してＳＴＲＡＣ表のデータを作成し表示制御部６９に出力する。

表示制御部６９は、入力されたＳＴＲＡＣ表のデータを、ＳＴＲＡＣ表画面１２０に順次配置してアニメーション表示する。

【０１２５】

ここでは、各ユーザ個別の「設定シート」に記憶されている変動費・固定費区分、人件費項目のデータを読み出してＳＴＲＡＣ表のデータを算出し、順次アニメーション表示する。

【０１２６】

図１１に示すＳＴＲＡＣ表画面１２０の状態は、単月ボタン１２１、又は累計ボタン１２２で、アニメーション表示を開始し、会計データからデータを読み出して「売上高は」の欄１２３に数値を表示し、欄１２３の下のグラフのエリアに棒グラフ１２３ａを表示した状態である。

【０１２７】

図１１のＳＴＲＡＣ表画面１２０の状態からさらにアニメーション表示が進展した最終状態が、図１２に示すＳＴＲＡＣ表画面１２０の状態である。

この図１２に示すＳＴＲＡＣ表画面１２０では、「売上高は」の欄１２３に数値を表示し、その欄１２３の下のグラフのエリアに棒グラフ１２３ａを表示した後、「御社の変動費は」の欄１２４に数値と棒グラフ１２４ａ、吹き出し１２４ｂを順次表示する。

【０１２８】

粗利益は、売上高の数値から変動費の数値を差し引いたものなので、「売上高から変動費を差引いたのが粗利益です」の欄１２５にその数値を表示すると共にその欄１２５の下のグラフのエリアに棒グラフ１２５ａを表示する。これと同時に粗利益率が算出されて粗利益率の欄１２６に数値が表示される。

【０１２９】

続いて、内訳計算部６８は、ＤＢ３０の会計データから固定費のデータを読み出して表示制御部６９に渡す。表示制御部６９は、「御社の固定費は」の欄１２７に固定費の数値を表示してその下のエリアに棒グラフ１２７ａ、吹き出し１２７ｂを表示する。

【０１３０】

営業利益（＋支払利息）は、粗利益の数値から固定費の数値を差し引き、さらに支払利息額を控除した数値なので、内訳計算部６８は、この計算を実行し、「営業利益（＋支払利息）本業による利益です」の欄１２８に数値を表示すると共に、欄１２８を囲むように円マーク１２９を表示する。また欄１２８の下のエリアに棒グラフ１２８ａを表示する。

【０１３１】

このように各項目の数値、グラフを順次アニメーション表示することによって、収益から変動費を控除して粗利益を算出し、さらに固定費を控除して営業利益を算出するという損益構造の流れに沿った数値の理解が容易になる。

【０１３２】

さらに、「損益分岐点分析」につき、固定費の数値を粗利益率の数値で割り算して算出して損益分岐点売上高の数値を表示し、「売上高が７．０百万円増加すると、黒字になります」を表示する。

売上高の数値と損益分岐点売上高の数値の差額を算出して安全余裕率の欄に数値を表示すると共に、「売上高が１．９％増加すると、黒字になります」を表示する。

【０１３３】

次に、「変動費の分析」につき、今月の変動費率、累計の変動費率を順次表示する。また、固定費の分析につき、会計データから固定費のデータを読み出して算出し、固定費項目の性格別に「人（人件費）」、「物（経費）」、「金（金利）」、「戦略・広告・教育研究開発費」等に区分して、今月と累計の数値を順次表示する。

【０１３４】

最後に「人（人件費）」の累計の数値を粗利益の数値で割り算して労働分配率を算出し、労働分配率の累計の欄にその数値を表示する。

【０１３５】

（キャッシュフロー計算書アニメーション表示機能）
図１３乃至図１６を参照してキャッシュフロー計算書アニメーション表示機能を説明する。図１３は、キャッシュフロー計算書のスタート直後の画面を示す図である。図１４はＧＯボタン１３１による自動展開機能で、アニメーションを開始したキャッシュフロー計算書の画面を示す図である。図１５は、ＧＯボタン１３１による自動展開機能で、又は「ＮＥＸＴ（＞）」ボタンの操作で横スクロールしたキャッシュフロー計算書の画面を示す図である。図１６は、ＧＯボタン１３１による自動展開機能で、又は「ＮＥＸＴ（＞）」ボタンのさらなる操作で横スクロールしたキャッシュフロー計算書の最終画面を示す図である。

【０１３６】
この場合、例えば企業ユーザが図３５の共通機能選択画面３５０の例えばキャッシュフロー計算書のアイコンをクリック操作すると、今期キャッシュ計算部６３により、図１３に示すキャッシュフロー計算書の画面１３０がユーザ端末２－ｎに表示される。
キャッシュフロー計算書の画面１３０には、今月の利益の欄やキャッシュベースでの調整項目の欄、ＧＯボタン１３１等が設けられている。

【０１３７】
キャッシュフロー計算書の画面１３０のＧＯボタン１３１がクリック操作されると、１項目ずつ順次テンポよく、各項目の数値、コメント等がアニメーション表示される。
この場合、キャッシュフロー計算部は、最初にＤＢ３０の会計データから今月の「当期純利益」のデータを読み出して、その値を「１．営業活動によるキャッシュフロー　今月の利益」の欄に表示すると共に、強調の円マークと吹き出しを表示する。

【０１３８】
その後、キャッシュフロー計算部は、ＤＢ３０の会計データから随時データを読み出して算出し、キャッシュフロー計算書の画面１３０いっぱいまで数値やコメント等をアニメーション表示する。このようにしてアニメーション表示が進展した状態が図１４のキャッシュフロー計算書画面１３０である。

【０１３９】
「１．営業活動によるキャッシュフロー　今月の利益」の欄の数値、円マーク、吹き出しの表示に続き、「キャッシュベースでの調整項目　減価償却費計上分」項目の欄に「キャッシュが残った」のコメントと数値を順次表示する。

【０１４０】
さらに、「売上債権」の項目の欄に「が減少し、キャッシュが増えた」のコメントと数値、「仕入債務」の項目の欄に「が減少し、キャッシュが減った」のコメントと数値、在庫の項目の欄に「が減少し、キャッシュが増えた」のコメントと数値、「その他営業活動」の項目の欄に「でキャッシュが減った」のコメントと数値を順次表示する。

【０１４１】
それらの数値を加減算してキャッシュフローが増加した値を算出し、その数値を「営業活動によるキャッシュフローの増加」の項目の欄に表示する。
次画面まで表示が進展した際に、「３．営業活動・投資活動によるキャッシュフロー　フリーキャッシュフローの増加」の欄の数値が表示され、強調の円マーク、「実際に獲得して増えた「お金」」の吹き出しが表示された直後に、「矢印」と「通常、一致しない！」の吹き出しが表示される。

【０１４２】
その後、アニメーション表示が進展して、キャッシュフロー計算書の画面１３０いっぱいまで数値やコメント等の表示が進み、１ページ幅分自動的に「横スクロール」した状態が、図１５のキャッシュフロー計算書画面１３０である。

【０１４３】
図１５のキャッシュフロー計算書の画面１３０では、「営業活動によるキャッシュフローの増加」にその数値を表示した後、１ページ幅分自動的に「横スクロール」し、「投資活動によるキャッシュフロー　有形・無形固定資産」の項目の欄に「の売却により、キャ

ッシュが増えた」のコメントと数値、「その他投資活動」の項目の欄に「で、キャッシュが増えた」のコメントと数値が順次表示される。

【０１４４】

さらに、「投資活動によるキャッシュフローの増加」の欄に数値を表示し、「３．営業活動・投資活動によるキャッシュフロー　フリーキャッシュフローの増加」の欄に数値、強調の円マーク、吹き出しを表示する。

【０１４５】

その後、「矢印」と「通常、一致しない！」の「吹き出し」を表示することで、両方の数値に違いのあることが強調され、ユーザにこの点を注目させることができる。

【０１４６】

その後、さらにアニメーション表示が進展して、１ページ幅分自動的に「横スクロール」した最終状態が図１６のキャッシュフロー計算書画面１３０である。

【０１４７】

図１６のキャッシュフロー計算書画面１３０では、自動的に１ページ幅分「横スクロール」し、「４．財務活動によるキャッシュフロー　借入金の返済」の項目の欄に「により、キャッシュが減った」のコメントと数値、「吹き出し」、「財務活動によるキャッシュフローの増加」の欄に数値が順次表示される。

【０１４８】

その後、「５．現預金の今月増減額」を算出して数値、強調の円マーク、「吹き出し」等が順次表示される。さらに「６．現預金の「月初」残高」の欄に数値が表示される。

【０１４９】

キャッシュフロー計算部は、「５．現預金の今月増減額」の数値と「６．現預金の「月初」残高」の数値を加算して現預金月末残高を計算し、その値を「７．現預金の「月末」残高」の欄に表示する。

また、内訳として、「キャッシュ（現預金）」の欄に数値が「定期積立金その他（流動性のないもの）」の欄にも数値が表示される。

【０１５０】

このようにキャッシュフロー計算書アニメーション表示機能によれば、項目、数値、吹き出しやコメント等を順次一つずつ表示することによって、営業活動によるキャッシュフロー、投資活動によるキャッシュフロー、財務活動によるキャッシュフロー等の項目順に、キャッシュが順次増減して、最終的に現預金残高がいくら残っているのかが理解し易くなる。

【０１５１】

経営者として、今月計上した利益額相当のキャッシュが獲得できたと考えるのは自然であるが、実際会社に増えるキャッシュの額はそれとは相違する。その相違につき、算出のストーリに従って、営業活動によるキャッシュフロー、投資活動によるキャッシュフロー、財務活動によるキャッシュフローの項目順に表示しながら適時、吹き出し、円マーク、コメント等で説明を加えることによって、数値の演算根拠や意味合いを理解し易くなる。

【０１５２】

（キャッシュフロー貸借対照表アニメーション表示機能）

図１７、図１８を参照してキャッシュフロー貸借対照表アニメーション表示機能を説明する。図１７は、ＧＯボタン１４１による自動展開機能で画面いっぱいまで数値やコメント等のアニメーション表示が進展したキャッシュフロー貸借対照表の画面を示す図である。図１８は、ＧＯボタンによる自動展開機能で、又は「ＮＥＸＴ（＞）」ボタンの操作で、横スクロールしたキャッシュフロー貸借対照表の最終画面を示す図である。

【０１５３】

この場合、例えば企業ユーザが図３５の共通機能選択画面３５０の例えばキャッシュ貸借対照表のアイコンをクリック操作すると、今期キャッシュ計算部６３により、図１７に示すキャッシュフロー貸借対照表の画面１４０がユーザ端末２－ｎに表示される。

なお、前期キャッシュフロー貸借対照表を表示させる場合は、過去キャッシュ計算部６

２により、図１７に示すキャッシュフロー貸借対照表の画面１４０がユーザ端末２－ｎに表示される。
キャッシュフロー貸借対照表の画面１４０には、現時点、例えば９月末現在の現金預金の表と固定資金の表、ＧＯボタン１４１等が設けられている。
【０１５４】
キャッシュフロー貸借対照表の画面１４０のＧＯボタン１４１がクリック操作されると、キャッシュフロー計算部は、ＤＢ３０の会計データから随時データを読み出して算出し、その値を表示制御部６９に渡す。表示制御部６９は、キャッシュフロー貸借表の画面１４０の各表に、１項目ずつ順次テンポよく、各項目の数値、コメント等をアニメーション表示する。
【０１５５】
以下、数値の表示順序を説明する。
最初に、ＤＢ３０の会計データから今月の利益剰余金等のデータを読み出して利益剰余金等の数値を表示すると共に、繰越損益の数値と過去の儲けの累積の数値を表示する。
【０１５６】
次に、「矢印」を表示した後、儲けの累積の数値、資本金の数値、資本剰余金の数値を表示して、それらを加算して資本金等の数値を表示する。
【０１５７】
さらに、長期借入金の数値、社債の数値、その他固定負債の数値、それら数値を加算して長期借入金等の数値を順次表示する。
資本金等の数値と長期借入金等の数値を加算して合計の数値を表示する。
【０１５８】
棚卸資産の数値、有形固定資産の数値、無形固定資産の数値、投資等の数値を順次表示し、それら数値を加算して合計の数値を表示し、二つの合計の数値を差し引きして固定的に使っている資金の数値を表示する。
【０１５９】
次に、「会社の骨格となる体格を形づくるお金」、「返済しなくてよい会社の元手（儲けの累積、資本金等）」等のコメントと「矢印」を順次表示する。
図１７に示すキャッシュフロー貸借対照表の画面１４０は、画面いっぱいまで数値、コメント等のアニメーション表示が進展した状態を示している。
【０１６０】
その後、アニメーション表示が進展して、数値やコメント等が１ページ幅分、横にスクロールした状態が、図１８のキャッシュフロー貸借対照表の最終画面１４０である。
【０１６１】
図１８のキャッシュフロー貸借対照表の最終画面１４０では、横にスクロールした後もアニメーションが進展して、各項目の数値、コメント、「矢印」等を順次表示し、最後に、会社の現金預金合計の数値を表示する。
なお、「ＰＲＥ（＜）」ボタン１４２をクリック操作すると、１ページ幅分、左横方向へ画面が逆スクロールする。
【０１６２】
このようにキャッシュフロー貸借対照表の画面１４０によりキャッシュフロー貸借表をアニメーション表示することによって、「儲けの累積」、「固定資金」、「売上仕入資金」、「流動資金」等の項目順に、順次キャッシュが増減する様子が分かり、最終的に会社の現金預金合計がどれだけになるのかを理解し易くなる。
【０１６３】
このキャッシュフロー貸借対照表アニメーション表示機能によれば、アニメーション表示機能により、一つずつ数値、コメント等を表示することによって、今月末現在、会社の財務体質がどのような状態にあるかを資金の性格別に順次理解することができる。
画面１４０では、キャッシュフロー貸借対照表の中から過去の儲けの累積の数値を算出して表示した後、会社が完全に自由に使える資金である資本金等を算出して表示する。次

に、長期借入金等の数値も合算して、会社が長期的に安定して使える資金を貸方合計の欄に表示する。

【０１６４】

画面１４０では、今度は、長期的に資金が固定されてしまう固定資産項目等の合計額を借方合計の欄に表示しており、長期的に安定して使える資金からまかなえているかどうかを確認することができる。

【０１６５】

長期的に安定して使える「資金」からまかなえている場合には、差額として固定的に使っている資金の数値がプラス表示となり、会社の骨格をなすべき固定資産等を長期資金から調達できており、基本的な財務構造が安定していることを理解することができる。

【０１６６】

さらに、売上債権と仕入債務の差額である売上仕入資金の数値を算出して画面１４０に表示し、販売仕入の通常循環の中で資金を外部取引業者につぎ込んでいるのか（「売上仕入資金」がマイナスの場合）、あるいは外部取引業者から生み出しているのか（「売上仕入資金」がプラスの場合）を確認することができる。

【０１６７】

会社の骨格をなす「固定的に使っている資金」、販売仕入から生まれる「売上仕入資金」を性格別に順次表示し、両者を合計して安定資金合計の数値を算出し画面１４０に表示する。

最後に、短期的な資金の帳尻合わせ項目である「流動的（一時的）に使っている資金」を算出して表示する。なお、安定資金合計に「流動的（一時的）に使っている資金」を加減算したものが今月末現在の会社の現金預金合計額である。

【０１６８】

このように資金の性格別に、コメントと共に数値を順次表示させることによって、各項目と数値の意味合いを理解し易くなり、会社の財務体質の状態を認識し易くなる。

【０１６９】

（印刷機能）

図１９を参照して印刷機能を説明する。

図１９は、印刷機能のメニュー画面を示す図である。

各画面のＰｒｉｎｔボタンをクリック操作すると、画面が図１９に示す印刷メニュー画面１９０に遷移する。

【０１７０】

印刷メニュー画面１９０には、個別印刷メニュー、一括印刷メニュー、印刷設定メニューが準備されている。個別印刷＜印刷ページ＞に、確認のため印刷対象ページ名が表示される。

なお、印刷メニュー画面１９０には、一例として、「キャッシュＢＥＦＯＲＥ　このままだと、どうなる？」が印刷される例を示している。

【０１７１】

この印刷メニュー画面１９０には、各種印刷設定の欄が設けられており、例えば「カラーｏｒ白黒」、「枚数」、「部単位印刷」、「プリンタ」等の設定が可能である。「プリンタ」の欄には、接続している印刷可能プリンタ名がプルダウンリストで表示されるので、使用するプリンタを選択するものとする。

【０１７２】

このような印刷設定の下、「印刷　ＳＴＡＲＴ」ボタン１９１をクリック操作することで、設定内容の通りに個別印刷が印刷制御部４４（図３参照）により実行される。

【０１７３】

「○一括印刷」では、複数項目の一括印刷が可能である。

この場合、「ＡＬＬチェック　ＳＴＡＲＴ」ボタン１９２をクリック操作すると、全項目にチェックマークが入る。また「ＡＬＬクリア　ＳＴＡＲＴ」ボタン１９３をクリック操作すると、全項目のチェックマークが削除される。

【０１７４】
　このようにチェックボックスで印刷対象を選択した上で「印刷　ＳＴＡＲＴ」ボタン１９１をクリック操作することで、設定内容の通りに印刷対象項目の内容が一括印刷される。また画面右上隅の「Ｂａｃｋ」ボタン１９４をクリック操作することで、元のページに戻る。
【０１７５】
　印刷履歴を記録する印刷履歴記録機能がある。印刷履歴記録機能では、過去１０回（任意回数）の印刷履歴につき、利用者別の印刷履歴を記録することにより、次回印刷時に印刷履歴を再表示し、利用者毎のチェックボックス設定をゼロから行う不便を取り除いている。印刷対象、カラー白黒印刷の選択、印刷枚数設定、部単位印刷のあるなし、利用可能プリンタの選択等の記録機能を有する。
【０１７６】
（月次報告進捗一覧表アニメーション表示機能）
　図２０を参照して月次報告進捗一覧表アニメーション表示機能を説明する。
　図２０は、月次報告進捗一覧表の画面を示す図である。
　経営戦略展開支援システムでは、４つの機能のうち、Ａ：現状確認「銀行格付け」は？銀行格付けランキング表示機能のメニュー、Ｂ：大局的な「事業戦略」策定ツールであるキャッシュＢＥＦＯＲＥ＆ＡＦＴＥＲ機能のメニューにより、定期的に戦略を策定する。
　また、Ｃ：細かい「事業計画書」策定シミュレーション機能のメニューにより、随時戦術としての事業計画書策定と更新を行う。さらには、Ｄ：毎月の月次決算書予算実績差異分析機能のメニューにより、毎月の月次決算書を作成して、ユーザや提携会計事務所の公認会計士等へ提供する。
　サーバ１において、Ｄ：毎月の月次決算書予算実績差異分析機能を作動させることによって、月次決算書が作成される。
　作成された月次決算書のデータは、ＤＢ３０のユーザ毎の記憶領域に他の月の月次決算書のデータと共に記憶される。この際、月次決算書のデータには、作成、保存、提供済み等というフラグが付与されてその履歴が記憶される。
【０１７７】
　ＤＢ３０の複数の月次決算書のデータは、ユーザ毎に管理され、ユーザからの指示操作により図２０に示す月次報告進捗一覧表の画面２００を表示可能である。
　図２０の月次報告進捗一覧表の画面２００では、何月度分まで月次決算書を提供済みかを一覧することができる。また、最終処理日を表示する機能があり、月次決算書作成作業がいつから手つかずなのかを確認することができる。
　月次報告進捗一覧表の画面２００では、該当ユーザの該当月部分をクリック操作すると、該当月次決算書のデータを読み出して表示する。
【０１７８】
　また、月次報告進捗一覧表の画面２００では、該当ユーザとの通信履歴を表示可能である。
　この場合、図５に示した会計事務所コメント画面１００で保存したチャット、連絡及び確認事項表、コメント等の通信履歴を読み出してこの月次報告進捗一覧表の画面２００で閲覧することができる。
【０１７９】
　月次報告進捗一覧表の画面２００では、「ＮＯ順並」ボタン２０１をクリック操作すると、会社コードの「昇順（降順）」で一覧表を並べ替えることができる。
「ＳＴＦ並替」ボタン２０２をクリック操作すると、担当スタッフ名の「昇順（降順）」で一覧表を並べ替えることができる。
　同様に「クライアント名」や「最終処理日」の「昇順（降順）」で一覧表を並べ替えることができる。また、「クライアント名」をクリック操作すると、該当クライアントに関する基礎情報を読み出して表示する。
【０１８０】

ここで、図２１、図２２を参照して実施形態の経営戦略展開支援システムの４つの機能の概要を説明する。図２１は、経営戦略展開支援システムの機能画面を示す図である。図２２は、銀行格付けランキング機能の画面である。

経営戦略展開支援システムは、銀行格付けランキング機能、キャッシュＢＥＦＯＲＥ＆ＡＦＴＥＲ機能、事業計画書策定シミュレーション機能、月次決算書予算実績差異分析機能の４つの機能を有しており、図２１に示す機能画面２１０により各機能を実行することができる。

【０１８１】

機能画面２１０には、Ａ：現状確認「銀行格付け」は？銀行格付けランキングのメニュー２１１、Ｂ：大局的な「事業戦略」策定ツール キャッシュＢＥＦＯＲＥ＆ＡＦＴＥＲのメニュー２１２、Ｃ：細かい「事業計画書」策定シミュレーションのメニュー２１３、Ｄ：毎月の月次決算書予算実績差異分析のメニュー２１４と、夫々のメニューの機能を実行するためのＳＴＡＲＴボタン２１５乃至２１８が設けられている。

【０１８２】

機能画面２１０の、例えばＡ：現状確認「銀行格付け」は？銀行格付けランキングのメニュー２１１のＳＴＡＲＴボタン２１５をクリック操作すると、図２２に示す銀行格付けランキング機能の画面２２０が表示される。

【０１８３】

図２２に示す画面２２０には、随時（年次や月次、週次、日次）会計ソフト等からエクスポートされてＤＢ３０に記憶された、今期と前期、前々期の会計データがＤＢ３０から読み出される。

【０１８４】

「１）［返済の必要な借入金残高がいくらあるのか？］」について、会計データから前期末の「長期借入金」合計額のデータを読み出して、「長期借入金合計」の欄に合計額の数値を表示すると共にグラフを順次アニメーション表示する。

【０１８５】

続いて、会計データから前期末の「売上債権」合計額のデータ、「仕入債務」合計額のデータ、「棚卸資産」合計額のデータを読み出して「所要運転資金」を算出し、数値の欄に表示すると共にグラフを順次アニメーション表示する。

長期借入金合計と所要運転資金の差額を算出して、「要償還債務　御社の実績は」の欄に数値を表示する。

同様に、「２）［返済完了までに、何年かかるのか？］」について、会計データから前期の税引後当期純利益のデータと減価償却費のデータを読み出して、互いを加算し、「返済財源」の欄に数値を表示すると共にグラフを順次アニメーション表示する。

【０１８６】

「要償還債務　御社の実績は」の欄の数値を「返済財源」の欄の数値で割り算して、その計算結果の数値を「債務償還年数　御社の実績は」の欄に表示する。

【０１８７】

また、図２９の「利益額シミュレーション」機能の画面２９０でシミュレーションを実行することで表示された図３２の画面３２０において、登録ボタン３２６がクリック操作されると、シミュレーションの内容がＤＢ３０に登録されるので、登録済みのシミュレーションの内容に従い、図２２の画面２２０の「シミュレーションによると」の［計画］の欄の３つの数値（「要償還債務」の行方向の欄の数値、「債務償還年数」の行方向の欄の数値、「返済財源」の行方向の欄の数値）の夫々が更新される。

【０１８８】

「３）［御社の銀行格付けランキングは？］」について、ＣＲＤデータ（金融機関の持つ中小企業の経営データ）からユーザ企業の前々期・前期・今期のランキングデータを取得し、各項目に数値を順次アニメーション表示する。

【０１８９】

このように銀行格付けランキング機能によれば、アニメーション表示により、各項目間

の関係性に従った順番で数値を順次表示して行くことにより、数値の算出根拠の流れが理解し易くなり、数値の意味するものをより明確に把握することができる。

【０１９０】

（キャッシュＢＥＦＯＲＥ＆ＡＦＴＥＲ機能）

図２３乃至図２８を参照してキャッシュＢＥＦＯＲＥ＆ＡＦＴＥＲ機能を説明する。

キャッシュＢＥＦＯＲＥ＆ＡＦＴＥＲ機能は、前期と前々期の会計データを基に、前期の年間キャッシュ増減額をアニメーション表示する機能（キャッシュＢＥＦＯＲＥ機能）と、今期目標キャッシュ額を達成するためのシミュレーションを行う機能（キャッシュＡＦＴＥＲ機能）とを有する。

【０１９１】

まず、図２３乃至図２５を参照してキャッシュＢＥＦＯＲＥ機能を説明する。

図２３は、キャッシュＢＥＦＯＲＥ機能のアニメーション表示画面「「ＧＯ」ボタンによる、又は「早送り（＞＞）」ボタンの自動展開機能による「アニメーション中」」を示す図である。図２４は、キャッシュＢＥＦＯＲＥ機能のアニメーション表示画面「「ＮＥＸＴ（＞）」ボタンによる、又は「早送り（＞＞）」ボタンの自動展開機能による「横スクロール中」」を示す図である。図２５は、キャッシュＢＥＦＯＲＥ機能のアニメーション表示画面「横スクロール終了」を示す図である。

【０１９２】

キャッシュＢＥＦＯＲＥ機能では、前期と前々期の会計データを基に、１年間でどのくらい実際のキャッシュが増減したかを算出して、収入項目、支出項目、貸借対照表項目の増減等の順に項目別に順次アニメーション表示する。

キャッシュＢＥＦＯＲＥ機能では、ＤＢ３０に記憶されている企業のデータのうち、以下のデータを使用する。

例えば企業の会計ソフト等から随時エクスポートされてＤＢ３０に記憶される今期と前期、前々期の年次と月次会計データ、企業個別の設定内容（業種区分、決算月、販管費項目、変動費・固定費区分、人件費項目、税務計算設定等）が記憶されている設定シート等が使用される。

【０１９３】

以下、具体的な画面の例で説明する。

図２１に示した機能画面２１０の、例えばＢ：大局的な「事業戦略」策定ツール キャッシュＢＥＦＯＲＥ＆ＡＦＴＥＲのメニュー２１２のＳＴＡＲＴボタン２１６をクリック操作すると、図２３に示すキャッシュＢＥＦＯＲＥ＆ＡＦＴＥＲ機能の画面２３０が表示される。

【０１９４】

図２３に示す画面２３０の上部には、ＧＯボタン２３１、「ＮＥＸＴ」（＞）ボタン２３２、「ＢＡＣＫ」ボタン２３３、「早送り」（＞＞）ボタン２３４等が設けられている。

【０１９５】

また、画面２３０の下部には、営業キャッシュフローの数値入力欄、投資キャッシュフローの数値入力欄、フリーキャッシュフローの数値入力欄などが設けられている。

【０１９６】

画面２３０の中央部には、上記数値入力欄の夫々に対応する位置に棒グラフをアニメーションで表示するためのエリア（以下「アニメーション表示エリア」と称す）が設けられている。

画面２３０の例えばＧＯボタン２３１では、１項目ずつアニメーション表示を進ませることができる。表示の進ませ方は、予めプログラムされた読出規則に従って会計データからデータが読み出されて、当該データの数値入力欄に数値が入力され表示されると共に数値に対応する高さの棒グラフが表示される。

【０１９７】

画面２３０の「ＮＥＸＴ」（＞）ボタン２３２では、画面を１ページ幅分横にスクロールすることができる。

【０１９８】
画面２３０の「ＢＡＣＫ」ボタン２３３では、全ての数値、グラフ、吹き出し等が消去され、スクロールも元のスタート位置まで戻される。
【０１９９】
画面２３０の「早送り」（＞＞）ボタン２３４では、アニメーション表示とともに、自動展開機能による横方向へのスクロールが実行される。自動展開機能による横方向のスクロールは、常に少しずつ横方向へ画面をスクロールさせ続けたり、１項目ずつ表示が進むに従って１項目の表示幅分ずつ横方向へ画面をスクロールさせたり、ページ表示がいっぱいになった時点で、１ページ幅分の画面を横方向へスクロールさせたりすることができる。
【０２００】
この画面２３０では、ＧＯボタン２３１が押されると、まず会計データから前期の年間（その他選択した任意期間）の売上高のデータが１項目読み出されて「売上高です」の欄に数値が表示されると共にその数値に対応するアニメーション表示エリアの位置に売上高のグラフが表示される。
【０２０１】
続いてＧＯボタン２３１が押されると、設定シートに設定されている変動費の対象勘定科目のデータが一つ読み出されて変動費合計額が算出され、「変動費です」の欄に数値が表示されると共にグラフ、吹き出しが順次表示される。
次に、ＧＯボタン２３１が押されると、売上高から変動費を差引きした結果が算出され、「粗利益」の欄に数値が表示されると共にグラフ、吹き出しが順次表示される。そして粗利益率が計算されて、「粗利益率」の欄にその計算結果の数値が表示される。
【０２０２】
さらにＧＯボタン２３１が押されると、設定シートに設定されている固定費の対象勘定科目のデータが一つ読み出されて固定費合計額が算出され、「固定費です」の欄に固定費合計額の数値が表示されると共にグラフ、吹き出しが順次表示される。
【０２０３】
次に、ＧＯボタン２３１が押されると、粗利益から固定費を差し引いた結果が算出されて、「税引前利益」の欄に数値が表示されると共にグラフが順次表示される。
さらに、ＧＯボタン２３１が押されると、設定シートに設定されている法人税率のデータが一つ読み出されて法人税額が算出され、法人税の欄に数値が表示されると共にグラフが順次表示される。また法人税率の数値が表示される。
【０２０４】
次に、ＧＯボタン２３１が押されると、税引前利益から法人税を差引いた結果が算出され、その結果の数値が「税引後利益」の欄に表示されると共に、グラフ、吹き出し等が順次表示される。
さらに、ＧＯボタン２３１が押されると、減価償却費のデータが一つ読み出されて減価償却費の欄に数値が表示されると共にグラフが表示される。
【０２０５】
次に、ＧＯボタン２３１が押されると、前期・前々期の会計データから売上債権のデータが読み出されて売上債権の増加額（減少額）が算出され、その算出結果の数値が表示されると共にグラフが順次表示される。
【０２０６】
さらに、ＧＯボタン２３１が押されると、会計データから前期・前々期の年間（その他選択した任意期間）の該当データが１項目ずつ読み出されて、該当項目の欄に数値が表示されると共にグラフ、吹き出し等が表示される。
この他、増減額が計算され、その計算結果の数値が、画面２３０の増減額の欄に表示されると共にグラフ、吹き出し等が表示される。また、既出項目の差引額が算出されて、その差引額の数値が差引額の欄に表示されると共にグラフ、吹き出し等が順次表示される。
【０２０７】
なお、会計ソフト等に「直接法によるキャッシュフロー計算書」の作成機能があり、デ

ータのインポートが可能であれば、上記各項目の該当データを「直接法によるキャッシュフロー計算書」のデータから直接取得し、その数値を表示すると共にグラフ、吹き出し等を表示することも可能である。また、各表示項目については、現金主義に基づく表示も可能である。

【０２０８】

途中、「ＮＥＸＴ」（＞）ボタン２３２のクリック操作により画面が１ページ幅分、横にスクロールし、ＧＯボタン２３１の操作でさらに表示が進展してゆく。

【０２０９】

図２４は、「早送り（＞＞）」ボタン２３４で自動展開機能による画面の「横スクロール」が実行され、さらにアニメーション表示が進展した状態を示している。

【０２１０】

自動展開機能では、画面が横にスクロールする。画面が常時少しずつ横にスクロールし続けたり、１項目ずつ表示が進むに従って１項目の表示幅分ずつ横スクロールしたり、ページの表示がいっぱいになった時点で１ページ幅分、画面が横にスクロールしたりする。

「ＢＡＣＫ」ボタン２３３がクリック操作されると、全数値、グラフ、吹き出し等が消去され、スクロールも元のスタート位置まで戻される。

【０２１１】

「ＮＥＸＴ」（＞）ボタン２３２で画面が１ページ幅分、横にスクロールし、ＧＯボタン２３１でさらに表示が進展して最終状態になると、図２５の画面２３０のようになる。

【０２１２】

即ち、図２５の画面２３０では、前期１年間のキャッシュの増減額とそれに応じて選択されたコメントが表示された状態となる。

【０２１３】

また、この画面２３０は、「早送り（＞＞）」ボタン２３４のクリック操作により、アニメーション表示とともに自動展開機能による横へのスクロールがで実行され、さらにアニメーション表示が進展した最終状態を示す。さらに、この画面２３０は、前期１年間のキャッシュの増減額と、その額の大小に応じて選択されたコメントを表示した状態を示している。

【０２１４】

図２５の画面２３０では、キャッシュの増減の数値は、前期１年間での実際の増減額を示し、売上債権の増加（減少）の項目等のイレギュラーな増減項目が算入されている。

【０２１５】

イレギュラー項目を除外した、本来の会社収益力を示す本来のキャッシュの増減の数値を別途表示している。

除外すべきイレギュラー項目については、項目設定により、又は十分な過去データに基づくＡＩ判定等により認識することができる。

【０２１６】

このように、図２３乃至図２５の画面２３０を表示するキャッシュＢＥＦＯＲＥ機能では、各項目の数値、グラフ、吹き出し等を、一つずつアニメーション表示し、自動展開機能により画面がスクロールすることで収益から費用を控除し、さらには収益・費用に係らない貸借対照表項目によるキャッシュ増減項目を加減算して、会社が１年間で獲得したキャッシュの額を算出するという流れを、閲覧者は明確に理解することができる。

【０２１７】

適時表示される吹き出しの表示に助けられながら、ストーリ性に従って演算の根拠を自然な展開で把握することができる。

会社の収益構造を示す１年間の会社のキャッシュ増減額を算出する過程につき、演算の進展と共に理解することができる。

【０２１８】

このアニメーション表示機能では、表示の順番が整理されてストーリが意図的に表示されており、固定表示のグラフでは得づらい数値の算出の流れを理解することができる。

経営戦略展開支援システムは、「戦略的に考えるとは、即ち、理想のビジョンから逆算することである」という考え方に基づき、それを経営実務、会計処理に落とし込んだシステムである。
理想のビジョンとは、様々な切り口から様々な捉え方があるが、経営を支える骨子となる数値に関しては、最重要なのが損益以外の財務収支も取り込んだ「キャッシュ、即ち現預金」の理想的な獲得額である。
【０２１９】
続いて、図２６乃至図２８を参照してキャッシュＡＦＴＥＲ機能を説明する。
図２６は、キャッシュＡＦＴＥＲ機能の第１画面「目標値入力」を示す図である。
図２７は、キャッシュＡＦＴＥＲ機能の第２画面「「ＰＲＥ（＜）」ボタンで「横逆スクロール中」」を示す図である。
図２８は、キャッシュＡＦＴＥＲ機能の第２画面「横逆スクロール終了」を示す図である。
【０２２０】
キャッシュＡＦＴＥＲ機能では、キャッシュＢＥＦＯＲＥ機能で実行したアニメーション表示の結果を踏まえて、目標である最低必要なキャッシュ額からスタートしてキャッシュＢＥＦＯＲＥ機能の流れを逆に辿ることで目標達成の必要売上高を算出する。
キャッシュＡＦＴＥＲ機能は、理想（最低必要なキャッシュの額）から逆算する形で、目標達成の道筋（必要売上高と各項目の金額）を明確にする機能である。
【０２２１】
図２５の画面２３０の「キャッシュＡＦＴＥＲへ」ボタン２３５をクリック操作すると、ユーザ端末２に、図２６に示すキャッシュＡＦＴＥＲ機能の画面２６０が表示される。
【０２２２】
この画面２６０には、画面２３０とほぼ同じボタン類が設けられている。
また、画面２６０は、機能的に逆算する関係で、キャッシュＢＥＦＯＲＥ機能の最後尾の画面２３０（図２５）と類似する画面がトップに表示される。
【０２２３】
この画面２６０では、まず初めに、「最低必要な「キャッシュ」の額は、どのくらいですか？」の欄にユーザが数値を入力する。入力値は、会社が目標とする年間のキャッシュ増加額である。
例えば、最低キャッシュアウトをなくすために「０」等の数値を入力したりする。
画面２６０には、目標のたて方の欄２６６が設けられている。目標のたて方の欄２６６には、「１）５年内借入金完済のためには、どうすればよいか？」という説明の文字列の下に達成シミュレーションボタン２６７が設けられている。また、「２）毎期１人の採用を可能にするためには、どうすればよいか？」という説明の文字列の下に達成シミュレーションボタン２６８が設けられている。
【０２２４】
達成シミュレーションボタン２６７をクリック操作すると、借入金額の１／５の額（数値）が「最低必要なキャッシュの額は？」の欄に入力される。
また、達成シミュレーションボタン２６８をクリック操作すると、１人の人件費額（例えば５００万円）をキャッシュＢＥＦＯＲＥ機能の固定費額に加算した額（数値）が「固定費額」の欄に入力される。
【０２２５】
ＧＯボタン２６２がクリック操作されると、キャッシュＡＦＴＥＲ機能は、「借入金の返済による増減」の欄に数値（キャッシュＢＥＦＯＲＥの数値）を表示すると共にグラフ、吹き出しを表示し、次に「計上している減価償却費」の欄の数値（キャッシュＢＥＦＯＲＥの数値）とグラフを表示する。
【０２２６】
キャッシュＡＦＴＥＲ機能は、「最低必要なキャッシュの額は？」の欄の数値から、「借入金の返済による増減」の欄の数値を減算し、さらに「計上している減価償却費」の欄

の数値を減算して、税引後当期利益の金額を算出し、その算出結果の数値を「税引後でこれだけの当期利益が必要です」の欄に表示する。

【０２２７】

「借入金の返済による増減」の欄の数値の大小に応じて、選択された改善策ヒントの吹き出しが表示される。

【０２２８】

図２６の画面２６０の状態から、「ＰＲＥ（＜）」ボタン２６１のクリック操作により画面が１ページ幅分、横に逆スクロールする。そしてＧＯボタン２６２のクリック操作でさらに表示が進展し、図２７に示す画面２６０の状態になる。

【０２２９】

また、図２７の画面２６０の状態は、図２６の画面２６０の状態から、「早送り（＜＜）」ボタン２６３のクリック操作で、アニメーション表示とともに自動展開機能による「横逆スクロール」が実施され、さらにアニメーション表示が進展した状態を示す。

【０２３０】

自動展開機能による「横逆スクロール」は、常時少しずつ「横逆スクロール」し続けたり、１項目ずつ表示が進むに従って１項目の表示幅分ずつ「横逆スクロール」したり、ページ表示がいっぱいになった時点で１ページ幅分「横逆スクロール」したりする。

【０２３１】

「ＮＥＸＴ（＞）」ボタン２６４のクリック操作により画面が１ページ幅分、横にスクロールする。

「ＢＡＣＫ」ボタン２６５のクリック操作では、画面内の全ての数値、グラフ、吹き出し等が消去され、スクロールも元のスタート位置まで戻される。

【０２３２】

図２７の画面２６０の状態から、さらにアニメーション表示が進展すると、図２８の画面２６０の状態になる。

即ち、図２８の画面２６０の状態は、「ＰＲＥ（＜）」ボタン２６１で画面が横に逆スクロールし、ＧＯボタン２６２でさらに表示が進展した最終状態を示す。

【０２３３】

この図２８の画面２６０の位置では、シミュレーションによる「必要売上高」の欄に数値、グラフ、ギャップ（売上高不足）の金額の欄に数値、コメント等が表示される。

また「早送り（＜＜）」ボタン２６３のクリック操作で、アニメーション表示とともに自動展開機能による「横逆スクロール」が実施され、表示が進展した最終状態でも図２８の画面２６０の状態になる。

【０２３４】

各項目の、数値、グラフ、吹き出し等を、一つずつアニメーション表示し、自動展開機能により画面がスクロールすることによって、理想（最低必要なキャッシュの額）から逆算する形で目標達成の道筋（必要売上高と各項目の金額）を明確にするという戦略策定の思考が理解し易くなる。

【０２３５】

シミュレーションにより、実現不可能なレベルの必要売上高が算出されることが多い。その場合、「ＮＥＸＴ（＞）」ボタン２６４のクリック操作により、各項目の表示画面まで「横スクロール」して画面を戻し、各項目の数値を修正して上書き入力する。

【０２３６】

上書きされると、上書きされた数値に基づいて「必要売上高」の欄の数値、グラフ、ギャップ（売上高不足）の金額の数値、コメント等が更新される。

各項目の数値の修正については、会社経営の実務で導き出せる具体的な改善行動を想定しながら、改善ポイントと成り得る項目を修正する。

【０２３７】

例えば「借入金の返済による増減」の欄の数値につき、金融機関との返済計画の見直し（リスケ）交渉により、年間返済額を減額した数値を上書き入力することが考えられる。

【０２３８】
これにより、シミュレーションの「必要売上高」レベルを下げることができ、より実現可能性の高い目標達成の道筋（必要売上高と各項目の金額）を確認することができる。
同様に、「固定費額」、「変動比率」の各数値については、社内の改善行動による効率化を進めることによって、削減した数値を上書き入力することが考えられる。また別の目標達成の道筋（必要売上高と各項目の金額）を確認することができる。
【０２３９】
「固定費額」、「変動比率」の各数値については、事業計画書策定シミュレーション機能上で内訳詳細のシミュレーションを実施できる。
また、「必要売上高」の数値については、同様に事業計画書策定シミュレーション機能上で内訳詳細のシミュレーションを実施できる。
【０２４０】
図２８の画面２６０には、シミュレーションパターンのデータの保存ボタン２７１と読出ボタン２７２が設けられており、これらのボタンを操作することにより、実行したシミュレーションのデータを１０パターンまでＤＢ３０に保存でき、夫々パターンのシミュレーションのデータをＤＢ３０から読み出してシミュレーションを実行及び表示することができる。
また、同画面２６０には、登録ボタン２７３が設けられている。この登録ボタン２７３をクリック操作することにより、シミュレーションを確定させ、計画数値としてＤＢ３０に保存する。これによって、月次決算書予算実績差異分析機能上の予算の数値やグラフが表示されるようになる。
【０２４１】
（事業計画書シミュレーションによる戦術策定機能）
次に、図２９乃至図３２を参照して事業計画書シミュレーションによる戦術策定機能を説明する。図２９は、事業計画書策定シミュレーション機能の第２画面（詳細機能の選択画面）を示す図である。図３０は、売上シミュレーション機能のシミュレーション画面（現在までの実績画面）を示す図である。図３１は、売上シミュレーション機能のシミュレーション画面（目標売上高達成のためのシミュレーション画面）を示す図である。図３２は、利益額シミュレーション機能のシミュレーション画面（目標利益額達成のためのシミュレーション画面）を示す図である。
【０２４２】
事業計画書シミュレーションによる戦術策定機能は、上述したキャッシュＡＦＴＥＲ機能でシミュレーションした戦略に基づき事業計画書のシミュレーションを実行する。これにより事業計画の具体的な詳細内訳を策定することができる。
【０２４３】
事業計画書シミュレーションによる戦術策定機能では、図２９に示すシミュレーション機能一覧の画面２９０が表示される。
画面２９０には、売上シミュレーションを実行するための「売上高内訳シミュレーション」の欄、変動費シミュレーションを実行するための「変動費シミュレーション」の欄、固定費シミュレーションを実行するための「固定費シミュレーション」の欄、利益額シミュレーションを実行するための「利益額シミュレーション」の欄、「財務指標の改善」の欄などが設けられている。
【０２４４】
「売上高内訳シミュレーション」の欄には、必要売上高の数値表示枠２９１と、売上高内訳のシミュレーションを実行するためのトリガボタンとしてのＳＴＡＲＴボタン２９２が設けられている。数値表示枠２９１には、キャッシュＡＦＴＥＲ機能で登録された必要売上高の数値が表示される。
ＳＴＡＲＴボタン２９２がクリック操作されると、図３０に示す「売上高内訳シミュレーション」の画面３００が表示される。
【０２４５】

「変動費シミュレーション」の欄には、予算変動費率の数値表示枠２９３と、予算変動費率のシミュレーションを実行するためのトリガボタンとしてのＳＴＡＲＴボタン２９４が設けられている。数値表示枠２９３には、キャッシュＡＦＴＥＲ機能で登録された変動費率の数値が表示される。

ＳＴＡＲＴボタン２９４がクリック操作されると、変動費シミュレーションの画面（図示せず）が表示され、変動費率のシミュレーションが実行される。

【０２４６】

「固定費シミュレーション」の欄には、予算固定費額の数値表示枠２９５と、予算固定費額のシミュレーションを実行するためのトリガボタンとしてのＳＴＡＲＴボタン２９６が設けられている。数値表示枠２９５には、キャッシュＡＦＴＥＲ機能で登録された予算固定費額の数値が表示される。

ＳＴＡＲＴボタン２９６がクリック操作されると、予算固定費シミュレーションの画面（図示せず）が表示され、予算固定費額のシミュレーションが実行される。

【０２４７】

「利益額シミュレーション」の欄には、必要利益額の数値表示枠２９７と、上記シミュレーションを繰り返して必要利益額への筋道を明確にするためのトリガボタンとしてのＳＴＡＲＴボタン２９８が設けられている。数値表示枠２９７には、キャッシュＡＦＴＥＲ機能で登録された必要売上高から変動費額と固定費額を控除した数値が表示される。

ＳＴＡＲＴボタン２９８がクリック操作されると、図３２に示す「利益額シミュレーション」の画面３２０が表示される。

【０２４８】

「財務指標の改善」の欄には、上記シミュレーションにより、金融機関が重視する財務指標の改善効果を表示するためのトリガボタンとなるＳＴＡＲＴボタン２９９が設けられている。ＳＴＡＲＴボタン２９９がクリック操作されると、図２２に示す「［銀行格付け］御社の格付けランキングは？」の画面２２０が表示される。シミュレーションによる要償還債務の数値、債務償還年数と返済財源の数値が表示される。

【０２４９】

以下、上記の各シミュレーション画面を説明する。

上記図２９に示すシミュレーション機能一覧の画面２９０のＳＴＡＲＴボタン２９２がクリック操作されると、図３０に示す「売上高内訳シミュレーション」の画面３００が表示される。

【０２５０】

図３０に示す「売上高内訳シミュレーション」の画面３００には、今期１年（６月から５月迄）を１か月毎に区画し、既に経過した経過期間（６月から９月）と未経過期間（１０月から５月）に分けた事業計画のデータが生成されて、前期実績の売上高のデータと共に表示される。

【０２５１】

今期の経過期間（６月から９月）の売上高のデータは、今期の売上高の実績値（６月から９月迄の月毎の数値とグラフ３０１、３０２）がそのまま表示される。

グラフ３０１は、今期の単月毎の売上高を示している。グラフ３０２は、今期の累計の売上高を示している。

今期の未経過期間（１０月から５月）のデータは、計画策定期間として、計画策定の対象であり、シミュレーションすることで、月毎の数値とグラフでアニメーション表示される。月毎の数値は、売上高合計の他、補助科目（店舗売上高、外販売上高、通販売上高等）毎に数値が表示される。

【０２５２】

画面３００に設けられたリセットボタン３０３をクリック操作すると、未経過期間に数値があればすべて消去した上で、アニメーション機能により順次ひと月毎１行ずつ、経過月までの「実績値」がアニメーション表示される。

【０２５３】

画面３００の「売上高内訳」の「売上高合計」の欄には、ＤＢ３０の会計データから読み出された今期の経過月の各月次「売上高」のデータの数値が順次表示される。

【０２５４】

画面３００の「補助科目」の各売上高補助科目欄には、ＤＢ３０の会計データから読み出された売上高補助科目のデータに含まれる今期の経過月の各月次のデータの数値が順次表示される。

【０２５５】

画面３００の「部門」の各部門売上高欄には、ＤＢ３０の会計データから読み出された売上高部門別のデータに含まれる今期の経過月の各月次のデータの数値が順次表示される。

【０２５６】

なお、必要な内訳データがＤＢ３０の会計データに保存されていない場合には、社内で別途作成したデータやレジデータ、社外から入手した通信販売データ等を読み込んで、会計データに代替することができる。

【０２５７】

画面３００の「シミュレーションパターン」の保存ボタン３１８と読出ボタン３１９のクリック操作で、実施したシミュレーションを１０パターンまで保存し、読み出してシミュレーションを実行及び表示することができる。

【０２５８】

全ての月の売上高内訳シミュレーションを実行しアニメーション表示を終了した時点が図３１の状態となる。

図３１に示す画面３００では、「以降、前年同月数値でシミュレーションします」のメッセージ横の前年同月一括ボタン３０５がクリック操作されると、ＤＢ３０の前期の会計データから前年同月の数値が読み出されて、その数値が、アニメーション機能により順次ひと月毎１行ずつ未経過月の各項目に表示される。

【０２５９】

「年間で昨年同額となるよう、シミュレーションします」のメッセージ横の昨対調整一括ボタン３０６がクリック操作されると、アニメーション機能により順次ひと月毎１行ずつ、未経過月の欄に年間の合計額が昨年と同額になるように配分した数値が表示される。

【０２６０】

即ち、経過月についてあまり成績が良くない際に、残りの未経過月で頑張ってせめて昨年と同額の年間結果となるように努力したい、という通常の経営者の感覚に基づいて準備した算出方法である。

【０２６１】

「年間売上アップ率により、シミュレーションします」の売上ＵＰ計算一括ボタン３０７がクリック操作されると、アニメーション機能により順次ひと月毎１行ずつ、未経過月欄に各項目の前年同月の数値に売上ＵＰ率として入力したアップ率で増額した数値が表示される。

【０２６２】

「個別にシミュレーションします」の欄については、「補助科目」、「部門」の対象としたい項目を選択した状態で、同月同額ボタン３０８をクリック操作することで、クリックした項目の行だけ、未経過月の欄に各項目の前年同月の数値が表示される。

【０２６３】

昨対調整ボタン３０９がクリック操作されると、クリックした項目の行だけ、未経過月の欄に年間の合計額が昨年と同額になるように配分した数値が表示される。

【０２６４】

売上ＵＰボタン３１０がクリック操作されると、クリックした項目の行だけ、未経過月欄に各項目の前年同月の数値に売上ＵＰ率として入力したアップ率で増額した数値が表示される。

【０２６５】

クリアボタン３１１がクリック操作されると、クリックした項目の行だけ、未経過月欄

の数値が消去される。再合計ボタン３１２がクリック操作されると、シミュレーションした結果を再集計してシミュレーション数値の欄に年間売上高の数値が表示される。

【０２６６】

シミュレーションの実行に従い、今期売上高、前期売上高のグラフが、単月と累計でアニメーション表示される。

なお、これらシミュレーションの欄の中で、四角（□）の欄にチェックマークが入っているものが、実行されたシミュレーションであることを示している。

【０２６７】

一括クリアボタン３０４がクリック操作すると、表示されていた科目名と数値がすべて消去される。

前年数値の欄には、ＤＢ３０から読み出された前期の会計データに含まれる前期売上高の数値が表示される。

【０２６８】

シミュレーション数値の欄には、シミュレーションによる今期売上高の数値が表示される。このように前記と今期の数値を表示することにより、今期のシミュレーションの結果を前年と比較して検討することができる。

【０２６９】

［キャッシュＡＦＴＥＲ］による必要売上高の欄に、キャッシュＡＦＴＥＲ機能で事前に登録された必要売上高の数値が表示される。

この必要売上高の表示により、ユーザ端末２のユーザ（企業の担当者等）は、今期のシミュレーションの結果がキャッシュＡＦＴＥＲ機能で策定された必要売上高を満たしているかどうかを確認することができる。

【０２７０】

続いて、図３２を参照して利益額シミュレーションについて説明する。

上記図２９に示すシミュレーション機能一覧の画面２９０のＳＴＡＲＴボタン２９８がクリック操作されると、図３２に示す「利益額シミュレーション」の画面３２０が表示される。

【０２７１】

画面２９０から画面３２０に切り替わると同時に利益額のシミュレーション演算が実行され、画面３２０内でアニメーション表示が開始される。

画面３２０に設けられている「単月」の売上高合計、変動費率、変動費合計、固定費合計、営業利益の欄に、順次ひと月毎１行ずつアニメーション表示されてゆく。これと同時に「単月」のグラフがアニメーション表示される。

単月のグラフの表示に続いて「累計」の売上高合計、変動費率、変動費合計、固定費合計、営業利益の各欄に、数値が順次ひと月毎１行ずつアニメーション表示されてゆく。これと同時に「累計」のグラフがアニメーション表示される。

【０２７２】

売上高合計の数値については、売上高内訳シミュレーションの際にシミュレーションされた数値をＤＢ３０から読み出し表示する。

変動費率、変動費合計の数値については、変動費シミュレーションの際にシミュレーションされた数値を読み出して表示する。

固定費合計の数値については、固定費シミュレーションの際にシミュレーションされた数値をＤＢ３０から読み出して表示する。

営業利益の数値については、売上高合計から変動費合計、固定費合計を差し引いた数値を算出し、表示する。

【０２７３】

この画面３２０では、「「売上」シミュレーションを確認する」の欄に設けられている売上シミュレーションボタン３２１がクリック操作されると、売上高内訳シミュレーションの画面３００が表示されるので、表示された画面３００から売上シミュレーションの内容を修正して、利益額シミュレーションを更新することができる。

【０２７４】
「「変動費」シミュレーションを確認する」の欄に設けられている変動費シミュレーションボタン３２２がクリック操作されると、変動費シミュレーションの画面（図示せず）に遷移するので、表示された変動費シミュレーションの画面から変動費シミュレーションの内容を修正して利益額シミュレーションを更新することができる。
【０２７５】
「固定費」シミュレーションを確認する、の欄に設けられている固定費シミュレーションボタン３２３がクリック操作されると、固定費シミュレーションの画面（図示せず）に遷移するので、表示された固定費シミュレーションの画面から固定費シミュレーションの内容を修正して利益額シミュレーションを更新することができる。
【０２７６】
画面３２０の前年数値の欄には、ＤＢ３０から読み出された前期の会計データに含まれる前期営業利益の数値が表示される。
画面３２０のシミュレーション数値の欄には、シミュレーションによる今期営業利益の数値が表示される。これにより、ユーザ端末２のユーザ（企業の担当者等）は、今期のシミュレーションの結果を前年と比較して検討することができる。
【０２７７】
画面３２０の［キャッシュＡＦＴＥＲ］による必要利益額の欄には、キャッシュＡＦＴＥＲ機能で登録された「税引前利益はこれだけ必要です（営業利益）」の数値が表示される。［キャッシュＡＦＴＥＲ］との差異額の欄には、シミュレーション数値と［キャッシュＡＦＴＥＲ］による必要利益額との差額が表示される。
これにより、今期のシミュレーションの結果が、キャッシュＡＦＴＥＲ機能で策定された必要利益額を満たしているかどうかを確認することができる。
【０２７８】
画面３２０に設けられているシミュレーションパターンの保存ボタン３２４と読出ボタン３２５をクリック操作することで、実行したシミュレーションを１０パターンまで保存し、読み出してシミュレーションを実行及び表示することができる
【０２７９】
また、画面３２０の登録ボタン３２６をクリック操作することで、シミュレーションを確定させ、事業計画として登録することができる。定期的に自動シミュレーションしたり、利益の大幅減少時等、何らかの機縁を基にして自動シミュレーションすることも可能である。
登録したシミュレーションに従い、図２２の画面２２０の、「シミュレーションによると［計画］」の「要償還債務」の数値、「債務償還年数」の数値、「返済財源」の数値が更新される。
【０２８０】
また、月次決算書予算実績差異分析機能の各ページの「予算」の数値とグラフが更新される。
【０２８１】
続いて、図３３、図３４を参照して現金預金残高の３６５日推移を表すキャッシュ残高推移表について説明する。図３３は、ＳＴＡＲＴボタンで、アニメーションを開始したキャッシュ残高推移表の画面を示す図である。図３４は、アニメーション表示させたキャッシュ残高推移表の画面「アニメーション終了」を示す図である。
【０２８２】
図３５の共通機能選択画面３５０の例えばキャッシュ残高推移表のアイコンをクリック操作すると、図３３に示すキャッシュ残高推移表の画面３３０が表示される。
【０２８３】
図３３の画面３３０は、日毎データ集計部６５と表示制御部６９により表示される画面であり、毎日の現金預金残高のグラフを３６５日分アニメーション表示するものである。
【０２８４】

日毎データ集計部６５は、企業が活動する中で、ユーザ端末２から毎日受信される１以上の金融機関の現金預金残高等の数値群、あるいは前期・今期の会計データの現金と預金に係る仕訳取引から算出した現金預金残高等の数値群を日毎に集計して表示制御部６９に出力し、表示制御部６９は、日毎に集計された現金預金残高を日の順に３６５日分アニメーション表示する。

【０２８５】

企業が活動する中で、ユーザ端末２から１以上の金融機関の現金預金残高等のデータ、あるいは会計データから読み出した現金預金残高等のデータが送信される。サーバ１では、ユーザ端末２から受信された現金預金残高等のデータをＤＢ３０に記憶する。

【０２８６】

日毎データ集計部６５は、ＤＢ３０に記憶された金融機関の現金預金残高等のデータから、あるいはＤＢ３０の会計データから読み出した現金預金残高等の日次残高を集計し、表示制御部６９に出力することで、表示制御部６９は、日毎に集計された現金預金残高の数値と棒グラフを日の並び順（期首の６月から、経過月の９月まで６月１日、２日、３日…、９月２９日、３０日等の順）にアニメーション表示する。

なお、表示期間を１年に設定することで、最大３６５日分の現金預金残高の数値と棒グラフをアニメーション表示することができる。

【０２８７】

具体的には、図３３の画面３３０に設けられているＳＴＡＲＴボタン３３１がクリック操作されると、日毎データ集計部６５は、ＤＢ３０から読み出した現金預金のデータを集計して表示制御部６９に出力することで、数値と棒グラフのアニメーション表示が開始される。

この際、最初に比較参照対象となる前期の現金預金残高の日次推移グラフ３３２が時系列に従って期首から期末までアニメーション表示される。

続いて、今期の現金預金残高の日次推移グラフ３３３が時系列に従って期首から経過月までアニメーション表示される。図３３の画面３３０は、前期の現金預金残高の日次推移グラフ３３２が期首から期末までアニメーション表示された後、今期の現金預金残高の日次推移グラフ３３３が期首からアニメーション表示され始めた状態を示している。

【０２８８】

図３３の画面３３０の状態からアニメーション表示がさらに進展して、図３４の画面３３０に示す状態、つまり数値とグラフのアニメーション表示が９月末（経過月末日）まで進んだ状態となる。

【０２８９】

即ち、今期の現金預金残高の日次推移グラフを時系列に従ってアニメーション表示し、経過月迄表示を進展させる。

【０２９０】

数値については、図３４の画面３３０の下部に設けられた各欄にアニメーション表示される。

具体的には、画面３３０の下部には、最大キャッシュの増加額の欄３３４、最大キャッシュの減少額の欄３３５、余剰キャッシュ額の欄３３６、月次キャッシュ安全余裕率の欄３３７が設けられており、夫々の欄にグラフの進展に伴い、グラフ表示期間に係る各数値が順次更新されるようにアニメーション表示される。

【０２９１】

その際、日毎データ集計部６５は、表示期間中の１日の最大現金預金増加額を算出してその数値を最大キャッシュの増加額の欄３３４に表示し、表示期間中の１日の最大現金預金減少額を算出してその数値を最大キャッシュの減少額の欄３３５に表示する。

【０２９２】

また、日データ集計部６６は、表示期間中の現金預金残高の最少額を算出してその数値を、「期間中、常時残高あり」と文字列が記載された余剰キャッシュ額の欄３３６に表示する。

【０２９３】
さらに、日データ集計部６６は、余剰キャッシュ額の数値を最大キャッシュの減少額の数値で割り算して月次キャッシュ安全余裕率を算出し、その数値を「最大支払がいつ来ても大丈夫な、安全度」と文字列が記載された月次キャッシュ安全余裕率の欄３３７に表示する。
【０２９４】
月次キャッシュ安全余裕率が１００％を下回る場合、収入と支出のタイミングにより、支払いが先行した場合にキャッシュショートを起こす危険がある、ということを警告するものである。月次キャッシュ安全余裕率は、あらゆる会社で留意しなければいけない指標である。
【０２９５】
また、グラフ中の該当部分、あるいは日付部分をクリックすることによって、該当日の増減明細ウインドー（あるいは別シート等）が開く。増減明細については、該当日のキャッシュ増加額の大きなもの、キャッシュ減少額の大きなものを選別し、金額順に表示される。
【０２９６】
増減明細金額と同時に、相手勘定科目、仕訳の摘要項目も表示され、営業キャッシュフロー、投資キャッシュフロー、財務キャッシュフローの区分判定を行い、区分表記することによって、増減の理由が一層明確に認識できる。会社のキャッシュ増減につき、十分大きなデータが蓄積されれば、ＡＩを活用した増減理由の分析や、明細・解説等表示項目の自動選定も可能である。
【０２９７】
さらには、ＡＩ等で増減傾向を把握することによって、キャッシュ残高の推移傾向を予測でき、将来シミュレーションを実施できる。それによって、キャッシュ推移に関して予算実績差異分析や、損益との差異分析が可能になる。
借入金の日次残高推移グラフを並行して表示することにより、借入金の返済源資の確認や返済計画遂行の難易を判断することが可能になる。
【０２９８】
キャッシュ残高推移表と同様、その他の貸借対照表項目についても、日次での残高推移表の作成と、増減理由分析、明細・解説等表示項目の選定、将来シミュレーションを実施することによって、残高の日次推移傾向をしっかりと把握することが可能になる。
【０２９９】
さらには、損益計算書項目についても、日次での発生額推移表の作成と、増減理由分析、明細・解説等表示項目の選定、将来シミュレーションを実施することによって、費用発生の日次推移傾向をしっかりと把握することが可能になり、経営上有益な多くの情報を再認識することができる。
【０３００】
例えば、損益項目の一つである売上高の日次推移表は多く使われているが、人件費や水道光熱費、運賃送料、車両費等に関する日次推移の分析等はほとんど実施されておらず、日次推移表を作成することによって日次による傾向（曜日、天候、祭事等による影響）を再認識する上で有効である。従来行われてきた、経営者や管理者の経験と勘による判断に代わり、客観的な（ビッグ）データによる戦略的な判断が可能になる。
【０３０１】
このようにキャッシュ残高推移表の表示機能によれば、前期の現金預金残高の日次推移グラフを先に表示しており、前期と比較しながら今期の現金預金残高の日次推移グラフを確認することができ、今期の資金繰り状況を判断しやすくなる。
また、時系列に従って１日ずつアニメーション表示することにより、グラフが進展する動きの様子を目で追うことによって、１年間の現金預金残高の増減傾向を印象的に認識することができる。
【０３０２】

キャッシュ残高は、会社経営上、最も注意しなければいけないポイントの一つである。利益がプラスであっても、キャッシュがマイナスになると、「勘定あって、銭足らず」の黒字倒産を引き起こしかねない。月末残高のみを表示したグラフや図表等では、キャッシュフロー経営を行う上では、有益な資料とはならない。キャッシュは毎日増減するものであり、たまたま毎月末に残高があったとしても、月中にキャッシュがショートする可能性を事前に対策するための管理資料にはなりえない。

【０３０３】

現金預金残高の３６５日推移を表すキャッシュ残高推移表により、月中も含めた、年間３６５日のキャッシュ残高推移を見える化して、管理することが可能になる。

【０３０４】

次に、図３５乃至図４１を参照して業務に応じたキー指標表示機能について説明する。図３５は、月次決算書予算実績差異分析機能に関する共通機能選択画面（メインメニュー画面）を示す図である。図３６は、月次決算書予算実績差異分析機能に関するキー指標選択画面（サブメニュー画面）を示す図である。図３７は、キー指標（選択した売上高営業利益率）のアニメーション画面「アニメーションを開始する前の状態」を示す図である。図３８は、キー指標（選択した売上高営業利益率）のアニメーション画面「アニメーションを終了した状態」を示す図である。図３９は、キー指標（選択した商品別営業所別色分布分析表）の（アニメーション表示を開始した状態）を示す図である。図４０は、キー指標（選択した商品別営業所別色分布分析表）の（アニメーション表示を終了した状態）を示す図である。図４１は、キー指標（選択した人事売上高グラフ）の画面を示す図である。

【０３０５】

会社が属する業種の特性に応じて、さらには会社の規模や置かれている状況等に応じて、注目すべき経営指標、グラフは異なる。

そこで、このキー指標表示機能は、ＰＤＣＡサイクルの中で予算実績差異分析で差異を認識し、改善活動を打ち出す際に指針とすべき、会社の業種、戦略、状況に応じた、ユーザにとって有効なキー指標を、数値やグラフで提示する。

【０３０６】

サーバ１のＤＢ３０に、予め各企業個別の設定シートが記憶されている。設定シートには企業の業種区分が記録されている。

キー指標提示部４２は、ＤＢ３０に記憶されている各企業個別の設定シートを読み出し、設定シートに記録されている業種区分に基づき、予め用意した該当業種の特性に応じたキー指標を数値やグラフで企業ユーザのユーザ端末２へ表示する。

【０３０７】

以下、図面を参照して具体的にキー指標表示動作を説明する。

図３５の共通機能選択画面３５０の例えばキー指標のアイコンがクリック操作されると、図３６に示すサブメニュー画面３６０が表示される。

図３６のサブメニュー画面３６０には、例えば売上高営業利益率グラフ、色分布分析、人時売上高等のアイコン３６１乃至３６３が設けられている。

図示はしないが、この他、製造業の会社であればロスや不良製品発生数の大小が利益に直結してくるため、ロスや不良製品の発生状況を分析するロス・不良率グラフといったキー指標を選択するためのアイコンも設けられている。つまりこのキー指標提示部４２の機能では、会社が属する業種の特性に応じて、さらには会社の規模や置かれている状況等に応じて、特に重視して注目すべき指標を予め準備し、表示のフロー（ストーリ）を判断して適切なアイコンを選定表示し、キー指標の数値やグラフを表示のフロー（ストーリ）に沿ってアニメーション表示することができる。

【０３０８】

例えば企業が衣料品小売業の会社であれば、改善活動の打ち出しをする上で、利益率や売上高の内訳を詳細に分析することがたいへん有効である。

そこで、衣料品小売業の会社のユーザは、図３６に示すサブメニュー画面３６０の、衣料品小売業向けに選定表示された利益率の推移を分析する売上高営業利益率グラフのアイ

コン３６１や商品別営業所別分析をする色分布分析グラフのアイコン３６２等を選択することで必要なキー指標を閲覧できる。

【０３０９】

具体的には、図３６のサブメニュー画面３６０の売上高営業利益率グラフのアイコン３６１をクリック操作すると、キー指標提示部４２により、売上高営業利益率グラフが表示される。

【０３１０】

キー指標提示部４２は、図３６の画面３６０のアイコン３６１のクリック操作をトリガにして、ＤＢ３０の当該企業個別の前期・今期の会計データから必要なデータ（例えば店舗のレジデータや営業日報データ等）を読み出して、今期の予算売上高営業利益率と前期実績、及び今期実績の売上高営業利益率を計算し、図３７に示すグラフ提示用の画面３７０を表示する。

【０３１１】

図３７のグラフ提示用の画面３７０には、提示されるキー指標を選択するためのプルダウンリスト３７１とスタートボタン３７３が設けられている。

プルダウンリスト３７１には、売上高営業利益率だけでなく、より詳細な担当者別売上高営業利益率、事業部別売上高営業利益率等を提示するための選択項目が設けられている。プルダウンリストの内容は、会社の属する業種の特性に応じて、さらには会社の規模や置かれている状況等に応じて必要な指標を確認できるように、予め準備されている。

図３７の画面３７０は、プルダウンリストの、例えば売上高営業利益率の選択項目が選択操作された状態を示している。

【０３１２】

図３７の画面３７０に設けられているスタートボタン３７３がクリック操作されると、キー指標提示部４２により集計された今月の実績と差異、昨年差異、同様に累計の実績と差異、昨年差異の数値が、図３８に示す画面３７０のように順次アニメーション表示される。有利差異は青色の背景色、不利差異は赤色の背景色で表示される。現状を単月で確認すると同時に、今期全般の傾向を知りたいという意図の流れで、累計を表示する。

なお、予算については、図３２の画面３２０で利益額シミュレーションを実行した後、登録ボタン３２６のクリック操作によりＤＢ３０に保存されているので、キー指標提示部４２は、ＤＢ３０に保存された計画数値から必要なデータを読み出して予算を算出する。

【０３１３】

続いて、予算のグラフ３７５、前期のグラフ３７６が順次アニメーション表示される。最後に、今期のグラフ３７７が今月までアニメーション表示される。

【０３１４】

先に表示されている予算・前期のグラフ３７５、３７６の上に、今期のグラフ３７７を時系列に従って、ひと月ずつアニメーション表示することによって、ひと月ずつグラフ３７７が伸展する様子を、アピール力をもって表示でき、過去月の結果を比較参照しながら傾向を認識しやすくなる。

【０３１５】

さらには、先に表示されている予算のグラフ３７５と前期実績のグラフ３７６とのグラフの重なり具合を、毎月毎月、ひと月ずつ目で追うことができ、時間の経過に従って、順次、計画と実績の乖離と、前期実績と今期実績の差異の発生傾向を理解することができる。

【０３１６】

前期実績のグラフ３７６を上回って推移していた今期の実績グラフ３７７が、ある月から突然前期実績のグラフ３７６を下回りはじめて進展している、といった傾向を、ひと月ずつ目で追うことができ、時間経過に伴った推移傾向の情報を時間経過と共に得ることができる。

【０３１７】

アニメーション機能によるグラフ表示は、表示の順番が整理されて意図的に順次表示されており、固定的に表示されているグラフから得られる以上に推移傾向を実感することが

できる。
図３８の画面は、経過月までの今期実績のグラフ３７７を順次アニメーション表示し終わった状態を示している。
なお、前期・予算のグラフ３７５、３７６については、今期実績のグラフ３７７と同時に並行してアニメーション表示することもできる。
【０３１８】
予算と実績の差異を明確に認識するには、ＰＤＣＡサイクルの中のＣｈｅｃｋ（評価）機能の役割を果たしており、「事業計画書シミュレーションへ」のボタン３７８をクリック操作することにより、事業計画書シミュレーション機能の画面を表示してシミュレーションの見直しを行い、更新したシミュレーショングラフを確認することができる。
常時シミュレーションの見直しが可能であることから、スピーディーで有効なＡｃｔｉｏｎ（改善行動）を導き出すことが可能になる。
さらには、十分な会社数のデータ蓄積があれば、同業他社データ等との比較による数値、グラフ表示も可能である。
【０３１９】
次に、他のキー指標の提示例をいくつか説明する。
まず、図３９、図４０を参照して色分布分析のキー指標の提示例を説明する。
図３６のサブメニュー画面３６０の衣料品小売業向けに選定表示された色分布分析のアイコン３６２をクリック操作すると、キー指標提示部４２により、図３９に示す商品別営業所別色分布分析表３９０が表示のフロー（ストーリ）に沿ってアニメーション表示される。
図３９の商品別営業所別色分布分析表３９０には、ＳＴＡＲＴ（店舗順）ボタン３９１、ＳＴＡＲＴ（カテゴリ順）ボタン３９２が設けられている。商品別営業所別色分布分析表３９０は、縦軸が商品種別、横軸が営業所とされている。
【０３２０】
ＳＴＡＲＴ（店舗順）ボタン３９１がクリック操作されると、キー指標計算部５１は、ＤＢ３０からレジデータ、営業日報データ等を読み出して夫々の商品の売上高を算出し表示制御部６９に出力することで、商品別営業所別色分布分析表３９０の名古屋営業所の欄から１列ずつ縦に順次テンポよく、目標達成率の数値がアニメーション表示される。
レジデータ及び営業日報データ等については、会計仕訳に必要な毎日の合計売上高等のみではなく、毎日の商品別、営業所別、担当者別等の詳細データが読み出される。
【０３２１】
また、図３９の商品別営業所別色分布分析表３９０のＳＴＡＲＴ（カテゴリ順）ボタン３９２がクリック操作されると、キー指標計算部５１は、レジデータ、営業日報データ等のデータを読み出して夫々の商品の売上高を算出し表示制御部６９に出力することで、１行ずつ横に順次テンポよく、紳士スラックス部門等の欄に目標達成率の数値がアニメーション表示される。
【０３２２】
この場合、目標達成率の数値が１００％以上の場合には、売上高が「上位」であるものとして個々の欄（セル）の背景色が青色に表示され、目標達成率の数値が９０％以上１００％未満の場合には、売上高が「中位」であるものとして個々の欄（セル）の背景色が黄色に表示される。また、目標達成率の数値が９０％未満の場合には、売上高が「下位」であるものとして個々の欄（セル）の背景色が赤色に表示される。
【０３２３】
図３９の商品別営業所別色分布分析表３９０は、「紳士スラックス」と「紳士セーター」について「名古屋」の営業所から「松山」の営業所までアニメーション表示された後、続いて「紳士Ｔシャツ」について「名古屋」の営業所から「東京」の営業所まで、数値が順次アニメーション表示された状態を示している。
【０３２４】
即ち、図３９の商品別営業所別色分布分析表３９０は、ＳＴＡＲＴ（カテゴリ順）ボタ

ン３９２がクリック操作されて、各項目の欄（セル）に行方向に順番に数値が表示されるアニメーション表示が開始されて、途中まで進展した状態を示している。
図４０の商品別営業所別色分布分析表３９０は、その後アニメーション表示が進展して、全表示を終わった状態を示す図である。
【０３２５】
なお、この商品別営業所別色分布分析表３９０の場合、ＳＴＡＲＴ（店舗順）ボタン３９１では、１列ずつ縦に数値が順次テンポよくアニメーション表示され、ＳＴＡＲＴ（カテゴリ順）ボタン３９２では、１行ずつ横に数値が順次テンポよくアニメーション表示される。
【０３２６】
続いて、着目すべき営業所、カテゴリの部分に、「だ円印」や「矢印」が表示される。
ＳＴＡＲＴ（店舗順）ボタン３９１で、１列ずつ縦に営業所の順に表示させた場合には、該当する営業所及びカテゴリの部分の数値と、該当する営業所の合計の数値を比較して数値が５０％以上高い場合には「丸印」を表示する。
即ち、該当営業所の中でも、該当カテゴリが比較的良好であることを強調するものである。逆に数値が５０％以上低い場合には「矢印」を表示する。つまり該当「営業所」の中でも、該当カテゴリが比較的不良であることを強調するものである。
【０３２７】
ＳＴＡＲＴ（カテゴリ順）ボタン３９２で、１行ずつ横にカテゴリの順に数値を表示させた場合には、該当する営業所及びカテゴリの部分の数値と、該当するカテゴリの合計の数値を比較して５０％以上数値が高い場合には「だ円印」を表示する。
即ち、該当カテゴリの中でも、該当「営業所」が比較的良好であることを強調するものである。逆に、５０％以上数値が低い場合には「矢印」を表示する。つまり、該当「カテゴリ」の中でも、該当「営業所」が比較的不良であることを強調するものである。
【０３２８】
図４０の商品別営業所別色分布分析表３９０は、ＳＴＡＲＴ（カテゴリ順）ボタン３９２の操作で、１行ずつ横にカテゴリ順に表示された場合を示している。
商品別営業所別色分布分析表３９０では、例えば、「紳士コート」のカテゴリの合計の数値は１０１．９％であるが、「紳士コート」のカテゴリの「横浜」の営業所の数値は１７３．２％と５０％以上高いので「だ円印」で強調表示されている。
【０３２９】
同様に、「紳士コート」のカテゴリの「福岡」の営業所の数値は１５４．９％と５０％以上高いので「だ円印」で強調表示されている。
「紳士コート」に関して、「横浜」の営業所と「福岡」の営業所が比較的成績良好で健闘していることを強調している。
【０３３０】
逆に、「婦人スラックス」のカテゴリ合計の数値は「８６．２％」であるが、「婦人スラックス」のカテゴリの「松山」の営業所の数値は４２．７％と５０％以上低いので「矢印」で強調表示されている。「婦人スラックス」に関して、「松山」の営業所が比較的成績不良で苦戦していることを強調している。
【０３３１】
このように洋服小売店業等の業務に応じたキー指標として、商品別営業所別色分布分析表３９０をアニメーション表示し、店舗順、あるいはカテゴリ順に、数値を順次表示することによって、自店舗と他店舗との比較がより一層明確にできる。また自分の担当のカテゴリと他者の担当のカテゴリとの比較がより一層把握し易くなる。
【０３３２】
続いて、図４１を参照して人時売上高というキー指標の提示例を説明する。
例えば衣料品小売業の会社の各営業所での損益には、社員配置のローテーション効率が大きく影響してくると思われる。この種の企業の担当者であれば、労働効率を分析するため、図３６のサブメニュー画面３６０の衣料品小売業向けに選定表示された人時売上高グ

ラフのアイコン３６３をクリック操作する。
【０３３３】
人時売上高のアイコン３６３がクリック操作されると、キー指標提示部４２により、図４１に示す人時売上高グラフの画面４１０が表示のフロー（ストーリ）に沿ってアニメーション表示される。
【０３３４】
この際、キー指標提示部４２では、キー指標計算部５１が、ＤＢ３０から必要なデータ（今月の会計データ、タイムカードデータ等）を読み出して人時売上高を算出し、表示制御部６９へ出力することで、表示制御部６９により人時売上高グラフが順次アニメーション表示される。
タイムカードデータについては、給与計算に必要な社員別の１か月の合計就労時間等のみではなく、社員別の毎日の就労時間等の詳細データを読み出すものとする。
【０３３５】
具体的には、図４１の人時売上高グラフの画面４１０に設けられたＳＴＡＲＴボタン４１１がクリック操作されると、キー指標提示部４２は、アニメーション表示を開始し、１日の売上高の折れ線グラフ４１２、就労時間の棒グラフ４１３を、日を追ってアニメーション表示した後、人時売上高（売上高／就労時間）の折れ線グラフ４１４をアニメーション表示する。
【０３３６】
この人時売上高グラフでは、人時売上高の折れ線グラフ４１４が、例えば「２日」、「３日」と順次表示されたとき、「３日」については人時売上高の数値が低いため（例えば予め下限の閾値として設定された（金額）である３０００円未満の場合）、予め準備されている吹き出し４１５が表示される。
【０３３７】
同様に、「８日」については人時売上高の数値が高いため（例えば予め上限の閾値として設定された数値（金額）である４５００円以上の場合）、予め準備されている別の吹き出し４１６が表示されている。
【０３３８】
なお、図４１の人時売上高グラフの画面４１０は、アニメーション表示が順次１日ずつ時系列に従って進展しながら、グラフと吹き出しが適宜表示され、経過日までの表示が終わった状態を示している。
【０３３９】
このようにこのキー指標の提示例によれば、グラフが順次表示されて行くことにより、時間の経過とともに生産性がどのように変遷して来たかを印象的に確認することができる。適時「吹き出し」が表示されるので、表示された数値の発生原因がその都度認識できる。
【０３４０】
上記実施形態では、図９、図１０の月次損益推移表の表示例のように、収益から費用を控除して利益を算出し、さらには営業外項目、特別項目を加減算して算出するという損益構造の流れに沿って数値アニメーション表示したり、また、図１１、図１２のＳＴＲＡＣ表の表示例のように、収益から変動費を控除して粗利益を算出し、さらに固定費を控除して営業利益を算出すという損益構造の流れに沿って数値をアニメーション表示したが、これらの表示例は一例であり、これ以外にも様々な因果関係に基づく数値群の表示方法が考えられるが、何れにしても複数の数値群の夫々の因果関係に基づく順番で数値群を提示すれば足りる。
【０３４１】
なお、会計ソフトデータ、税務計算ソフトデータ、銀行データ、カード会社データ、通販会社データ、タイムカードデータ、レジデータ、会社作成データ等の会計データを取り込むデータ取得部の機能については既存の技術を利用してもよい。
また、金融機関、決済期間、証券会社や、証明書申請等に係るような行政機関、補助金申請等に係る政府機関等との連携により、直接データやフォームの取得を行ってもよい。

【０３４２】
上記実施形態では、図３７、図３８のように売上高と営業利益との関係から売上高営業利益率というキー指標を、時系列の順にアニメーション表示する例や、図３９、図４０のように商品別営業所別にした表で色分布を売上高実績の目標に対する比率をキー指標にして営業所の順や商品のカテゴリの順にアニメーション表示する例や、図４１のように売上高と就労時間との関係から人時売上高という独自のキー指標を、時系列の順にアニメーション表示する例を説明したが、これ以外にも様々な情報の組み合わせでキー指標を導出し、計算や説明（ストーリ）の流れの順にアニメーション表示してもよい。また、時系列の順や説明（ストーリ）の流れの順を組み合わせてデータの推移が分かり易い順序で表示してもよい。即ち、業務に応じたキー指標を提示すればよい。

【０３４３】
上記実施形態では、キー指標を、例えば図４１の人時売上高推移グラフ４１０等で表示する例について説明したが、この他、キー指標を、表の形態で表示してもよく、表については、数値が挿入されるセルの色を変える等してアニメーション表示してもよい。

【０３４４】
上記実施形態では、数値群を、例えば１月、２月、３月等…の順（期間の順）にグラフ又は表の形態でアニメーション表示する例を示した。その他、紙ページをめくるイメージやパラパラマンガ風の表示、動画等によるアニメーション表示が考えられる。アニメーション表示されるグラフや表は、何れも２次元表示であったが、バーチャルリアリティ空間等の立体空間に立体的に表示してもよい。またアニメーション表示の進展とともに、ストーリ性を喚起するためのＢＧＭミュージック等の音声を流してもよい。
即ち本発明は、表示環境に限定されず、数値群をアニメーション表示できればよい。

【０３４５】
上記図４１の画面の例では、人時売上高推移グラフ４１０に、所定期間に業務全体として得られる売上高と、業務に従事する全従業員の就労時間と人時売上高とを同じ画面に並べて（対応させて）表示したが、売上高と就労時間の両方を表示することは必須ではなく、そのうち一方を人時売上高に対応させて表示してもよい。また３つの折れ線グラフを別々の画面に表示してもよい。つまり、キー指標として、人時売上高の折れ線グラフ４１４を表示すれば足りる。

【０３４６】
また、例えば、上述した一連の処理は、ハードウェアにより実行させることもできるし、ソフトウェアにより実行させることもできる。
換言すると、図３の機能的構成は例示に過ぎず、特に限定されない。
即ち、上述した一連の処理を全体として実行できる機能が情報処理システムに備えられていれば足り、この機能を実現するためにどのような機能ブロック及びデータベースを用いるのかは特に図３の例に限定されない。また、機能ブロックの存在場所も、図３に特に限定されず、任意でよい。例えば、サーバ２の機能ブロック及びデータベースを管理者端末３に移譲させてもよい。また、一つの機能ブロック及びデータベースは、ハードウェア単体で構成してもよいし、ソフトウェア単体で構成してもよいし、それらの組み合わせで構成してもよい。

【０３４７】
また例えば、一連の処理をソフトウェアにより実行させる場合には、そのソフトウェアを構成するプログラムが、コンピュータ等にネットワークや記録媒体からインストールされる。コンピュータは、専用のハードウェアに組み込まれているコンピュータであってもよい。また、コンピュータは、各種のプログラムをインストールすることで、各種の機能を実行することが可能なコンピュータ、例えば管理サーバの他汎用のスマートフォンやパーソナルコンピュータであってもよい。
具体的には、コンピュータは、スマートフォンやパーソナルコンピュータは元より、例えばタブレット、テレビジョン、プロジェクションマッピングを行う機器であってもよい。また家庭用電気器具や車両等に取り付けて利用するＩｏＴ機器等であってもよい。

【０３４８】
　また例えば、このようなプログラムを含む記録媒体は、プログラムを提供するために装置本体とは別に配布される図示せぬリムーバブルメディアにより構成されるだけでなく、装置本体に予め組み込まれた状態で提供される記録媒体等であってもよい。
【０３４９】
　なお、本明細書において、記録媒体に記録されるプログラムを記述するステップは、その順序に沿って時系列的に行われる処理はもちろん、必ずしも時系列的に処理されなくとも、並列的或いは個別に実行される処理をも含むものである。
　また、本明細書において、システムの用語は、複数の装置や複数の手段等より構成される全体的な装置を意味するものとする。
【０３５０】
　即ち、本発明が適用される情報処理装置（例えば図３のサーバ１等）は、
　複数の数値群の夫々の因果関係に基づく順番で前記数値群を提示する提示手段（例えば図３の数値群提示部４３等）、
　を備える。
　このように情報処理装置（例えば図３のサーバ１等）を構成し、思考の流れを整理して、数値と結果の因果関係にストーリ性を加味して表現することで、例えば企業の経営者等がこれからの企業の活動方針や方向性等を打ち出しやすくなる。
　前記提示手段は、
　企業における業務処理のデータとして会計処理に関する数値群を出力する手段と、
　前記数値群を、前記因果関係の順又は前記因果関係に起因する期間の順にアニメーション表示する表示制御手段、
　を備える。
　このように、会計処理に関する数値群を因果関係の順にアニメーション表示することで、例えば企業の業務実態がよく分かり、今後の企業の活動方針や方向性等を打ち出しやすくなる。
　前記提示手段（例えば図３の数値群提示部４３等）は、
　業務における所定期間毎（月毎等）の予算と実績との差異又は２期分の実績どうしの差異（今期と前期の差異等）を計算した結果として前記数値群を得る予算実績計算手段（例えば図３の予算実績計算部６１等）と、
　前記予算実績計算手段により得られた前記数値群を、月毎等の期間の順（６月、７月、８月…等のように）にグラフ又は表の形態でアニメーション表示する表示制御手段（例えば図３の表示制御部６９等）と、
　を備える。
　これにより、グラフや表の動きから月次毎の予算と実績との差異がどのように推移しているか、あるいは前期と比べて今期の成績の良し悪しを見定めることができるので、適切な業務修正が可能になる。
　前記提示手段（例えば図３の数値群提示部４３等）は、
　過去２期分（前期と前々期等）の会計データに基づいて、過去の所定期間（１年分）のキャッシュ増減額を通期分（１年間分）計算して前記数値群とする過去キャッシュ計算手段（例えば図３の過去キャッシュ計算部６２等）と、
　前記過去の勘定項目毎のキャッシュ増減額に基づいて、指定された今期の目標キャッシュ獲得額を達成するための勘定項目毎の必要キャッシュ額を計算して前記数値群とする今期キャッシュ計算手段（例えば図３の今期キャッシュ計算部６３等）と、
　前記過去の勘定項目毎のキャッシュ増減額又は前記今期の目標キャッシュ獲得額のうち指定された前記数値群（キャッシュ増減額）を、勘定項目の順（表の縦に並ぶ項目順）にアニメーション表示する表示制御手段（例えば図３の表示制御部６９等）と、
　を備える。
　これにより、このままでは今期の期末にこれくらいの数値になるため、過去の状況と合わせるためにはこれくらい修正しなければならない、等といったことがアニメーションで

わかるので、正しい方向への業務修正を行うことができる。
前記提示手段（例えば図３の数値群提示部４３等）は、
所定期間（１年間）で達成すべき事業目標額（例えば目標売上高、目標キャッシュ額等を含む）に基づいて、前記所定期間（１年間）を単位期間（１か月毎）に区画し、既に経過した経過期間と未経過期間に分けた事業計画の詳細データを生成する事業計画生成手段（例えば図３の事業計画生成部６５等）と、
前記事業計画生成手段により生成された前記事業計画のデータのうち、前記経過期間と前記未経過期間の少なくとも一方のデータを、勘定項目の順と期間の順（１月、２月、３月…の順）の少なくとも一方の順にアニメーション表示する表示制御手段（例えば図３の表示制御部６９等）と、
を備える。
このように所定期間（１年間）の事業計画書のデータを単位期間毎（例えば月毎）に分けて経過期間と未経過期間との少なくとも一方をシミュレーションすることで、事業が所定期間で計画通り達成するように業務戦術を練った上で今後の事業計画を策定することができる。
前記提示手段（例えば図３の数値群提示部４３等）は、
企業が活動する中で、単位期間（１日単位）で変動する要因を含む、例えば現金預金残高、売掛金残高、借入金残高、水道光熱費発生額等の数値群を単位期間毎に集計する集計手段（例えば図３の日毎データ集計部６５等）と、
前記集計手段により前記単位期間（１日単位）毎に集計された前記数値群を前記単位期間の順にアニメーション表示する表示制御手段（例えば図３の表示制御部６９等）と、
を備える。
これにより、変動要因を含む数値群（例えば現金預金残高、売掛金残高、借入金残高、水道光熱費発生額等）を単位期間（１日単位）毎に集計して、所定期間分、例えば３６５日分の推移を表すキャッシュ残高推移表をアニメーション表示することで、銀行の現金預金残高、売掛金残高、借入金残高、水道光熱費発生額等の日毎の変化（推移）を把握することができ、数日後等に資金不足に陥ったり水道を止められる等の前に銀行の現金預金残高を増やしたり、水道光熱費の引き落とし先の金融機関の預金残高を増やしておく等の手当てをすることができる。
前記提示手段（例えば図３の数値群提示部４３等）は、
利益額、課税所得額等の会計データ、税務データから年間の予測税額を計算した結果として前記数値群を得る税額計算手段（例えば図３の税額計算部６６等）と、
前記税額計算手段により得られた前記数値群を、税額算出根拠の流れに従った項目順にアニメーション表示する表示制御手段（例えば図３の表示制御部６９等）と、
を備える。
これにより、税額算出の根拠を理解しながら年間の予測税額等を確認でき、さらには前期の年間税額等と比較しながら、今期の納税戦略を策定することができる。
前記提示手段（例えば図３の数値群提示部４３等）は、
前々期、前期、今期の売上高や利益額の月次推移額等の会計データから年計額を計算した結果として前記数値群を得る年計額計算手段（例えば図３の推移計算部６７等）と、
前記年計額計算手段により得られた前記数値群を、年計グラフの月の順に配置して、折れ線グラフが横軸方向に伸びるようにアニメーション表示する表示制御手段（例えば図３の表示制御部６９等）と、
を備える。
これにより、年計グラフを１か月毎に表示させることによって、毎月右上がりに進展するのか、右下がりに進展するのかを視覚的に簡単に確認でき、会社の経営の好調不調を期中いつでも印象的に認識することができる。
さらには、先に表示されているシミュレーショングラフとのグラフの重なり具合を、毎月ひと月ずつ目で追うことができるので、時間の経過に従って、順次、計画と実績の乖離を理解することができ、早急な改善行動を打ち出すことができる。

前記提示手段（例えば図３の数値群提示部４３等）は、
前期、今期の会計データから、費用推移の計算に必要な費用項目の月次推移額等のデータを読み出して、前期数値、今期数値、差異額を算出して数値群を得る月次推移計算手段（例えば図３の推移計算部６７等）と、
前記月次推移計算手段により得られた前記数値群を、費用推移グラフの月の順に配置して、折れ線グラフが横軸方向に伸びるようにアニメーション表示する表示制御手段（例えば図３の表示制御部６９等）と、
を備える。
これにより、予算、前期、実績の順番等で１か月毎の数値を表示させ、差異を表示させることによって、費用発生の傾向を視覚的に印象的に認識することができる。
さらには、先に表示されている予算、前期のグラフとのグラフの重なり具合を見ることができ、時の経過に従って予算や前期との比較をすることが可能になる。
【０３５１】
また、本発明が適用される情報処理装置（例えば図３のサーバ１等）は、
業務に応じたキー指標を提示する第２提示手段（例えば図３のキー指標提示部４２等）、を備える。
このように業務に応じたキー指標を提示することにより、その業務の状況が一目で分かるので、今後の業務の方針や方向性等を出し易くなる。
前記第２提示手段（例えば図３のキー指標提示部４２等）は、
前記キー指標を、グラフ（例えば図４１の人時売上高推移グラフ４１０等）又は表の形態で表示する表示制御手段（例えば図３の表示制御部５２等）、
を備える。
これにより、キー指標の変化や動き等が分かり易くなるので、今後の業務の方針や方向性等を出し易くなる。即ちキー指標をグラフや図表等を表示することで、経営戦略に活用することができるようになる。
前記表示制御手段（例えば図３の表示制御部５２等）は、
前記キー指標を、時系列の順又は計算（説明）の流れの順にアニメーション表示（例えば図４１の人時売上高推移グラフ４１０（折れ線グラフや棒グラフ等）をアニメーション表示）する。
これにより、キー指標が単なる数値等ではなく意味を持つ情報となるので、それを提示することで、キー指標という情報を重く受け止めることができようになる。
前記表示制御手段（例えば図３の表示制御部５２等）は、
前記キー指標の算出元のデータを前記キー指標に対応させて表示する。
これにより、キー指標の算出元のデータとキー指標との関係性がわかるようになり、業務改善の方向性を出し易くなる。
具体的には、表示制御部５２は、所定期間に業務全体として得られる売上高と、前記業務に従事する全従業員の就労時間のうち少なくとも一方を、前記従業員１人の単位時間あたりの売上高（例えば人時売上高等）に対応させて表示する。
このように業務全体として得られる売上高と、全従業員の就労時間と、従業員１人の単位時間あたりの売上高（例えば人時売上高等）とを対応させて表示することで、キー指標として人時売上高の推移と就労時間と売上高との関係がよくわかるようになる。
例えば従業員の就労時間が多かった日や月は売上高が伸びているとか、人時売上高が低い日は、どういった業務が多かったからなのか等と、業務課題を浮かび上がらせることができる。
前記第２提示手段（例えば図３のキー指標提示部４２等）は、
従業員１人の単位時間あたりの売上高（例えば図４１の人時売上高推移グラフ４１０の折れ線グラフ４１４やその値等）を、前記キー指標として提示する。
従業員１人の単位時間あたりの売上高（例えば図４１の人時売上高推移グラフ４１０の折れ線グラフ４１４の値等）の推移をみることで、業務が労働力に見合った売り上げとなっているかを判断することができる。

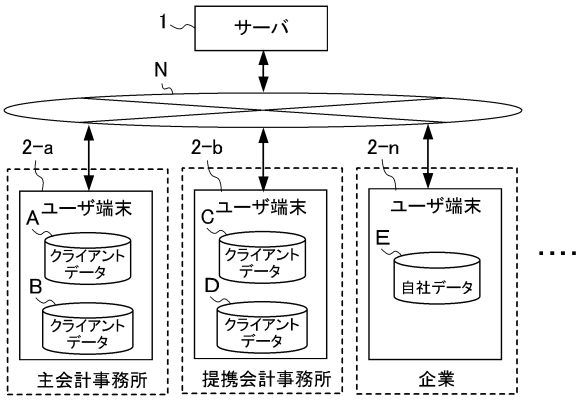
前記第２提示手段（例えば図３のキー指標提示部４２等）は、
前記従業員１人の単位時間あたりの売上高（例えば図４１の人時売上高推移グラフ４１０の折れ線グラフ４１４やその値等）を、所定期間に業務全体として得られる売上高（折れ線４１１の値）を前記所定期間の全従業員の就労時間（棒グラフ４１２の値）で割って求める計算手段（例えば図４のキー指標計算部５１等）、
を備える。
このように所定期間に業務全体として得られる売上高（折れ線４１１の値）を所定期間の全従業員の就労時間（棒グラフ４１２の値）で割って求めた従業員１人の単位時間あたりの売上高をキー指標に用いることで、労働力に対して適切な売り上げが上がっているかどうかを判断することができ、今後の業務の改善等に生かすことができる。

【符号の説明】

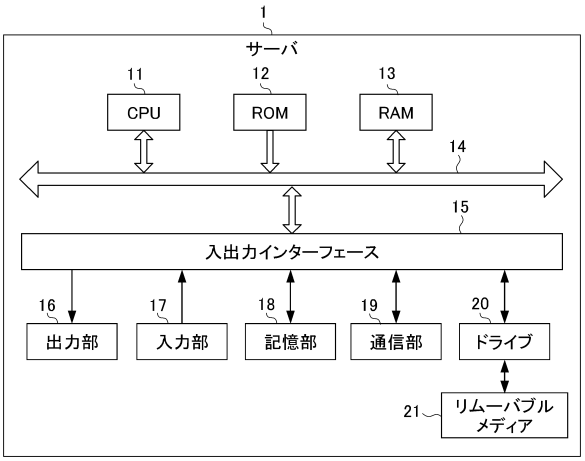
【０３５２】
１・・・サーバ、２－ａ、２－２ｂ、２－ｎ・・・ユーザ端末、Ｎ・・・ネットワーク、４１・・・データ取得部、４２・・・キー指標提示部、４３・・・数値群提示部、５１・・・キー指標計算部、６１・・・予算実績計算部、６２・・・過去キャッシュ計算部、６３・・・今期キャッシュ計算部、６４・・・事業計画生成部、６５・・・日毎データ集計部、６６・・・税額計算部、６７・・・推移計算部、６８・・・計算部、５２、６９・・・表示制御部

【図面】

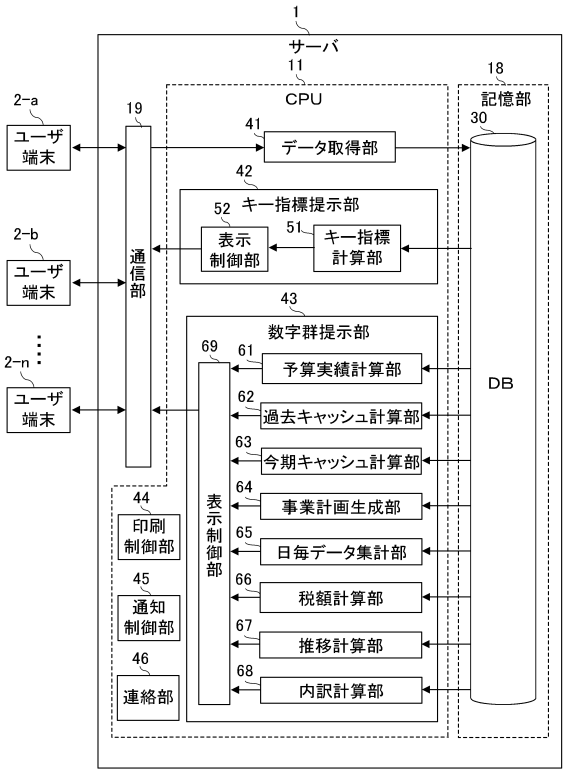
【図１】


1
サーバ
N
2−a
2−b
2−n
A
ユーザ端末
クライアントデータ
B
クライアントデータ
C
ユーザ端末
クライアントデータ
D
クライアントデータ
ユーザ端末
E
自社データ
主会計事務所
提携会計事務所
企業

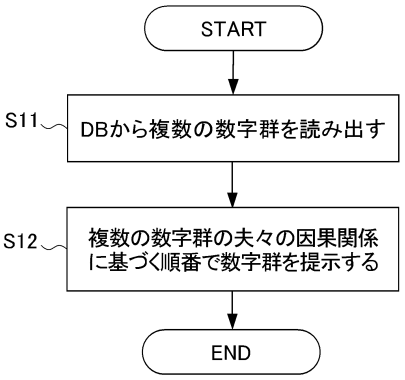
【図２】


1
サーバ
11
CPU
12
ROM
13
RAM
14
15
入出力インターフェース
16
出力部
17
入力部
18
記憶部
19
通信部
20
ドライブ
21
リムーバブルメディア

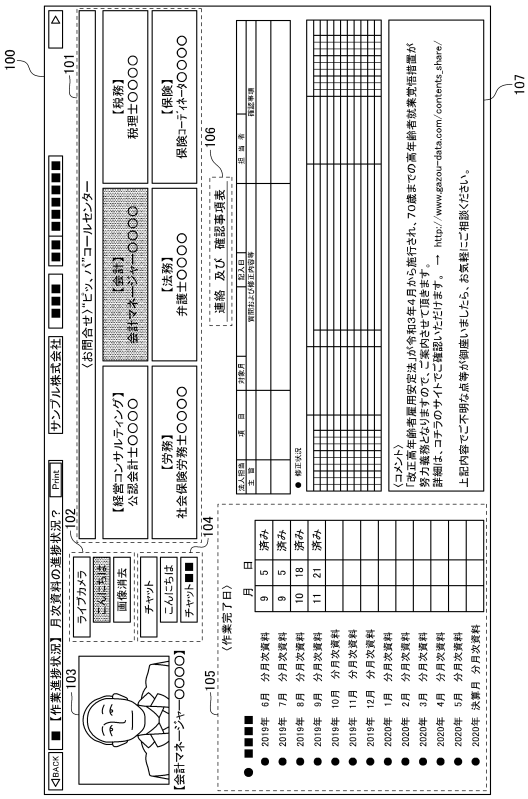
【図３】


1
サーバ
11
CPU
18
記憶部
30
2−a
ユーザ端末
19
通信部
41
データ取得部
42
キー指標提示部
52
表示制御部
51
キー指標計算部
2−b
ユーザ端末
43
数字群提示部
69
61
予算実績計算部
62
過去キャッシュ計算部
63
今期キャッシュ計算部
64
事業計画生成部
65
日毎データ集計部
66
税額計算部
67
推移計算部
68
内訳計算部
DB
2−n
ユーザ端末
表示制御部
44
印刷制御部
45
通知制御部
46
連絡部

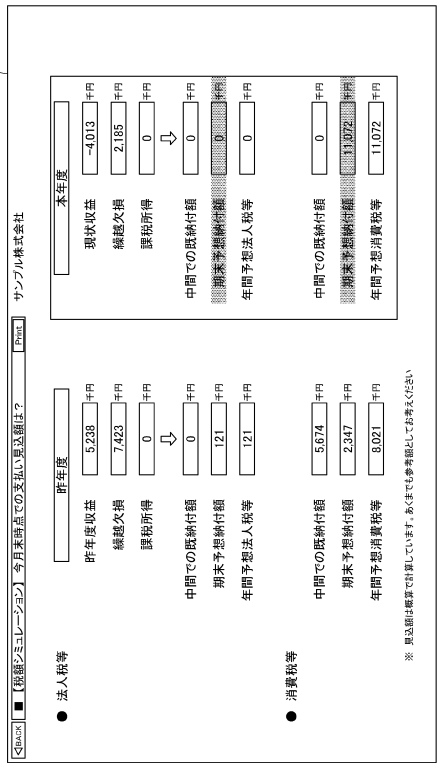
【図４】


START
S11
DBから複数の数字群を読み出す
S12
複数の数字群の夫々の因果関係に基づく順番で数字群を提示する
END

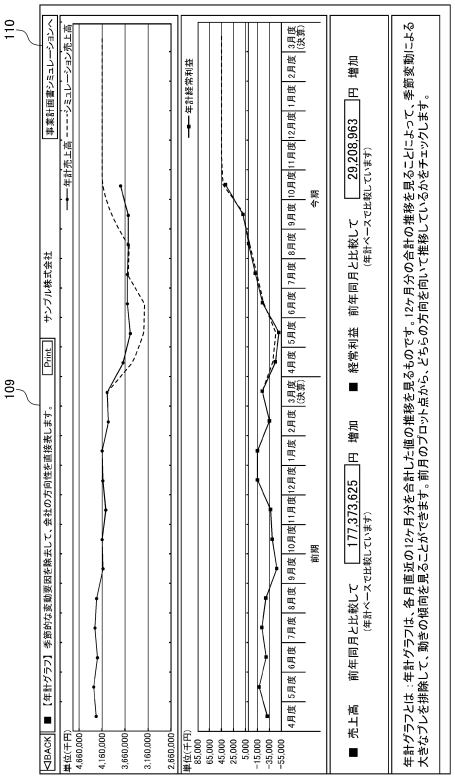
【図５】


100
101
102
103
104
105
106
107
<BACK
【作業進捗状況】月次資料の進捗状況？
Print
サンプル株式会社
ライブカメラ
こんにちは
画像消去
チャット
こんにちは
チャット
〈お問合せ/ヒヤッ、バ〜コールセンター〉
【経営コンサルティング】
公認会計士○○○○
【会計】
会計マネージャー○○○○
【税務】
税理士○○○○
【労務】
社会保険労務士○○○○
【法務】
弁護士○○○○
【保険】
保険コーディネーター○○○○
【会計マネージャー○○○○】
〈作業完了日〉
連絡 及び 確認事項表
月 日
2019年 6月 分月次資料
2019年 7月 分月次資料
2019年 8月 分月次資料
2019年 9月 分月次資料
2019年 10月 分月次資料
2019年 11月 分月次資料
2019年 12月 分月次資料
2020年 1月 分月次資料
2020年 2月 分月次資料
2020年 3月 分月次資料
2020年 4月 分月次資料
2020年 5月 分月次資料
2020年 決算月 分月次資料

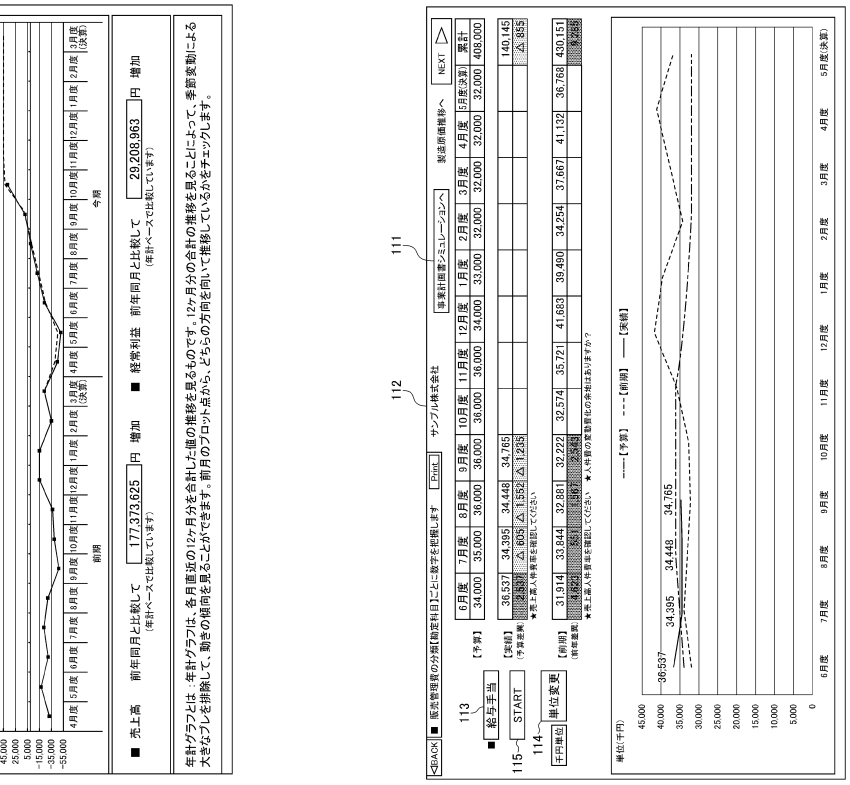
【図６】


108
<BACK
【役員シミュレーション】今月末時点での支払い見込額は？
Print
サンプル株式会社
● 法人税等
昨年度
本年度
昨年度収益 5,238 千円
繰越欠損 7,423 千円
課税所得 0 千円
中間での既納付額 0 千円
期末予想納付額 121 千円
年間予想法人税等 121 千円
現状収益 −4,013 千円
繰越欠損 2,185 千円
課税所得 0 千円
中間での既納付額 0 千円
期末予想納付額 0 千円
年間予想法人税等 0 千円
● 消費税等
中間での既納付額 5,674 千円
期末予想納付額 2,347 千円
年間予想消費税等 8,021 千円
中間での既納付額 0 千円
期末予想納付額 11,072 千円
年間予想消費税等 11,072 千円
※ 見込額は概算で計算しています。あくまでも参考額としてお考えください

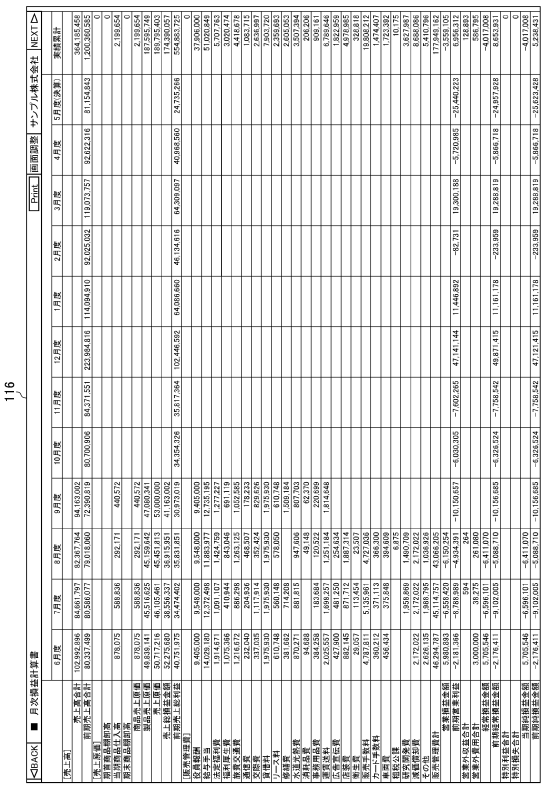
【図７】


110
109
<BACK
【年計グラフ】季節的な変動原因を除去して、会社の方向性を直接表します。
Print
サンプル株式会社
事業計画書シミュレーションへ
単位:(千円)
年計売上高 ----シミュレーション売上高
4,660,000
4,160,000
3,660,000
3,160,000
2,660,000
年計経常利益
85,000
65,000
45,000
25,000
5,000
-15,000
-35,000
-55,000
4月度 5月度 6月度 7月度 8月度 9月度 10月度 11月度 12月度 1月度 2月度 3月度(決算)
前期
4月度 5月度 6月度 7月度 8月度 9月度 10月度 11月度 12月度 1月度 2月度 3月度(決算)
今期
■ 売上高 前年同月と比較して 177,373,625 円 増加
(年計ベースで比較しています)
■ 経常利益 前年同月と比較して 29,208,963 円 増加
(年計ベースで比較しています)
年計グラフとは：年計グラフは、各月直近の12ヶ月分を合計した値の推移を見るものです。12ヶ月分の合計の推移を見ることによって、季節変動による大きなブレを排除して、動きの傾向を見ることができます。前月のプロット点から、どちらの方向を向いて推移しているかをチェックします。

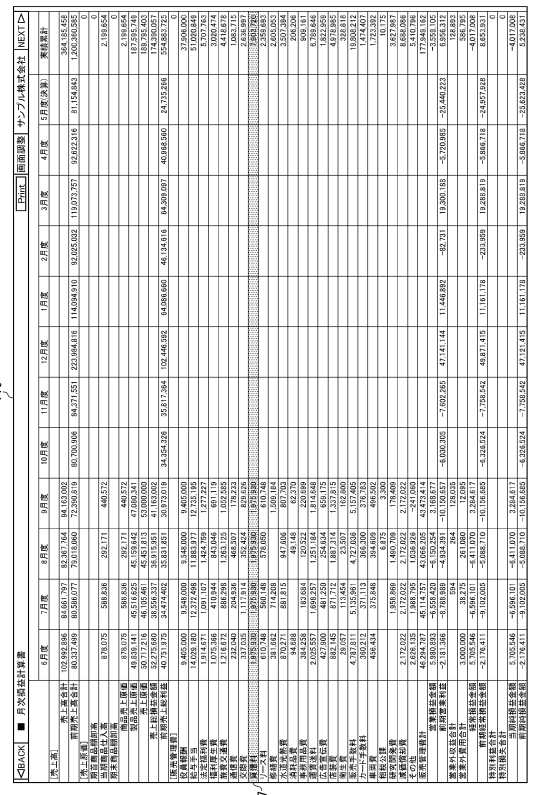
【図８】


111
112
113
114
115
<BACK
【販売管理費の分類勘定科目ごとに数字を把握します
Print
サンプル株式会社
事業計画書シミュレーションへ
製造原価推移へ
NEXT
6月度 7月度 8月度 9月度 10月度 11月度 12月度 1月度 2月度 3月度 4月度 5月度(決算) 累計
【予算】 34,000 35,000 36,000 36,000 36,000 34,000 33,000 32,000 32,000 32,000 32,000 400,000
■給与手当
【実績】 36,537 34,395 34,448 34,765 140,145
【予算差異】 2,537 △ 605 △ 1,552 △ 1,235 △ 855
■売上高に対する給与手当の割合いくら？
START
単位変更
【前期】 31,914 33,844 32,881 32,222 32,574 35,721 41,683 39,490 34,254 37,667 41,132 36,768 430,151
【前期差異】 1,914 844 881 222 574 721 1,683 1,490 254 667 1,132 768 10,288
■売上高に対する給与手当の割合いくら？
千円単位
-----【予算】 ---【前期】 ——【実績】
単位:(千円)
45,000
40,000
35,000
30,000
25,000
20,000
15,000
10,000
5,000
0
36,537
34,395
34,448
34,765
6月度 7月度 8月度 9月度 10月度 11月度 12月度 1月度 2月度 3月度 4月度 5月度(決算)

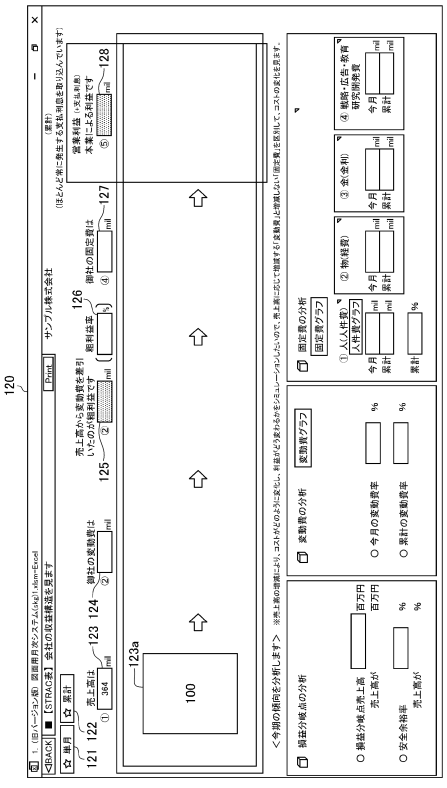
【図９】



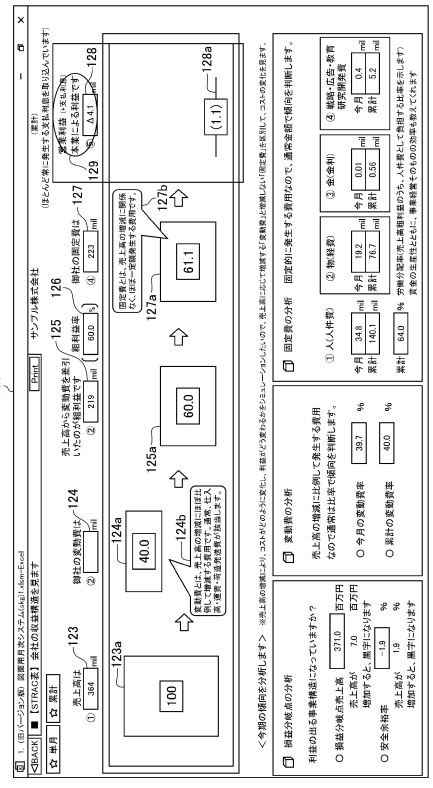
【図１０】



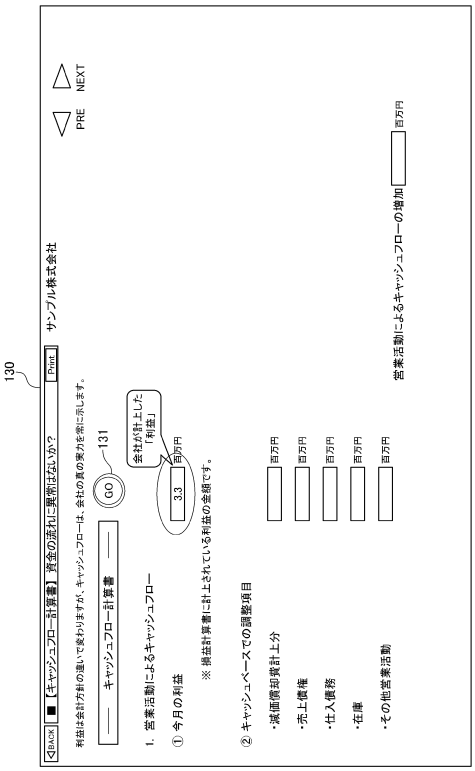
【図１１】



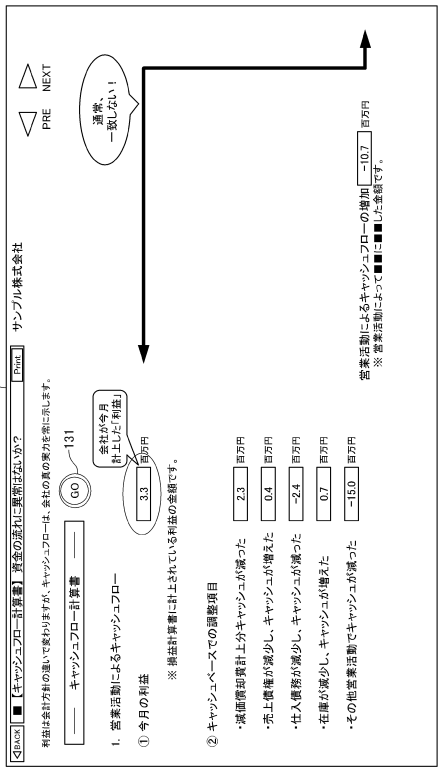
【図１２】



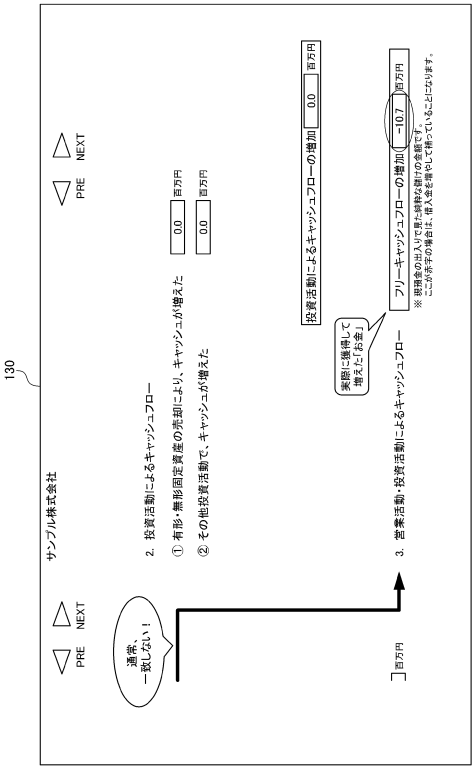
【図１３】



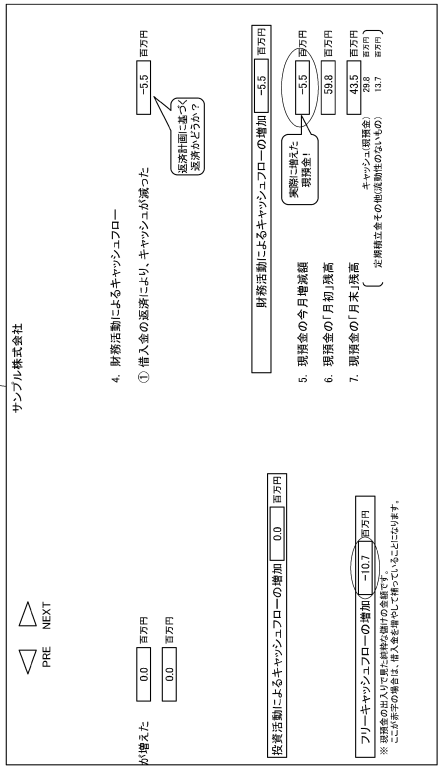
【図１４】



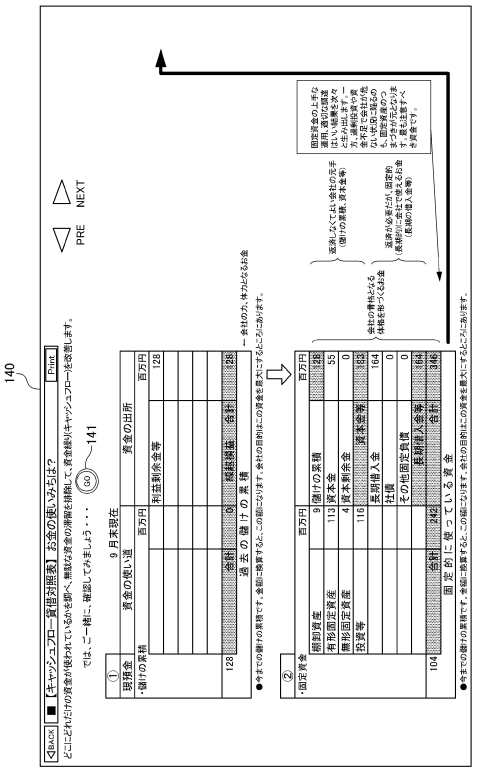
【図１５】



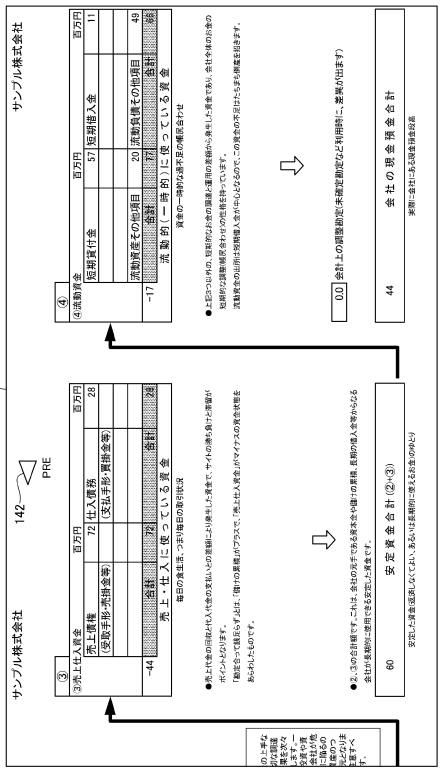
【図１６】



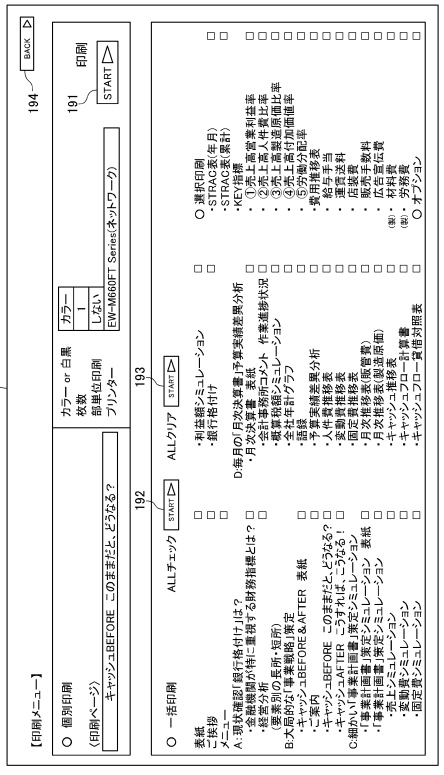
【図１７】



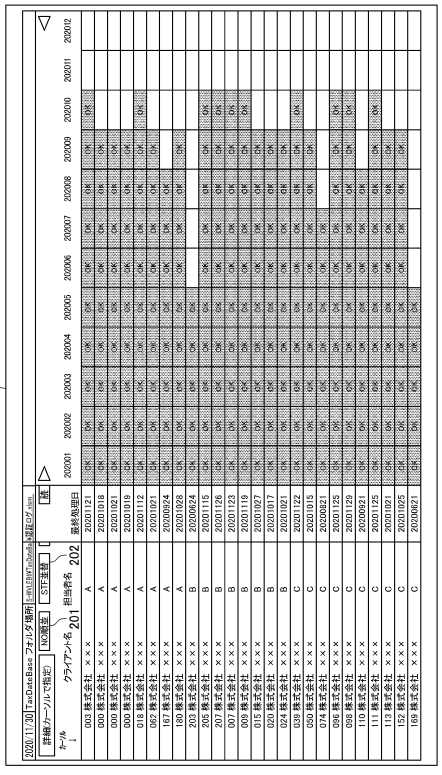
【図１８】



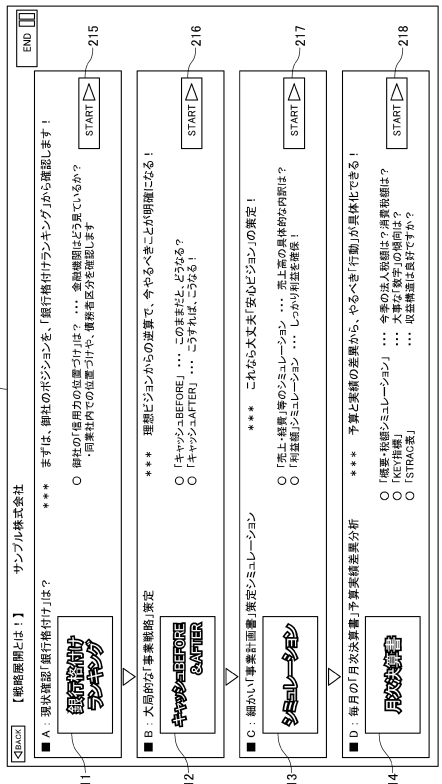
【図１９】



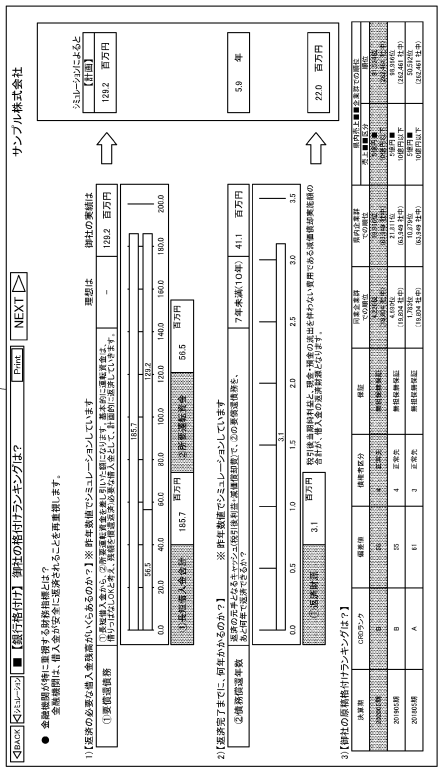
【図２０】



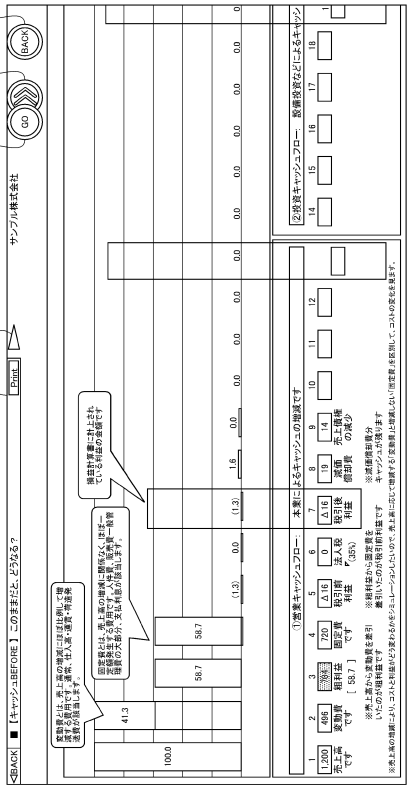
【図２１】



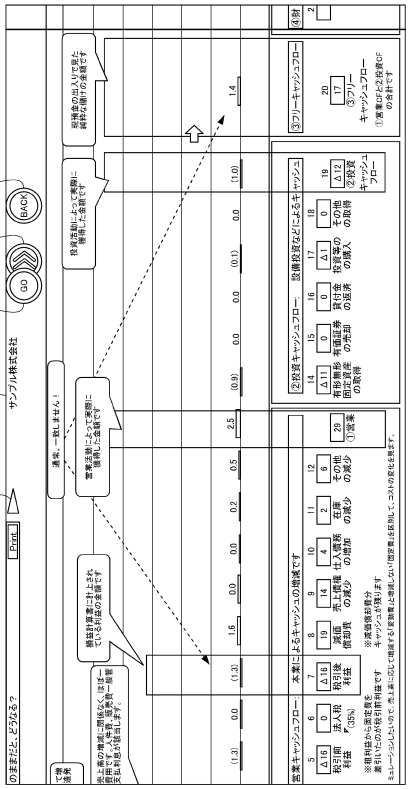
【図２２】



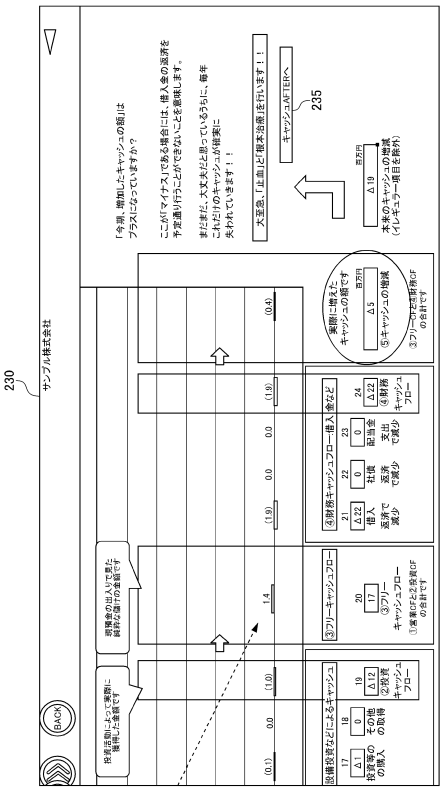
【図２３】



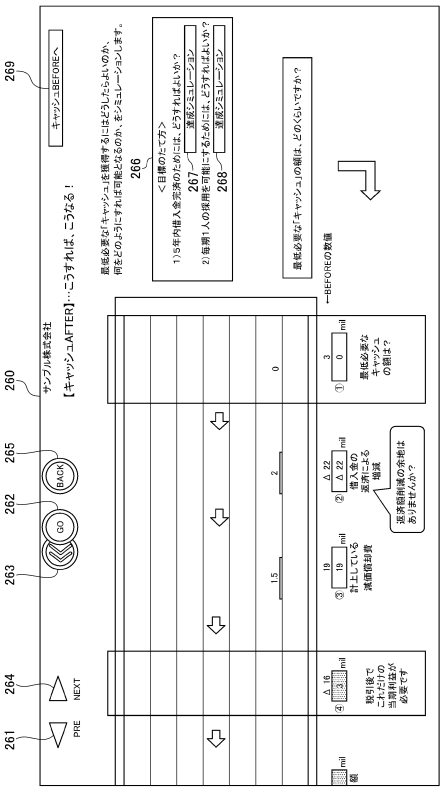
【図２４】



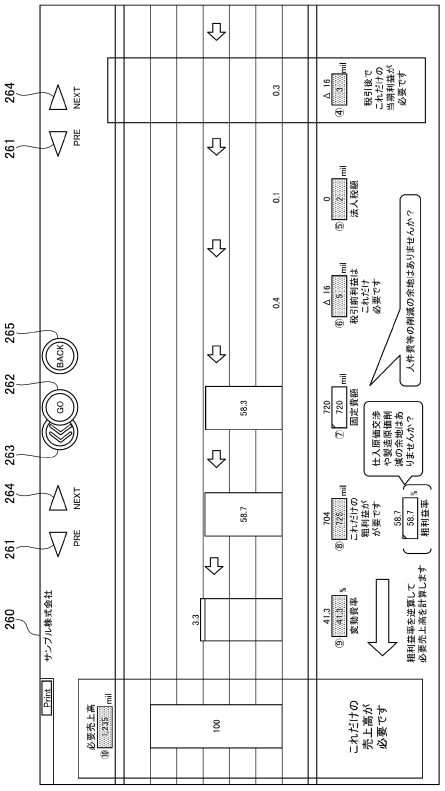
【図２５】



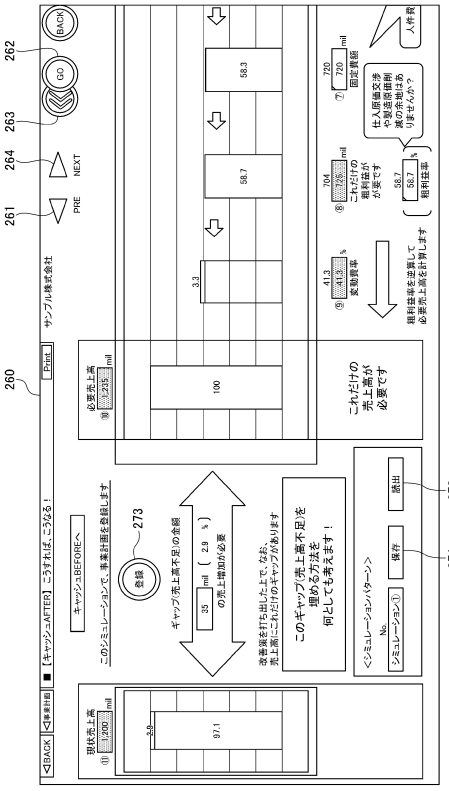
【図２６】



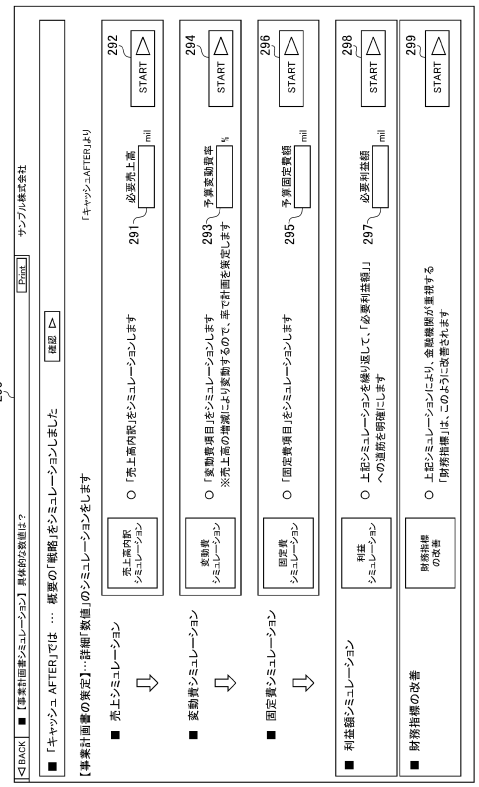
【図２７】



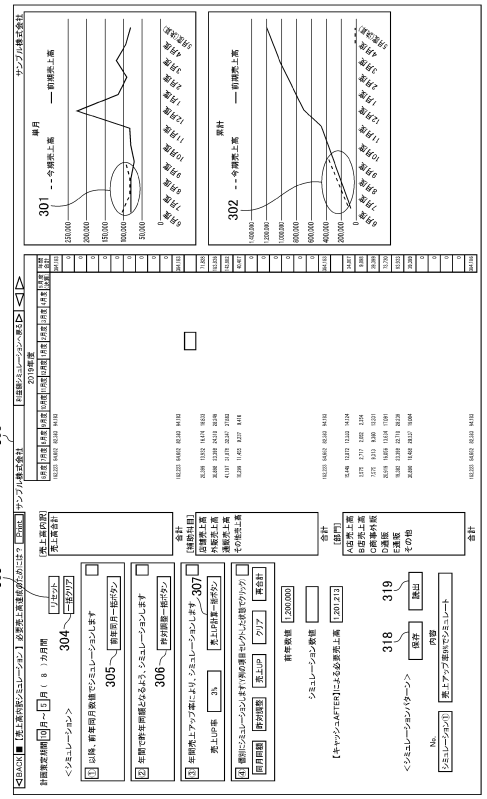
【図２８】



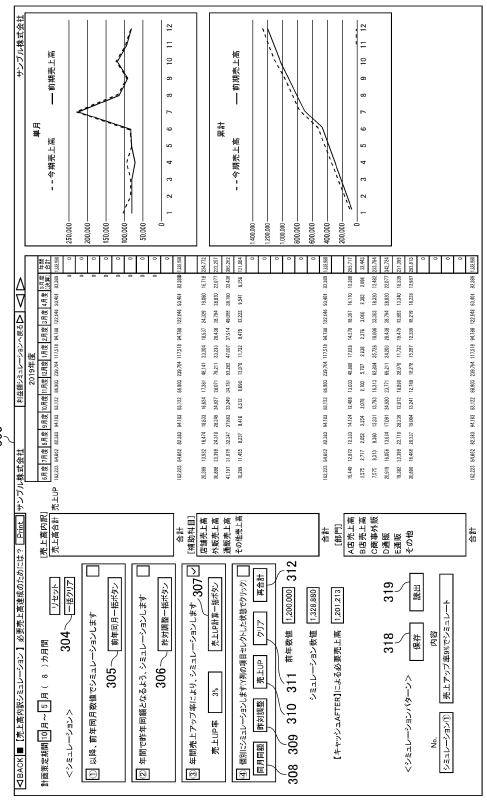
【図２９】



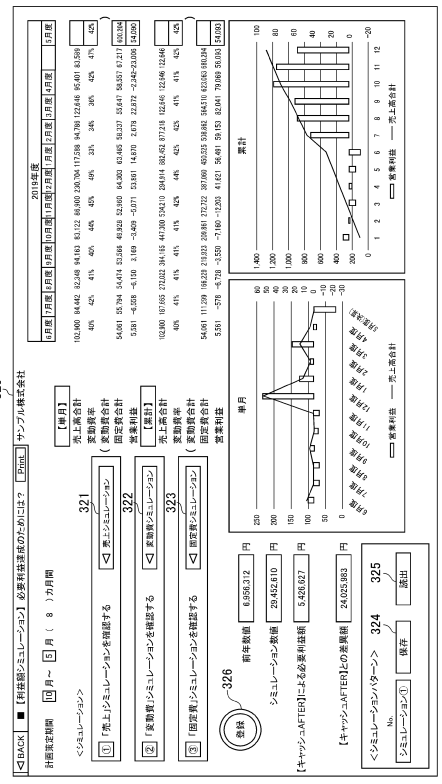
【図３０】



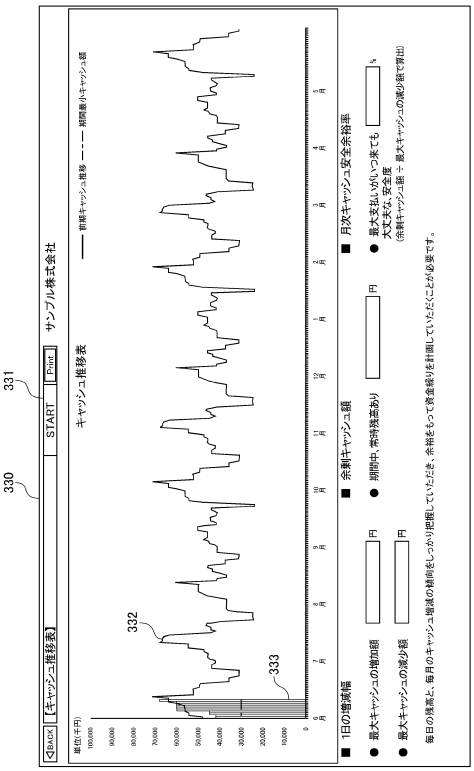
【図３１】



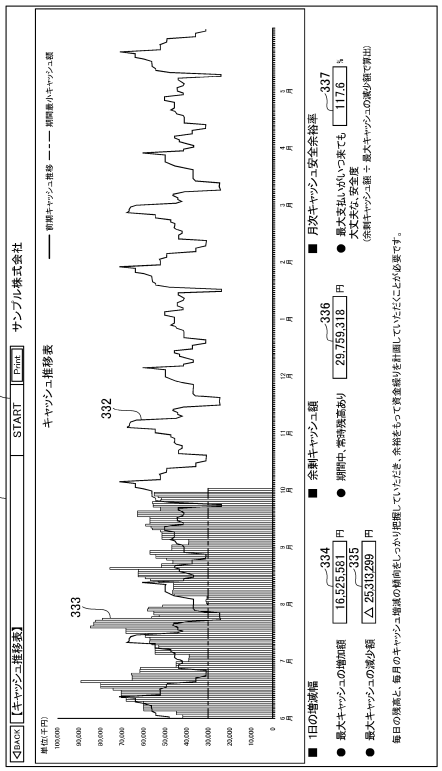
【図３２】



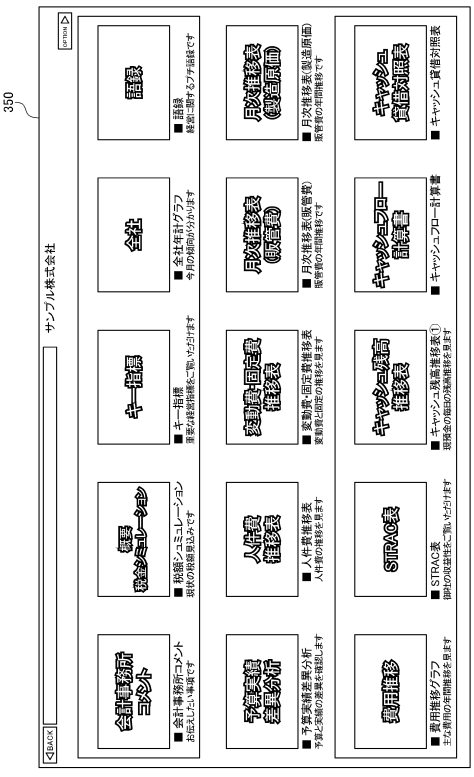
【図３３】



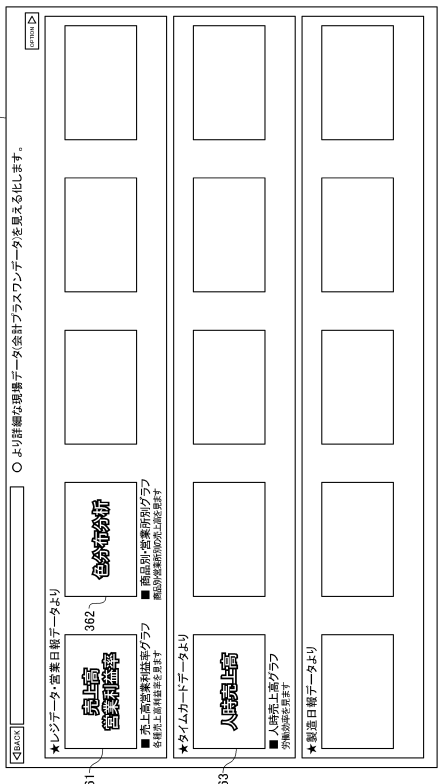
【図３４】



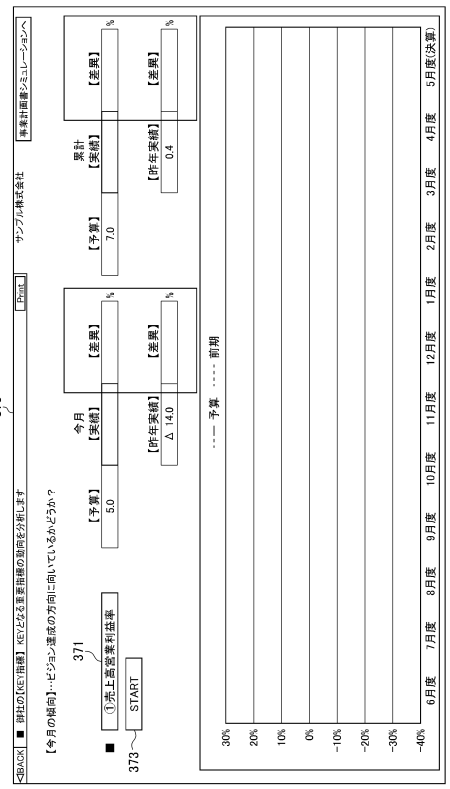
【図３５】



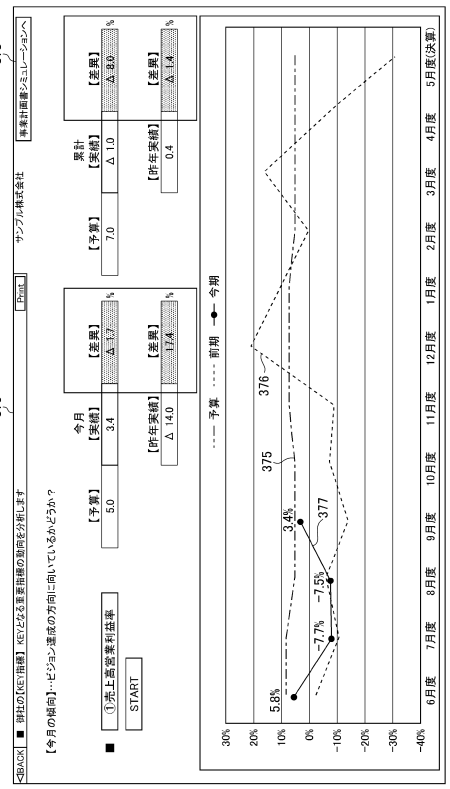
【図３６】



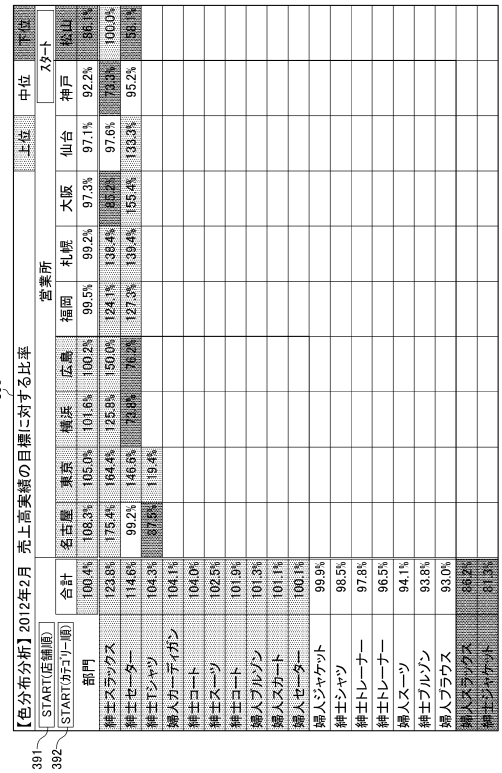
【図３７】



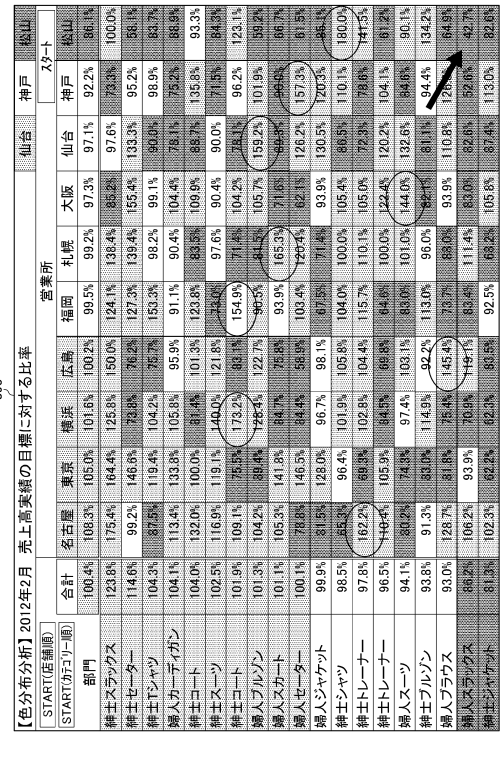
【図３８】



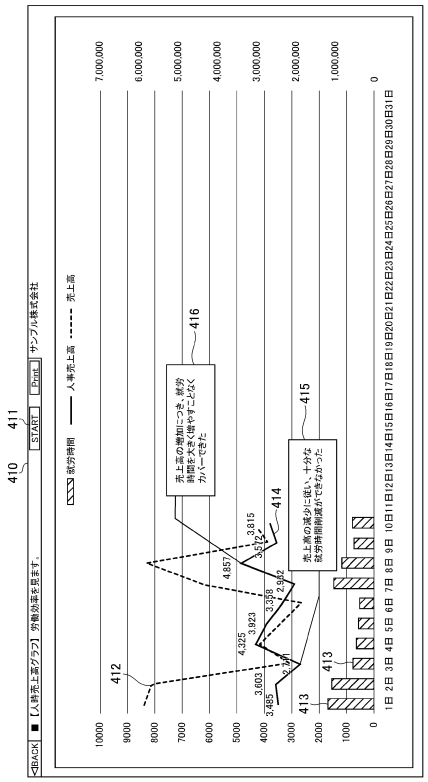
【図３９】



【図４０】



【図４１】


410
411
<BACK
■【人時売上高グラフ】労働効率を見ます。
START
Print
サンプル株式会社
就労時間
人時売上高
売上高
412
413
414
415
416
売上高の増加につき、就労時間数を増やすことなくカバーできた。
売上高の減少に従い、十分な就労時間削減ができなかった。
10000
9000
8000
7000
6000
5000
4000
3000
2000
1000
0
7,000,000
6,000,000
5,000,000
4,000,000
3,000,000
2,000,000
1,000,000
0
4,857
4,325
3,823
3,603
3,485
3,815
3,572
3,366
2,942
2,401
1日 2日 3日 4日 5日 6日 7日 8日 9日 10日 11日 12日 13日 14日 15日 16日 17日 18日 19日 20日 21日 22日 23日 24日 25日 26日 27日 28日 29日 30日 31日

フロントページの続き

(56)参考文献 特開２０１９－０２８５０１（ＪＰ，Ａ）
特開２００７－３２３６８０（ＪＰ，Ａ）
米国特許出願公開第２０１９／０２５１７３１（ＵＳ，Ａ１）
平井 明夫 ほか著，仕事の現場で即使える！ Excelビジネスデータ分析 初版，第1版，東京：株式会社技術評論社，2010年11月05日，p. 298-301，ISBN 978-4-7741-4401-6

(58)調査した分野 (Int.Cl.，ＤＢ名)
Ｇ０６Ｑ １０／００ － ９９／００
Ｇ０６Ｆ ３／０４８